にっぽん子ども・子育て応援団

2019年度
地域まるごとケアプロジェクト

報告書

公益財団法人 さわやか福祉財団　公益財団法人 さわやか福祉財団　委託事業

はじめに

公益財団法人さわやか福祉財団の委託事業である、地域まるごとケア・プロジェクト 2019 年度の活動をご報告申し上げます。

2015 年に公益財団法人さわやか福祉財団から、地域包括ケアにおける地域連携の可能性を探り、既存の制度にとらわれない地域福祉・地域づくりに向けた提案・周知啓発を子ども・子育て分野から行う事業を委託され、2017 年度で第 1 期を終了いたしました。さらに 2020 年度までの 3 年間、事業継続を受託、地域まるごとケア・プロジェクトを推し進めていくことになりました。

「もっと子育てしやすい社会に！」と 2009 年に立ち上がったにっぽん子ども・子育て応援団が、なぜ高齢者支援・介護保険行政にもヒアリングを行うのか。初年度はそこから説明を行う必要がありました。しかし、5 年の月日の流れの中で、子ども・子育ても当たり前のように地域保健福祉計画の対象として考えられるようになりました。

その一方で重篤な児童虐待事件が相次ぎ、児童福祉法および児童虐待防止法の改正にもつながりました。痛ましい虐待をなくし親子を救うため、地域で孤立しがちな乳幼児親子を、それぞれのニーズに合わせて取りこぼしなく、親子の生活圏内で包括的に継続的支援を行い、虐待の発生を防ぐ「予防的支援」ができる体制づくりが喫緊の課題となっています。

2018 年に続いて 2019 年もこれまでにない天災続きでした。台風 15 号と 19 号、さらに続いた豪雨で亡くなられた方々、被災なさった方々に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

ヒアリングと地域人材交流研修会でお邪魔した自治体は、累積で 52 となりました。どの自治体にも「ともに同じ地域で暮らす仲間として何ができるか」と、アクションを起こし、地域の拠点や取り組みを展開、行政を巻き込んで、お互いの腕も腹も知り合いながら信頼を積み重ねて行く人々の姿がありました。一見垣根のない、ごちゃまぜの緩やかな居場所。緩やかだからこそ、困りごとが引き寄せられての真剣勝負が常に潜みます。見立てのプロフェッショナルが必要なところにつなぐ、実のあるネットワークが各地で展開されている様子には頼もしささえ感じられます。

地域ぐるみで支え合う子育て環境づくり、地域まるごとケアの実現を加速させる、市民発の地域の取り組みが各地で始まっています。このプロジェクトが、発展の一助になれれば幸甚です。

にっぽん子ども・子育て応援団では、2012 年度からひとつの目標を掲げて取り組んでいます。家族まるごと、地域全体で支え合うことを目指す今回の調査が、応援団の目標達成に向けた、重要なテーマと重なる理由として、ここに掲げておきます。

にっぽん子ども・子育て応援団の目標
すべての子どもたちが、家族の愛情に育まれ、
また、子ども同士の積極的な関わり合いの中で
そして、地域や社会の多くのおとなたちの慈しみの中で、
心豊かに成長できる環境を保障すること
※「子どもは家族が育てるのか、社会が育てるのか」というとらえ方ではなく、子どもを真ん中において、子どもの成長にとって不可欠な、家族、子ども同士の関わり、地域や社会の多くの人との関わり、それぞれが大切な役割を果たせるよう支えるという考え方に立つことが重要です。

今回、自治体の行政担当者や NPO 市民活動団体のみなさまが、その調査趣旨をご理解くださり、ヒアリング先の紹介からヒアリング日程の調整までを、地域人材交流研修会の会場やテーマ選定から当日の運営までを担ってくださったこと、地域人材交流会に多くの方が参加してくださり、闊達な意見交換をしてくださったことに、心から感謝申し上げます。

2020 年 3 月

にっぽん子ども・子育て応援団

もくじ

調査概要・・・ 7

第１期地域まるごとケア・プロジェクトから継承するキーワード・・・ 10

にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起・・・ 12

にっぽん子ども・子育て応援団からの提案・・・ 17

2019 年度先進自治体調査ヒアリング調査概要 ・・・ 20

2019 年度地域人材交流研修会開催概要 ・・・ 22

2019 年度のまとめ　にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

いのちを守りたい・・・ 30

2019 年度のまとめ　にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

見えてきた！　市民発　ごちゃまぜ　真剣　地域ぐるみでみんなまるごとケア・・ 34

地域まるごとケアを進めるヒント・・・ 35

市民発　ないものは自分たちでつくる・・・ 36

人と人とをつなぐ　ごちゃまぜのよさ・・・ 38

真剣　多方面と繋がる重層的ネットワークがセーフティネットに・・・ 39

地域ぐるみで　みんなまるごとケア・・・ 40

人間サイズの規模でつくる協働のまちづくり・・・ 42

ヒアリング調査票・・・ 43

先進自治体調査

　富山県　南砺市　砺波市・射水市の市民活動団体・・・ 46

　岐阜県　大垣市・・・ 56

　岡山県　総社市 ・・・ 62

　広島県　福山市 ・・・ 72

地域人材交流研修会参加者アンケートまとめ

　北海道　札幌市・・・ 78

　山形県　山形市・・・ 80

　茨城県　水戸市・・・ 82

　岐阜県　大垣市・・・ 83

　福井県　敦賀市・・・ 85

　長崎県　佐世保市・・・ 86

３年間の調査からのまとめ・・・ 87

2019 年度報告会 ・・・ 97

　基調講演・・・104

　報告と提言・・・108

　参加者アンケート・・・123

2019年度 地域まるごとケア・プロジェクト

地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と
地域人材交流研修会開催報告書

調査概要

地域全体の福祉を考えたとき、同じ地域で暮らすもの同士の支え合いが自然に行なわれているのが望ましく、実際に人々の暮らしを支える資源はシームレスである。高齢者対策と子ども・子育て支援対策、障がい児・者対策、生活困窮者対策など、公的制度によってそれぞれの支援メニューは分断されているが、困りごとを抱える人や家庭に求められる支援もまた、シームレスである。地域での暮らしを考えたとき、制度によって分断されたこれらを、困りごとを抱える人や家庭の実情に合わせてフレキシブルに利用できることが求められているのではないだろうか。

介護保険制度から生まれた「地域包括ケア」という考え方は、介護の世界に留まらず、地域で暮らすすべての人々に広げられるべきではないか。制度によって分断された各種支援事業を、地域で暮らす人々をまるごと包み込むように利用していけるようになることこそ、地域での暮らしの実態にふさわしい仕組みになるのではないだろうか。

地域包括ケアを全世代に向けてとらえ、実施していくことを＊「地域まるごとケア」と名付け、これを実現させていくために、子ども・子育て支援における利用者支援事業などの実態を把握、目指す方向性を探りながら、生活支援コーディネーターや生活困窮支援コーディネーターなど、地域での暮らしを支える他の専門職との連携についても、提案していきたい。

地域まるごとケア

＊ 地域まるごとケア：東近江市永源寺診療所所長の花戸貴司さんが、三方よし研究会が目指すものとして掲げているのが「地域まるごとケア」。「年老いても、認知症になっても、独り暮らしであっても安心して生活ができる地域」を作るには、「我々専門職が提供する「地域包括ケア」と、非専門職が支えあっている「互助」を地域の中でつなぎあわせること」、さらに「これらのスキマをうまく埋める「地域まるごとケア」ができれば安心して生活できる地域になると信じている」。にっぽん子ども・子育て応援団では、「地域包括ケア」を赤ちゃんから高齢者まで、地域で暮らすすべての人々に向けた取り組みとしようという目標を掲げていることから、花戸さんの許可を得て、今回の 3 年間の取り組みで目指したい姿として、「地域まるごとケア」を使うこととした。

第 1 期地域まるごとケア・プロジェクトの概要

1 年目（2015 年度）は、全世代に向けた地域連携による地域まるごとケア先行事例実態把握を行ない、その調査を報告する会を開催、地域連携についての提案と周知・啓発を図る。
調査自治体：北海道北見市、岩手県大船渡市、東京都世田谷区、三重県名張市、滋賀県東近江市、島根県雲南市、香川県高松市、大分県臼杵市

2 年目（2016 年度）は、経年的状況把握とともに、地域連携による地域まるごとケアの周知と啓発のため地域福祉人材の交流をも兼ねた勉強会を複数回、場所を変えて開催する。
調査自治体：北海道河西郡芽室町、宮城県仙台市、神奈川県藤沢市、愛知県知多市、岡山県勝田郡奈義町、高知県、福岡県北九州市、大分県豊後高田市
地域人材交流研修会開催自治体：北海道北見市、宮城県仙台市、愛知県名古屋市、福岡県福岡市

3 年目（2017 年度）は、子育て支援コーディネーターと生活支援コーディネーターなどの連携に着手し始めた自治体を、地域まるごとケア先進自治体として調査、交流会や勉強会を開催し、全国的な普及を目指す。
調査自治体：北海道夕張市、福島県いわき市、東京都文京区、石川県金沢市、大阪府豊中市、兵庫県明石市、長崎県長崎市、沖縄県島尻郡南風原町
地域人材交流研修会開催自治体：秋田県秋田市、東京都清瀬市、兵庫県尼崎市、香川県高松市

各年度、全国 8 カ所の自治体でヒアリングを行い、2016 年度、2017 年度は全国 4 カ所で地域人材交流研修会を開催、各年度ごとにまとめの報告会を東京で開催した。

・第 1 期プロジェクトメンバー：にっぽん子ども・子育て応援団運営委員
高祖常子（NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）
重富健太郎　髙木梨絵子（日本労働組合総連合会生活福祉局）
山田麗子（遊育編集長）
にっぽん子ども・子育て応援団事務局
青木八重子、當間紀子
さわやか福祉財団：澤　春生
アドバイザー：牧野カツコ（にっぽん子ども・子育て応援団運営委員　NPO 法人高齢社会をよくする女性の会）
アシスタント：葦澤美也子、新真依子

第 2 期地域まるごとケア・プロジェクトの概要

第 1 期プロジェクトを経て、高齢および子育てをつなぐ形で地域づくりや地域福祉を進める自治体も見えてきたところから、自治体へのヒアリングと地域人材交流研修会の開催を行い、地域保健福祉およびまちづくりに子ども・子育ての視点を盛り込み、子ども・子育てにも目配りをした実践を積み上げていくこと、その周知と啓発を進めていきたい。

当初予定では「子育て支援コーディネーターと生活支援コーディネーターなどの連携に着手し始めた自治体を、地域まるごとケア先進自治体として調査」の予定であったが、利用者支援事業・特定型を進める自治体が多く、地域連携を生活支援コーディネーターとともに行なえる環境にある自治体は数少ない。これまでと同様、地域包括および子育て世代包括ケアの先進自治体であるとともに、厚生労働省の「我が事・丸ごと」地域共生社会推進本部が進めようとしている地域福祉計画策定と推進の努力義務化に伴う形で、地域自治による地域福祉計画の推進を図ろうとしている自治体をピックアップ、多職種多分野の地域連携の実際を探っていく。

地域連携による地域まるごとケアの周知と啓発のため、地域福祉人材の交流をも兼ねた勉強会を複数回、場所を変えて開催。人が集まりやすくカウンターパートがいる自治体を選ぶ。

4 年目（2018 年度）は地域福祉計画を推進するとともに、子ども・子育て支援に熱心に取り組んでいる自治体を先進自治体として調査、交流会や勉強会の回数を増やして、さらなる普及を目指す。
ヒアリング自治体：北海道千歳市、岩手県陸前高田市、埼玉県越谷市、新潟県上越市
地域人材交流研修会開催自治体：宮城県気仙沼市、東京都墨田区、石川県白山市、大阪府富田林市、福岡県大野城市

・第 2 期プロジェクトメンバー：にっぽん子ども・子育て応援団運営委員
高祖常子（認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）
鶴見梨絵子・千葉梢（日本労働組合総連合会生活福祉局）
山田麗子（遊育編集長）
にっぽん子ども・子育て応援団事務局
青木八重子、當間紀子
アドバイザー：牧野カツコ（にっぽん子ども・子育て応援団運営委員　NPO 法人高齢社会をよくする女性の会）
アシスタント：葦澤美也子、新真依子、小山麗子、堀田康子

第 1 期地域まるごとケア・プロジェクトから継承するキーワード

2015 年度ヒアリング終了後に、全メンバーで結果をシェアし、提言につなぐためのキーワードを出し合うワークを行った。第 2 期地域まるごとケア・プロジェクトでも、このキーワードをベースに、先進自治体調査及び地域人材交流研修会を進めていく。

課　題

地域福祉、地域包括に子ども・子育て支援が入っていない。
子育て支援にはお金がつかない。
旧住民、新住民、仮住民、転勤族。
地縁づくり、組織化の困難さ。
人口規模による難しさ（人口が多過ぎても少な過ぎても困難）。
企業の支援が見えない。

提案につながるキーワード

生涯現役＝全員参加（赤ちゃんから高齢者まで）の地域づくり。
多世代が集う居場所を中心としたコミュニティ形成。
地域に張り巡らされた重層的なネットワーク。
誰もが納得、参加していると感じられる一体感の醸成。
地域で“○○をする”合意形成。

立ち上げ時と継続、時機に合ったキーパーソンの存在。
行政、NPO、企業、地縁団体などをつなぐコーディネーター。

最大の課題は子ども・子育てに関する
地域の人々の理解

一連のヒアリングから見えてきたのは、やはり地域の方々に子ども・子育てのおかれた現実を知ってもらうことと、理解してもらうことの大切さ、そこに至るまでの難しさである。

小学生に向けた遊びのプログラムや、冒険遊び場運営への参加、放課後児童クラブや幼稚園の延長保育運営、子育てひろばの運営など、多くの地域自主組織で、地域ぐるみで子どもを育てる取り組みが行なわれており、地域の重要課題として、子ども・子育てが意識されていた。多世代交流や子育て家族の地域デビューにつながる取り組みを進めている子ども・子育て支援の現場も多い。しかし、こうした先進的な取り組みを行なうところでさえ、長年実施して来たプログラムの創設理念が失われ曲がり角に来ているなど、運営体制や現状把握に課題を抱えるケースもあった。

子ども・子育ての現実を知って理解してもらうために、何が出来るだろうか。

地域づくり、地域福祉を考える場合に、そこに子ども･子育て支援の視点を入れていくこと、刻々と変化する現状については、常に各方面へ働きかけ、訴え続けていくことが肝要だと考える。

困っているのは、高齢者も障がい者も難病者も、みな同じである。多世代を巻き込むコミュニティづくりを目指せるといい。

押さえておきたい 2 つのキーワード

・生涯現役＝全員参加の地域づくり。

・行政、NPO、企業、地縁団体などをつなぐコーディネーターの存在。

にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

子ども・子育ても、地域の課題です
どうか、手を貸してください

にっぽん子ども・子育て応援団の目標

すべての子どもたちが、家族の愛情に育まれ、
また、子ども同士の積極的な関わり合いの中で
そして、地域や社会の多くのおとなたちの慈しみの中で、
心豊かに成長できる環境を保障すること

※「子どもは家族が育てるのか、社会が育てるのか」というとらえ方ではなく、
子どもを真ん中において、子どもの成長にとって不可欠な、家族、子ども同士の関わり、
地域や社会の多くの人との関わり、
それぞれが大切な役割を果たせるよう支えるという考え方に立つことが重要です。

地域の課題は分野を超えて起きている

・例えば、子育て家庭と高齢者家庭の困りごとは案外似ている
→買い物に行けない、外出しづらい、孤立しやすい、
食事もままならない、身の回りのことに手がまわりづらいなど

・高齢者・障がい者とともに妊婦・乳幼児・子どもも災害時の要援護者
→避難しづらい、避難先で個別対応が必要
☆実は乳幼児家庭も災害時の要援護者
それなのに、要援護者名簿は高齢者・障がい者のみが対象。
避難所としても福祉避難所の設定はあるが、
乳幼児向けに考えている自治体は少ない。

＜参考＞災害時の要援護者

- 障害者（肢体不自由者、知的障害者、内部障害者、視覚障害者、聴覚障害者）
- 傷病者
- 体力の衰えた、あるいは認知症の高齢者
  （自分自身で避難が出来る高齢者は災害弱者として扱わない場合が多い）
- 妊婦（健常者に比べて重い保護を必要とする）
- 乳幼児・子ども（健康でも理解力・判断力が乏しい）
- 外国人（日本語が分からない）
- 旅行者（その場所の地理に疎い）

地域での子ども・子育て支援が大切な理由

子ども・子育ての現実を知ってください

子育てという営みには、時間も手間も、お金もかかる

- 子ども・子育ての現場は、常に新米親が誕生し、彼らにこれまでの知見を指し示し、伝承していかなくてはいけない。
- 例えるならば、毎年新入生が入って来て、常に新しいクラス編成になる小学校や保育所、幼稚園と同じ。常に、一から人を育てて行くシステムにしなくてはいけない。子どもは常に成長し続け、状況も刻々と変わっていくから、親もそれへの対応を迫られる。だから、一度作ってシステムが回り始めたら、それでオシマイというわけにはいかない。
- ただし、誰もが人生の先輩として、後輩を支える役に回ることが出来る。親同士だけでなく、地域の人々も入って、「一緒に」場を作ったり、イベントを行なったりすることで、子育ての伝承のみならず、さまざまなことを伝え合うことが出来る。

自分自身に必要な情報も仲間も、自ら求めていかないと得られない現実

- 何が必要で、どこに行けば得られるのか、お手本に巡り会えずにおとなになる。
- ご近所付き合いも、気軽に相談出来る相手との出会い方も、わからない。
- わが子を抱くまで、赤ちゃんを抱いたりおむつを替えたりしたことのない人が増えている。
- 子どもとの暮らしは、親だけでは成り立たず、人の輪の中にあって安定する営み。
- かつては大家族で暮らし、地域の見守りや手助けもあったが、今はない。
- 地域の人々に見守られ支えられて、親も子どもも育つことができる。

今も昔も、そこのところは変わらない。

親も子どもも、一人一人違うから

- 妊娠・出産を経た瞬間に、ベテランさながらの親になれる人は、いない。
- 周囲の方々に支えられ、見守られて、親になっていく。
- 子どもは一人一人違う。上の子の子育て経験だけで、次の子の子育ては難しい。
- 子ども一人一人に合わせた、新たなパーソナルプランが必要。

子育てコミュニティが子どもの命を守る

- 虐待は、さまざまなことが複合的に絡み合って、発生する有形無形の暴力。
- 虐待の要素：情報からの疎外、コミュニティからの孤立、経済的困難。
- さまざまな理由から、子育て家庭が孤立しやすくなっている。
- 産前産後の母親の置かれた状況によっても、事態は深刻に陥りやすい。
- コミュニティをつくらないと子どもの命に関わる状況になっている。

どうか、手を貸してください

- 子どもとの暮らしは人の輪の中にあって、ようやく安定する。
- 妊娠・出産を経た瞬間に親になれる人なんていない。
- 親も、周囲の方々の支えと見守りの中で親に育っていきます。
- お互い話せば、きっと分かりあえるはず。
- どうか、子どもとの暮らしをつくるために手を貸してください。

地域の中で、手を組もう

- 地域包括ケアに子ども・子育て家庭も、障がいも難病も、
  生活困難も入れてください。
- 地域包括ケアと子育て世代包括ケア、地域の中で手を組めます。
- 軽度認知症の人も赤ちゃんと留守番が出来る。
  昔とった杵柄で、新米ママに抱っこやおんぶ、あやし方を教えることが出来る。

☆なにより、乳幼児や子どもと一緒に過ごすと、認知症の人は元気になれる。
顔の見える関係の中での、子どもの笑顔、笑い声は、地域を明るくしてくれる。

にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

赤ちゃんから
ばあば、じいじまで、
家族まるごと、
地域で支え合おう

地域まるごとケアを進めるヒント

- 地域の困りごとに、そこで暮らす人々が知恵を出し合う。
  ともに暮らす地域だからこそ、生まれる工夫がある。
- お金で買えるサービス、例えば認知症の高齢者や障がい者は施設に、
  子どもは保育施設に“隔離”して済ませるのか、
  それとも誰もがお互いのことを慮りながら、地域で暮らしていくのか。
  どちらを選ぶのかは、私たち次第である。

2018 年度

2018 年度は北海道千歳市、岩手県陸前高田市、埼玉県越谷市、新潟県上越市、京都府亀岡市でのヒアリングとともに、「ともに地域で暮らす仲間として何ができるか」を共通テーマに分野を超えた地域人材の交流を目指し、宮城県気仙沼市、東京都墨田区、石川県白山市、大阪府富田林市、福岡県大野城市で地域人材交流研修会を開催した。

2018 年の夏は、大阪北部地震、西日本豪雨、台風 20 号と 24 号、北海道胆振東部地震と、これまでにない天災続きで、今年の一文字に「災」が選ばれたほどであった。

まちづくり、コミュニティが命を守る。2018 年は、災害による被害を完全に防ぐことはできなくても、平時からの地道な積み重ねが、ひとりでも多くの犠牲者を助け、また支えにもつながることを痛感した 1 年でもあった。

年度報告会では、基調講演を 2017 年度にヒアリングを行った豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さんにお願いをし、阪神淡路大震災被災で得た教訓を、大阪北部地震および台風 20 号での被災時に見事に生かしたまちづくり、誰も一人ぼっちにしない地域づくりについて、お話いただいた。後半の事例報告と提案では、東日本大震災被災地気仙沼市で、子どもの遊び場づくりを通して被災地支援とまちづくりを行ってきた一般社団法人プレーワーカーズの神林俊一さんと、大阪府富田林市金剛地区でまちづくり協議会委員としてまちづくりに取り組む金剛銀座商店会長の木全剛司さん、新潟県上越市健康福祉部高齢者支援課副課長の細谷早苗さんから、それぞれのお取り組みについてお話いただいた。質疑応答では、シニア層に地域で活躍してもらうにはどうすればよいかという質問が寄せられ、豊中市と気仙沼市での取り組みが紹介された。

コミュニティが命を守る。地域まるごとケア・プロジェクトを進める上で、重点的に捉えている視点でもあり、来年度以降も、欠かさずにいたい。

2018 年度地域まるごとケア・プロジェクト報告会

基調講演は、豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さん

2018 年度のまとめ

にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

子ども・子育ても、地域の課題です
どうか、手を貸してください

地域保健医療福祉に子ども・子育ての視点を
今起きている問題を見える化する
あなたの子どもの未来は誰がみる？

にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

コミュニティは命を守る

地域まるごとケアを進めるヒント

○地域の課題は分野を超えて起きている
複合課題を地域で支える全世代型、多機関型の地域包括ケアシステム
部署間の連携を強めるための仕掛け

○さまざまな人を巻き込み重層的なネットワークを推進
語り合いから生まれる相互理解
地区再生に向けた
住民参画の富田林市金剛地区まちづくり推進会議
共生のまちづくりに向けた協議の場づくり
地域を豊かに支える重層的ネットワーク

○その人の能力を発揮できる場の提供と工夫　地域に資源は眠っている
支援の循環
高齢者虐待防止ネットワークに子ども・子育ての視点を

○その人の困りごとに寄り添うサポート・プログラムの構築
転入者を迎え入れるウエルカムプログラム
育児のスタート期を伴走するホームスタート

○人間サイズの規模でつくる協働のまちづくり
地域の課題は地域で解決―地域自主組織の取り組み

○東日本大震災被災地から学ぶ地縁の再編・再生・新生

災害公営住宅に地域の交流拠点
陸前高田市災害公営住宅市民交流プラザ
のびのび遊べる遊び場が地域の交流拠点に
面瀬川ふれあい農園

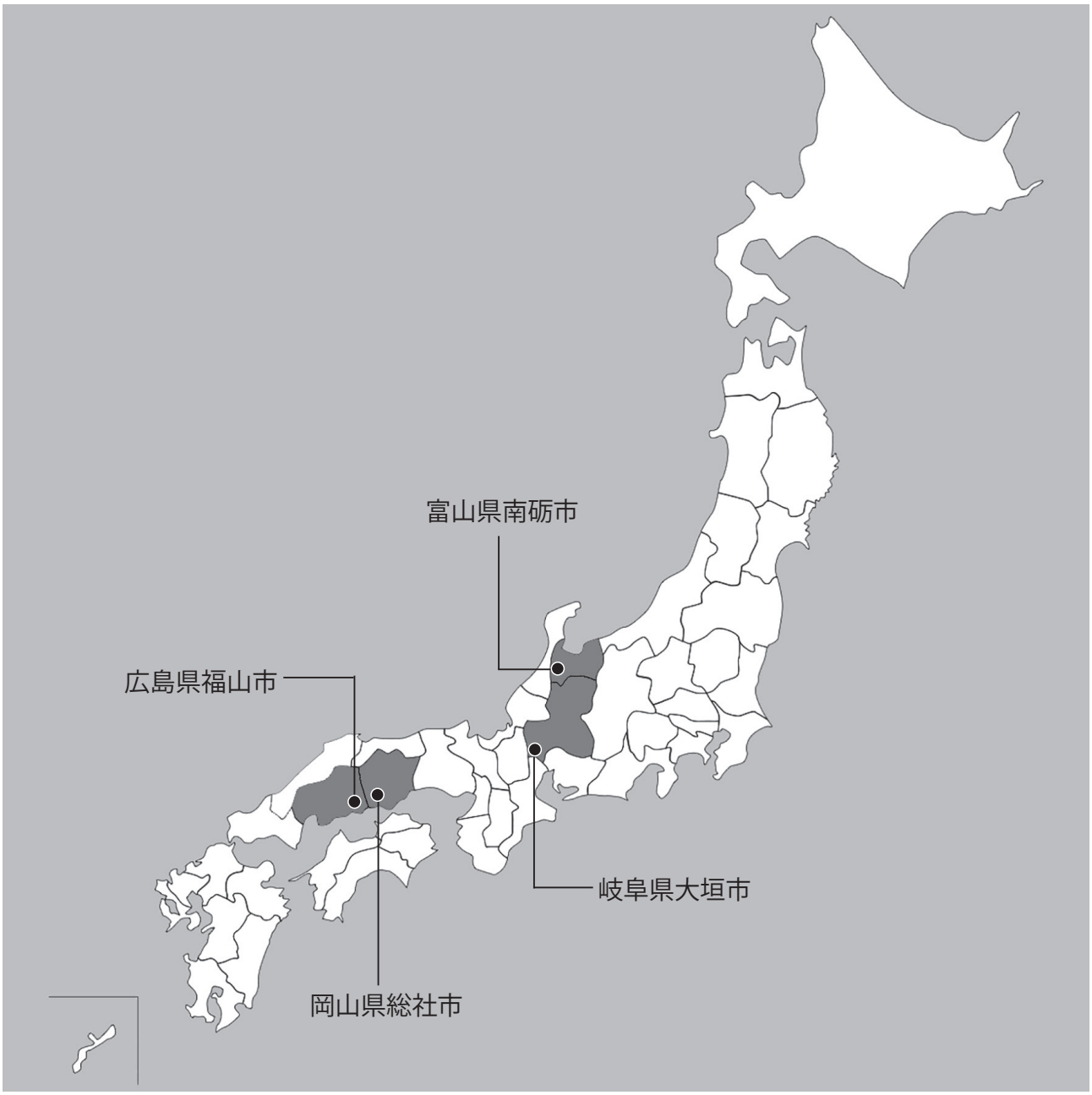
2019 年度先進自治体調査ヒアリング調査概要

2019 年度は富山県南砺市・砺波市・射水市、岐阜県大垣市、岡山県総社市、広島県福山市でのヒアリングとともに、「ともに地域で暮らす仲間として何ができるか」を共通テーマに分野を超えた地域人材の交流を目指し、北海道札幌市、山形県山形市、茨城県水戸市、岐阜県大垣市、福井県敦賀市、長崎県佐世保市で地域人材交流研修会を開催した。

【ヒアリング調査概要】
☆先進自治体の実態把握調査

・先駆的事例候補：地域福祉計画の策定と小地域福祉の推進、子育て支援における先進的な取り組みがあることなどを、準備調査として各自治体の状況をウエブなどで調べた。

・ヒアリング結果を踏まえた各自治体の概要は別表の通り。



1. 岐阜県大垣市

古くから中山道や美濃路などの主要街道が通り交通の要衝であり、東西の経済・文化の交流点として栄えてきた大垣市だが、隣町で、人口減少により路線バスが廃線となる事態が発生。現在はわずかに人口が増加していても、いずれは人口減少による路線の廃止などが生じるのではないかという不安から、「移動支援」をテーマに地域人材交流研修会を開催した。

子育て支援には地元の NPO 法人との協働の元に、市民のニーズも汲み取りながら力を入れている。利用者支援事業は母子保健型と基本型。小学 2 年生以下の子どものいる世帯が申請すれば、市内の路線バスを親子で利用すると運賃が無料になる「親子お出かけバスチケット」を交付するなど、キメの細かい制度がある。

地域保健福祉については、これまでの縦割りから、世帯が抱える複合的な課題に対応でき、また、住民主体で取り組む地域共生社会の実現を目指そうとしている。

大垣市
特定非営利活動法人くすくす

2. 富山県南砺市と砺波市・射水市の市民団体

南砺市は平成 16 年 11 月 1 日に合併により現在の市となって、ちょうど 15 年になる。合併時の人口は6万人くらいだったが、年々減少傾向。少子化も進んでいる。ひと学年 300 人余りから 300 人を切る傾向。下りカーブをいかに緩くしていくか。第二次総合計画を策定していく中で、今後どのような事業を進めていくかが課題。これまで、人口減少および過疎化で、医療崩壊の危機に直面するなど、さまざまな困難を各方面への働きかけで乗り越えてきた。住民自治をやりたかった現市長が、「小規模多機能」という言葉に惹かれて、2 年半の準備を経て今年度から「小規模多機能自治」に取り組んでいる。

利用者支援事業は母子保健型で、市内7カ所に保育所併設型の子育て支援センターを配置、南砺市型「ネウボラ」推進事業としている。市内に出産できる施設がないため、妊娠 20 週以降に来所で交通費を申請してもらうこととした。この時期に面談できることのメリットも大きい。（小規模多機能自治推進ネットワーク会議メンバー）

富山県域で、ごちゃまぜと呼ばれる全世代型の居場所、富山型デイサービスが展開されており、南砺市にも「ほっこり南砺」や「だれでもハウス " めぐみ "」などがあるが、砺波市の「一般社団法人 Ponte とやま」および射水市の「特定非営利活動法人ふらっと」、「一般社団法人ガチョック」をヒアリングした。垣根のないごちゃまぜの居場所が実は、その垣根のなさゆえに地域の困りごとを引き寄せ、見立てのプロフェッショナルによって必要な機関などにつないでいることを実感した。

南砺市
一般社団法人 Ponte とやま
（砺波市）
特定非営利活動法人ふらっと
（射水市）
一般社団法人ガチョック
（射水市）

3. 岡山県総社市

2018 年度の西日本豪雨で被災したが、お隣の倉敷市真備町の甚大な被害に対し、被災した人々の避難先として受け入れを行った。

市としては、人口減少が進む周辺自治体に反して人口は増えている。子育て世代の就業状況は、就学前児童の6割、小学生の 8 割が共働き世帯で、保育所および放課後児童クラブの需要は増えている。「子育て王国そうじゃ」を標榜。利用者支援事業は母子保健型と特定型だが、市内6カ所のつどいの広場などで NPO 法人との連携で実施している訪問や相談事業など、きめ細かな地域子育て支援施策が子ども家庭の生活全体を支えている。また障がい者千五百人雇用施策を推進、特別支援学校在校中から障がい者の円滑な就労と定着に向けた支援を行なっている。全国屈指の福祉先駆都市を目指す。

行政主導ではなく、住民自身が主体となって地域課題に取り組む風土がある。地域保健福祉に関しても、市民活動団体や関係機関、企業などとの連携のもとに進めている。
（にっぽん子ども・子育て応援団自治体首長サポーター）

総社市
NPO 法人きよね夢てらす
子育て応援こっこ

4. 広島県福山市

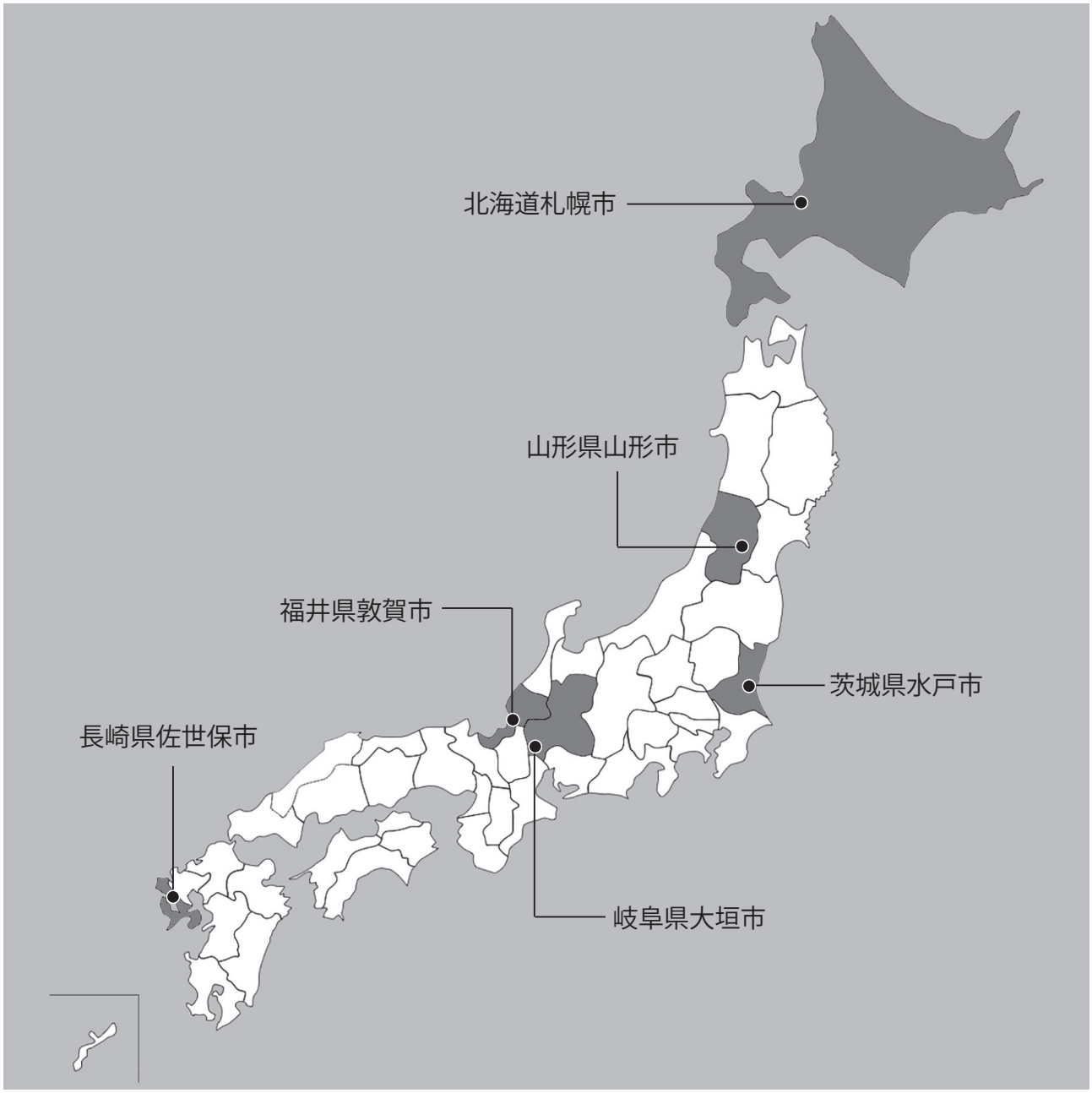
2017 年 6 月に子育て世代包括支援センターとして、子育て支援拠点事業所（商業施設、公立保育所・認定こども園、計 7 カ所）および母子保健主管課（5カ所）の 12 カ所に設置。利用者支援事業の基本型および母子保健型の併設型。福山型ネウボラの推進を子ども・子育て支援の中心に置くべく、部署名をネウボラ推進課に変更、子ども・子育て支援事業計画および次世代育成支援行動計画を「ネウボラ事業計画」に改名する。高齢者保健福祉計画の中で、世代間交流の推進として高齢者と子どもの交流事業を明記している。

地域子育て支援拠点など法定の事業は市の直営だが、制度に収まり切らない部分は NPO 法人などが独自事業などを立ち上げ、支えている。福山市には生活困窮者自立支援センターがあり、庁内各部署および支援活動団体などと連携、縦割りになりがちな分野をつなぐ形で、生活に困難を抱える人々の生活支援を行なっている。

福山市
NPO 法人こどもステーション

2019 年度地域人材交流研修会開催概要

地域連携による地域まるごとケアの周知と啓発のため地域福祉人材の交流をも兼ねた地域人材交流研修会を、次の６カ所で開催した。今年度は、次期子ども・子育て支援事業計画策定、全世代型移動支援、地域連携、全世代型地域共生の居場所づくり、ダブルケア、地域の親子を支える総働に向けた分散型交流会など、テーマや構成にこれまでになかったものが登場した。



にっぽん子ども・子育て応援団　公益財団法人さわやか福祉財団委託事業

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in さっぽろ

——ともに地域で暮らす仲間として何ができるか

地域子育て支援拠点発 “地域連携”で親子を支える

参加費&保育料 **無料!**

重篤な児童虐待事件が相次ぎ、児童福祉法および児童虐待防止法の改正にもつながりました。痛ましい虐待をなくし親子を救うためには、虐待の早期発見や再発防止、関係機関の連携と並行して、地域で孤立しがちな乳幼児親子を、それぞれの多様なニーズに合わせて取りこぼしなく、親子の生活圏内で包括的に継続的支援を行い、虐待の発生を防ぐ「予防的支援」の体制を進める必要があります。特に、より身近なところで親子を支える「地域子育て支援拠点（通称：常設子育てサロン）」同士のネットワークを進め、お互いの質を高めつつ、様々な専門機関との連携を密にして地域のセーフティネットをさらに強化することは喫緊の課題です。地域子育て支援拠点と様々な専門機関との関係を紡ぎ「地域ぐるみで支え合う子育て環境づくり」を推進するために、札幌市内のあらゆる機関、人材と出会える交流会を企画しました。

日時：2019年12月22日（日）13:30〜17:00（受付開始13:00）

会場：北海道立道民活動センター かでる2・7 4階大会議室

（北海道札幌市中央区北2条西7丁目）

■対象：地域子育て支援拠点事業従事者、学生、子育て当事者、様々な立場で子ども・子育て支援にかかわる人、地域の人等

■定員：80名

■参加費：無料 ※要事前申し込み

■保育料：無料（生後6カ月以上 定員8名）※要事前申込み。

☆参加お申し込み方法

◆インターネットで

https://ssl.formman.com/t/blPq/

◆ファクシミリで　FAX:03-3269-3314

①氏名 ②所属 ③TEL ④メールアドレス

⑤保育の有無⑥懇親会参加の有無 を明記。

◆お問合せ先：にっぽん子ども・子育て応援団

info@nippon-kosodate.jp

◆主催：にっぽん子ども・子育て応援団

◆協力団体：NPO法人子育て応援かざぐるま

◆後援：札幌市 札幌市社会福祉協議会（申請中）

◆協力：NPO法人ねっこぼっこのいえ

さっぽろ子育てネットワーク

北海道大学教育学研究院子ども発達臨床研究センター

申し込みQRコード

にっぽん子ども・子育て応援団

☆プログラム☆

第1部パネルディスカッション 予防的支援

札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課長　田村博美さん

NPO法人子育て応援かざぐるま代表理事 山田智子さん

NPO法人ねっこぼっこのいえ代表理事 小林真弓さん

コーディネーター：さっぽろ子育てネットワーク代表 河野和枝さん

コメンテーター：北海道大学教育学研究院 子ども発達臨床研究センター准教授 川田 学さん

第2部分散交流会 地域子育て支援拠点発 地域連携

興味のあるコーナーで直接話を聞こう

①子育て世代包括支援センター ②利用者支援事業 ③児童相談所・家庭児童相談室 ④さっぽ・こども広場 ⑤地域教育相談 ⑥小児科医師 ⑦産後ケア事業・拠点での赤ちゃんふれあい講座等 ⑧こどものくらし支援コーディネート事業 ⑨こども緊急サポートネットワーク事業 ⑩さっぽろ子育てサポートセンター（ファミサポ）・ほっ・とプラザ（家事援助） ⑪DV 支援 ⑫ひとり親支援

ファシリテーション：山田智子さん、小林真弓さん

にっぽん子ども・子育て応援団　公益財団法人さわやか福祉財団助成事業

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト　地域人材交流研修会　in　やまがた

——ともに地域で暮らす仲間として何ができるか

みんなで考えっぺ 子どもが真ん中のまちづくり

参加費&保育料 **無料！**

「少子化」、「子育て家庭の孤立化」、「待機児童」などに対応するため、国や地域をあげて子どもや子育て家庭を支援する新しい環境を整えようと、消費税増税分から恒久財源を確保してスタートした子ども・子育て支援新制度。2015年度のスタートから4年が経ち、山形市でも策定・推進してきた子ども・子育て支援事業計画の次期計画を策定する時期になりました。一方、山形市では、社会福祉協議会を中心に、市民の困りごとに対して分野を超えた総合的な体制で対応しようと、分野にこだわらない、子ども・子育ても含めた丸ごと相談などの取り組みが進んでいます。地域でさまざまな分野、立場で活動するみなさんと一緒に山形市の子ども・子育てについて語り合い、次期計画にも活かせるようにと交流会を企画しました。

日時：2019年9月24日（火）13:30〜16:30（受付開始13:00）

会場：べにっこひろば多目的ルーム

（山形県山形市樋越22番地）

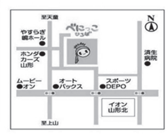
■対象：学生、子育て・介護などの当事者＆支援関係者、行政担当者、企業、子育てやまちづくりに関心のある方

■定員：80名

■参加費：無料 ※要事前申し込み

■保育料：無料（生後6カ月以上） 同室保育 定員：5名 ※要事前申し込み。

■懇親会：交流会終了後に場所を移動して開催 ※要事前申し込み。



☆参加お申し込み方法

◆インターネットで

https://ssl.formman.com/form/pc/GhrKDpZCBrtlqvLj/

◆ファクシミリで　FAX:03-3269-3314

①氏名 ②所属 ③TEL ④メールアドレス

⑤保育の有無⑥懇親会参加の有無を明記。

申し込みフォーム QRコード

◆お問い合せ先：にっぽん子ども・子育て応援団

info@nippon-kosodate.jp

【主催】にっぽん子ども・子育て応援団

【協力団体】NPO法人やまがた育児サークルランド

【後援】山形県　山形市（いずれも申請中）

にっぽん子ども・子育て応援団 NIPPON CHILDREN+PARENTS SUPPORTER

☆プログラム☆

開会あいさつ

第1部　話題提供　いま、地域で進む様々な取り組み

・山形市子ども・子育て事業計画のあらまし

山形市こども未来部こども未来課

・地域で進む丸ごと相談などの取り組み

山形市社会福祉協議会地域福祉課（調整中）

山形市民生委員児童委員連合会（調整中）

山形市子ども会育成連合会

やまがた育児サークルランド

第2部みんなで考えっぺ 子どもが真ん中のまちづくり

現状報告を受けて、みんなで考え、協議するワーク

ファシリテーター

NPO法人せたがや子育てネット　松田妙子さん

閉会あいさつ

にっぽん子ども・子育て応援団　公益財団法人さわやか福祉財団委託事業

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト　地域人材交流研修会　in　みと

——ともに地域で暮らす仲間として何ができるか

みんなで生きていく

参加費&保育料 **無料！**

地域包括ケアシステムは、高齢者が重度の要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう設計され、その実現を2025年としています。子ども・子育て支援でも、地域包括ケアシステムと同時期に開始された子育て世代包括支援センターの設置が進んでおり、家庭の課題が複雑化する中、地域包括ケアとの連携の必要性が叫ばれています。

分野を超えた支援者同士の連携を促すきっかけとして、子育てから高齢者、障害者の包括的支援に取り組む先駆的な事例から学び、参加者同士が出会い交流する研修会を企画しました。

ランチタイムもお弁当を召し上がりながら、交流を深められます。どうぞ奮ってご参加ください。

日時：2019年7月5日（金）10:30〜15:00（受付開始10:00）

会場：茨城県水戸生涯学習センター大講座室

（茨城県水戸市三の丸1-5-38）

■対象：学生、子育て・介護などの当事者、子育て支援・介護関係者、行政担当者、企業、子育てや地域共生社会に関心のある方

■定員：80名

■参加費：無料 ※要事前申し込み

■保育料：無料（生後6カ月以上1名あたり） ※要事前申込み。

■懇親会：交流会終了後に場所を移動して開催 ※要事前申し込み。

☆参加お申し込み方法

◆インターネットで

https://ssl.formman.com/t/blPq/

◆ファクシミリで　FAX:03-3269-3314

①氏名 ②所属 ③TEL ④メールアドレス

⑤昼食弁当注文の有無⑥懇親会参加の有無

⑦保育の有無を明記。

◆お問合せ先：にっぽん子ども・子育て応援団

info@nippon-kosodate.jp

◆主催：にっぽん子ども・子育て応援団

◆協力団体：NPO法人セカンドリーグ茨城

◆後援：茨城県　水戸市

茨城県社会福祉協議会

茨城新聞社

◆協力：茨城県水戸生涯学習センター

生活協同組合パルシステム茨城 栃木

申し込みQRコード

にっぽん子ども・子育て応援団

☆プログラム☆

開会挨拶　茨城県　水戸市

第1部　話題提供　ともに生きる

境町社会福祉協議会 染野ユミさん

社会福祉法人ユーアイ村理事長 藤澤利枝さん

NPO法人ハンズオン！埼玉 理事 西川正さん

第2部　グループワーク さあ！みんなで生きていこう！

1　話題提供からの学びシェア

2　地域の強み・よいところ

3　みんな、やってみよう！！

まとめ

にっぽん子ども・子育て応援団　公益財団法人さわやか福祉財団助成事業

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in おおがき

——ともに地域で暮らす仲間として何ができるか

子どもと共に築く地域！ 全世代の移動支援をともに考える

参加費&保育料 **無料!**

「誰もが、安心して移動出来ることは、人々や地域を元気にします。超高齢社会を迎え、ラストワンマイル（各家庭などの最終目的地を結ぶ）をカバーする「きめ細やかな」地域内交通ニーズが高まっています。同時に、公共交通空白地帯の増加に伴い、車を持たない・運転できない子どもとその保護者や若い世代も移動困難に陥っています。お互いの課題を共有するとともに、地域の実情にあわせた移動の仕組みをみんなで考え、地域まるごとで支え合うまちづくりをめざして行動するために、子育て世代から高齢者、障害者も包括的に支える先駆的取り組みから学び、さまざまな分野の方々が出会い交流する研修会を企画しました。

日時：2019年11月21日（木）13:30〜16:30（受付開始13:00）

会場：大垣市情報工房 セミナー室

（岐阜県大垣市小野4-35-10）

■対象：学生、子育て・介護などの当事者＆支援関係者、行政担当者、企業、子育てやまちづくりに関心のある方

■定員：60名

■参加費：無料 ※要事前申し込み

■保育料：無料（生後6カ月以上） 定員：10名 ※要事前申し込み。

■懇親会：交流会終了後に場所を移動して開催

☆参加お申し込み方法

◆インターネットで

https://ssl.formman.com/t/Ouh8/

◆ファクシミリで　FAX:03-3269-3314

①氏名 ②所属 ③TEL ④メールアドレス

⑤保育の有無⑥懇親会参加の有無を明記。

申し込みフォーム QRコード

◆お問い合せ先：にっぽん子ども・子育て応援団

info@nippon-kosodate.jp

【主催】にっぽん子ども・子育て応援団

【協力団体】特定非営利活動法人くすくす

【後援】岐阜県 大垣市 岐阜県社会福祉協議会

大垣市社会福祉協議会（以上、申請中）

【協力】特定非営利活動法人泉京・垂井

にっぽん子ども・子育て応援団 NIPPON CHILDREN+PARENTS SUPPORTER

☆プログラム☆

開会あいさつ

第1部 話題提供 いま、移動支援の現状は

NPO法人コミュニティサポートスクエア理事長　杉浦陽之助さん

社会福祉法人岐阜羽島ボランティア協会理事長　川合宗次さん

NPO法人移動ネットあいち理事長 遠山哲夫さん

ファシリテーター：

NPO法人泉京・垂井副代表理事 神田浩史さん

第2部 さあ、同じ地域の仲間としてともに考えよう

現状報告を受けて、みんなで考え、協議するワーク

ファシリテーター：

特定非営利活動法人くすくす　安田典子さん

閉会あいさつ

にっぽん子ども・子育て応援団　公益財団法人さわやか福祉財団委託事業

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in つるが

——ともに地域で暮らす仲間として何ができるか

誰もが気軽に立ち寄れる ぬくもりのある居場所をつくろう

参加費&保育料 **無料!**

地域の子どもたちもお年寄りも、誰もが立ち寄れる多世代共生の居場所をつくろう。地域の乳幼児親子や子どもも気軽に立ち寄れる場づくりにはちょっとしたコツがあります。そこで、みなさまにコツをお伝えするべく子育て支援者と高齢者支援者との交流会を企画しました。地域のみんなでつくりあげる、赤ちゃんから高齢者までが集える居場所。どうぞご一緒に！

日時：2019年11月29日（金）13:00〜16:30（受付開始12:45）

会場：敦賀市粟野公民館大ホール

（福井県敦賀市御名53-1）

■対象：子育て・介護などの当事者、子育て支援関係者、高齢者居場所づくり関係者、生活支援コーディネーター、企業、居場所づくりに関心のある方

■定員：70名

■参加費：無料 ※要事前申し込み

■保育料：無料（生後6カ月以上1名あたり） 定員10名 ※要事前申込み。

■懇親会：交流会終了後に場所を移動して開催

☆参加お申し込み方法

◆インターネットで

https://ssl.formman.com/t/yVBA/

◆ファクシミリで　FAX:03-3269-3314

①氏名 ②所属 ③TEL ④メールアドレス

⑤懇親会参加の有無⑥保育の有無、保育を必要とするお子さんの性別、年齢を明記。

◆お問い合せ先：にっぽん子育て応援団

info@nippon-kosodate.jp

◆主催：にっぽん子ども・子育て応援団

◆協力団体：NPO法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ

◆後援：福井県 敦賀市

福井県社会福祉協議会

敦賀市社会福祉協議会

福井新聞社

申し込みフォーム QRコード

にっぽん 子ども・子育て 応援団

☆プログラム☆

第1部　話題提供

・多世代共生の居場所づくり

NPO法人かもママ理事長 河原廣子さん

みんなのお茶の間八三六事務局 熊谷誓成さん

一般社団法人プレーワーカーズ　神林俊一さん

ナビゲーター：

NPO法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ　理事長 林 恵子さん

第2部 グループワーク

・みんなで考える

世代を超えて誰もが立ち寄りたくなる場づくり

ファシリテーター：

一般社団法人プレーワーカーズ　神林俊一さん

にっぽん子ども・子育て応援団　公益財団法人さわやか福祉財団委託事業

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in させぼ

——ともに地域で暮らす仲間として何ができるか

地域でどう支える？ 育児と介護の同時進行 ダブルケア

参加費&保育料 **無料!**

家族だけでは対応しきれない暮らしの中の困りごと。たとえば、育児と介護が同時期に発生する「ダブルケア」。育児と介護、両方の不安や悩み、孤独感を抱え、子育て仲間にも介護仲間にも理解してもらえない辛さがあります。介護保険だけ、子ども・子育て支援だけでは支えきれません。必要なのは、それぞれの分野に関わる人々同士の連携です。複雑化する地域課題、子どもと子育て家庭も含めた家族まるごと、地域ぐるみで支え合うまちづくりについて、一緒に何が出来るか考えましょう。

日時：2019年11月15日（金）13:30〜16:30（受付開始13:00）

会場：佐世保市男女共同参画推進センター スピカ 研修室1

（長崎県佐世保市三浦町2-3）

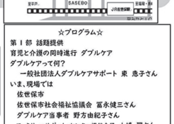
■対象：学生、子育て・介護などの当事者、子育て支援・介護関係者、行政担当者、企業、子育てやまちづくりに関心のある方

■定員：50名（保育定員 10名）

■参加費：無料 ※要事前申し込み

■保育料：無料（生後6カ月以上1名あたり） ※要事前申込み。

■懇親会：庶民の料亭ささいずみ 会費4000円（飲み放題付き） ※要事前申込み。17:00〜



☆参加お申し込み方法

◆インターネットで

https://ssl.formman.com/t/OnNh/

◆ファクシミリで　FAX:03-3269-3314

①氏名 ②所属 ③TEL ④メールアドレス

⑤保育の有無・懇親会参加の有無 を明記。

◆お問い合せ先：にっぽん子ども・子育て応援団

info@nippon-kosodate.jp

お申し込み用 QRコード

主催：にっぽん子ども・子育て応援団

協力団体：NPO法人ちいきのなかま

協力：NPO法人子どもと女性のエンパワメント佐世保

後援：長崎県 佐世保市 社会福祉法人佐世保市社会福祉協議会

にっぽん子ども・子育て応援団 NIPPON CHILDREN+PARENTS SUPPORTER

☆プログラム☆

第1部 話題提供

育児と介護の同時進行 ダブルケア

ダブルケアって何？

一般社団法人ダブルケアサポート 東 恵子さん

いま、現場では

佐世保市

佐世保市社会福祉協議会 冨永健三さん

ダブルケア当事者 野方由紀子さん

ファミリー・サポート・センター提供会員 山崎 翠さん

地域子育て支援拠点よんぷらこ 田渕真由美さん

山澄地域包括支援センター長 園田康訓さん

第2部 グループワーク

具体的な事例についてのケース検討会議

まとめ 地域資源を知る、つなげる、使う

地域人材交流研修会 in さっぽろ

＜事業概要＞
開催日時　2019 年 12 月 22 日（日）13：30 ～ 17：30
開催場所　札幌市北海道立道民活動センターかでる 2・7　4 階大会議室
参加者　　NPO/ 市民活動団体、地域包括支援センター、行政、社会福祉協議会、子育て当事者、フリースクール関係者、学生ほか
参加人数　59 名　保育　4 名
協力団体　NPO 法人子育て応援かざぐるま
後　援　　札幌市　札幌市社会福祉協議会

＜テーマ＞
「地域子育て支援拠点発　“ 地域連携 ” で親子を支える」

＜パネルディスカッション＞
パネリスト　田村博美さん　札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課長
山田智子さん　NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事
小林真弓さん　NPO 法人ねっこぼっこのいえ代表理事
コーディネーター　河野和枝さん　さっぽろ子育てネットワーク代表
コメンテーター　川田　学さん　北海道大学教育学研究院子ども発達臨床研究センター准教授

＜分散交流会＞
①子育て世代包括支援センター　②利用者支援事業　③児童相談所・家庭児童相談室　④さっぽ・こども広場　⑤地域教育相談
⑥小児科医　⑦産後ケア事業・拠点での赤ちゃんふれあい講座等　⑧子どものくらし支援コーディネート事業
⑨こども緊急サポートネットワーク事業　⑩さっぽろ子育てサポートセンター（ファミサポ）・ほっ・とプラザ（家事援助）
⑪ DV 支援　⑫ひとり親支援

＜企画趣旨＞
　重篤な児童虐待事件が相次ぎ、児童福祉法および児童虐待防止法の改正にもつながった。痛ましい虐待をなくし親子を救うためには、虐待の早期発見や再発防止、関係機関の連携と並行して、地域で孤立しがちな乳幼児親子を、それぞれの多様なニーズに合わせて取りこぼしなく、親子の生活圏内で包括的に継続的支援を行い、虐待の発生を防ぐ「予防的支援」の体制を進める必要がある。特に、より身近なところで親子を支える「地域子育て支援拠点（通称：常設子育てサロン）」同士のネットワークを進め、お互いの質を高めつつ、様々な専門機関との連携を密にして地域のセーフティネットをさらに強化することは喫緊の課題である。地域子育て支援拠点と様々な専門機関との関係を紡ぎ「地域ぐるみで支え合う子育て環境づくり」を推進するために、札幌市内のあらゆる機関、人材と出会える交流会を企画した。

＜事業の成果＞
　第 1 部では、「予防的支援」をテーマのパネルディスカッションで、札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課長から、子ども・子育て支援施策の方針やプログラムについての行政説明と、子育て支援 NPO に期待することを話していただいた後、地域子育て支援拠点および現場のニーズに沿ったきめ細かな活動を行う NPO 法人子育て応援かざぐるまおよび NPO 法人ねっこぼっこのいえの取り組み報告があり、北海道大学准教授のコメントで締めた。プログラムと当事者をつなぐのは地域、特に親子が羽を休める場でもある拠点の役割は予防的支援においても大きく、世代も立場も超えた多様な人々も集える場となっていくことが、親子を支える重層的なネットワークの構築にもなると示唆した川田准教授のコメントに共感する参加者は多かった。第 2 部は、札幌市内で当事者親子が必要に応じてつながり、支えとなる 12 の事業についての概要説明と、事業ごとのブースに分かれての分散交流会。保健所からは子育て世代包括支援センター、子育て支援課からは利用者支援事業、児童相談所からは相談および発達などに課題を抱える子どもへのサポート、といった具合に、それぞれの担当者と直に話して交流してもらった。12の事業および交流会運営に10の団体が関わるなど、開催を通じて市内外の多くの関係者のつながりを深めた交流会となった。北海道新聞の取材が入り、12 月 25 日付夕刊に掲載された。

札幌交流会

事業説明

分散交流会

地域人材交流研修会 in やまがた

＜事業概要＞

開催日時　2019 年 9 月 24 日（火）13：30 ～ 16：30
開催場所　山形市児童遊戯施設べにっこひろば　多目的ルーム
参加者　　NPO/ 市民活動団体、民生委員児童委員、主任児童委員、行政、社会福祉協議会、子育て当事者、学生、
　　子ども会育成会連合会、幼稚園教諭、保育士ほか
参加人数　24 名　保育　0 名
協力団体　NPO 法人やまがた育児サークルランド
後　援　　山形県　山形市

＜テーマ＞

「みんなで考えっぺ　子どもが真ん中のまちづくり」

＜話題提供者＞

荒木秀一さん　山形市こども未来部こども未来課長
佐藤佳代子さん　山形市社会福祉協議会地域福祉課福祉のまちづくり第二係主任
丹野美津子さん　山形市民生委員児童委員連合会主任児童委員研究部長
佐藤博之さん　山形市子ども会育成連合会長
野口比呂美さん　NPO 法人やまがた育児サークルランド代表

＜企画趣旨＞

子ども・子育て支援新制度は 2015 年度のスタートから 4 年が経ち、山形市でも策定・推進してきた子ども・子育て支援事業計画の次期計画を策定する時期になった。一方、山形市では、社会福祉協議会を中心に、市民の困りごとに対して分野を超えた総合的な体制で対応しようと、分野にこだわらない、子ども・子育ても含めた丸ごと相談などの取り組みが進んでいる。地域でさまざまな分野、立場で活動するみなさんと一緒に山形市の子ども・子育てについて語り合い、次期計画にも活かせるようにと企画した。

＜事業の成果＞

佐藤孝弘山形市長が開会挨拶のために駆けつけてくださった。

時期的に次期山形市子ども・子育て支援事業計画に向けてのニーズ調査が行われたところで、今回の交流会での意見やアイデアを、山形市民の意見として、素案作りの参考にしてもらえるタイミングでの開催であった。

NPO 法人せたがや子育てネット代表理事の松田妙子さんのコーディネートで、第 1 部は、山形市こども未来部こども未来課長から現行の子ども・子育て支援事業計画の概要と進捗状況をお話いただき、現場で進むさまざまな取り組みとして、社会福祉協議会福祉のまちづくり第二係が進めている厚生労働省のモデル事業でもある多職種連携による「誰でも相談」、主任児童委員らが進めている育児サークルの現状、赤ちゃんからお年寄りまでがかかわる子ども会の現状、そして NPO 法人による切れ目のない子ども･子育て支援の実際を話題提供。第 2 部では、話題提供を踏まえて、山形市の強み、生かしていきたいことを協議、「今すぐできること」「じっくり進めたいこと」「みんなで進めたいこと」「各々でやること」に分けてワークシートに張り出し、お互いのワークシートを見て歩く時間を設けた。どのグループも前向きな意見が出され、「今日は第 1 回市民版子ども・子育て会議だから第 2 回はいつ開催しましょうか」という提案もあった。

地元テレビ局 2 社と地元新聞社の取材が入り、夕方のニュースで開催の様子が紹介されたとともに翌 25 日の朝刊でも開催の様子が掲載された。

アンケートの回答回収率が 9 割を超える高さで、参加した人々の「子どもが真ん中のまちづくり」に寄せる思いが伝わってくるようであった。なお、同室保育を準備したが、子ども連れの参加はなかった。

市長挨拶からスタート

子どもを真ん中にまちづくりを考え中

地域人材交流研修会 in みと

＜事業概要＞
開催日時　2019 年 7 月 5 日（金）10：30 ～ 15：00
開催場所　茨城県立水戸生涯学習センター　中講座室
参加者　　NPO/ 市民活動団体、民生委員児童委員、主任児童委員、行政、社会福祉協議会、子育て当事者ほか
参加人数　24 名　保育　1 名
協力団体　特定非営利活動法人セカンドリーグ茨城
後　援　　茨城県　水戸市　茨城県社会福祉協議会　茨城新聞社

＜テーマ＞
「みんなで生きていく」

＜話題提供者＞
染野ユミさん　境町社会福祉協議会
藤澤利枝さん　社会福祉法人ユーアイ村　理事長
西川　正さん　NPO 法人ハンズオン！埼玉　理事

＜企画趣旨＞
　子育てから高齢者、障がい者の包括的支援に取り組んでいる先駆的な事例から学び、参加者それぞれが活動を見直す契機とする。
　子育て支援や若者支援にかかわる者が、未だつながりの少ない高齢者や障がい者福祉施設の方々との出会いの場をつくり、交流を図ることで、共通の課題の発見による協働や違いによる相互支援の可能性を検討する機会とする。また、現実的なコラボレーションを促すワークショップにより新たな事業の創出を促し、より包括的な地域支援システムの実現に寄与することを目的とする。

＜事業の成果＞
　2 部構成とし、第 1 部は、NPO 法人セカンドリーグ茨城理事長の横須賀聡子さんのコーディネートで、社会福祉協議会職員として分野横断的な地域福祉に尽力してきた染野ユミさんおよび、障がい児・者、高齢者施設および保育所運営を進め、人々が自然に交流できる場として、9 月に高齢者支援センター・子育て支援センターなどを 1 カ所に納めたユーアイまるごと支援センターをオープンさせる藤澤利枝さん、「お父さんのヤキイモタイム」など、場をつくることをきっかけに、地域の人と人とをつなぎ直す取り組みを手がけてきた西川正さんによる話題提供。第 2 部では、NPO 法人セカンドリーグ茨城副理事長の山根眞知子さんがファシリテーターを務め、アイスブレイクを兼ねた一言自己紹介により居住・活動地区別にグループ分けを行なった。グループワークでは、それぞれの活動などについて紹介し合ったのちに、みんなで一緒にできることはないか考え、アイデアを模造紙に記入、全体で共有した。いつも「もっと話がしたかった」という感想が多いワークショップだが、じっくりと自分自身の話をして、グループ内の人の話も聞く時間をしっかり設けたことで、まとめの議論が充実、全体に満足度の高い会となった。「みんなで生きていく」ことを実感してもらうべく、大変評価の高い就労支援 A 型作業所のクッキーを資料として配布、これも好評であった。セカンドリーグ茨城では、定期的にこうした機会を持ちたいとのこと。今後にも期待したい。

水戸市長の挨拶

パネルディスカッション

資料としてお配りしたクッキー

ワークショップ

ワークの手元

地域人材交流研修会 in おおがき

＜事業概要＞
開催日時　2019 年 11 月 21 日（木）13：30 ～ 16：30
開催場所　大垣市情報工房　セミナー室
参加者　　NPO/ 市民活動団体、地域包括支援センター、行政、社会福祉協議会、子育て当事者、学生、保育士ほか
参加人数　51 名　保育　0 名
協力団体　NPO 法人くすくす
後　援　　岐阜県　大垣市　岐阜県社会福祉協議会　大垣市社会福祉協議会

＜テーマ＞
「子どもと共に築く地域！　全世代の移動支援をともに考える」

＜話題提供者＞
杉浦陽之助さん　NPO 法人コミュニティサポートスクエア理事長
川合宗次さん　社会福祉法人岐阜羽島ボランティア協議会理事長
遠山哲夫さん　NPO 法人移動ネットあいち理事長

＜ファシリテーター＞
神田浩史さん　NPO 法人泉京・垂井副代表理事
安田典子さん　NPO 法人くすくす理事長

＜企画趣旨＞
「誰もが、安心して移動出来ること」は、人々や地域を元気にする。超高齢社会を迎え、ラストワンマイル（各家庭などの最終目的地を結ぶ）をカバーする「きめ細やかな」地域内交通ニーズが高まっている。同時に、公共交通空白地帯の増加に伴い、車を持たない・運転できない子どもとその保護者や若い世代も移動困難に陥っている。お互いの課題を共有するとともに、地域の実情にあわせた移動の仕組みをみんなで考え、地域まるごとで支え合うまちづくりをめざして行動するために、子育て世代から高齢者、障害者も包括的に支える先駆的取り組みから学び、さまざまな分野の方々が出会い交流する研修会を企画した。

＜事業の成果＞
市内の大学で公共政策を学ぶ 2 年生と 3 年生が 13 名参加、後半のグループワークで活躍してくれた。このほか、県や市、近隣の自治体の福祉や子育て支援の担当職員、まちづくりや子育て支援系の市民団体の参加があったほか、車椅子利用者本人や重度心身障害児の親の会からも参加があった。また、大垣市子育て支援部長が開会挨拶に駆けつけてくださった。
第 1 部では、移動支援の現状について、食事つき学習支援をはじめ社会とつながりをもてない若者支援などに取り組む杉浦さんからは、距離や関係性により場に来られる子どもと来られない子どもがいることから、家族機能の社会化という視点で移動支援をみてはどうかと提案がなされ、岐阜羽島で高齢・障がい・社会的養護の子どもたちの移動支援にかかわる川合さんは、たまり場と送迎、移動支援は切っても切れない関係にあると指摘。南医療生協の事業所「おたがいさまみなみ」と愛知県全域をカバーする移動ネットあいちの理事長も務める遠山さんは、「移動＝住民の足の確保」はすべての人の社会参加の足がかり＝まちづくりのキーとしても重要で、継続のための本気の施策・取り組みが必要であると訴えた。
これらを受けて、第 2 部では 7 つのグループで、どのような取り組みを進めればいいのか協議、シェアを行った。改めて人と人とのつながり、交流を深めつつ、今ある地域資源、既存サービスをどう使いこなすかに知恵をめぐらせ、緩やかなつながりのなかで、誰一人取り残さない、分野も職種も超えて包括的に取り組むこと。移動支援がテーマの交流会でも、目指すところ、議論の着地点は同じだった。

パネルディスカッション

グループワーク

地域人材交流研修会 in つるが

＜事業概要＞
開催日時　2019 年 11 月 29 日（金）13：00 ～ 16：30
開催場所　敦賀市粟野公民館大ホール
参加者　　NPO/ 市民活動団体、地域包括支援センター、行政、社会福祉協議会、子育て当事者、フリースクール関係者ほか
参加人数　40 名　保育　0 名
協力団体　NPO 法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ
後　援　　福井県　敦賀市　福井県社会福祉協議会　敦賀市社会福祉協議会　福井新聞社

＜テーマ＞
「誰もが気軽に立ち寄れる　ぬくもりのある居場所をつくろう」

＜話題提供者＞
河原廣子さん　NPO 法人かもママ理事長
熊谷誓成さん　みんなの茶ノ間八三六事務局
中村俊一さん　一般社団法人プレーワーカーズ理事

＜ファシリテーター＞
林　恵子さん　NPO 法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ理事長
中村俊一さん　一般社団法人プレーワーカーズ理事

＜企画趣旨＞
　地域の子どもたちもお年よりも、誰もが気軽に立ち寄れる多世代共生の居場所をつくろう。成り立ちは違うが多世代が場をつくる携わる 3 つの先行事例から学び、多職種の方々と場づくりを考える。より具体的なイメージでお互いを知り会うグループワークを通して、地域に具体的アクションが生まれることを願って企画した。

＜事業の成果＞
　渕上隆信敦賀市長が、開会挨拶に駆けつけてくださった。市の子ども関連および高齢者関連部署からそれぞれ参加があったほか、近隣の自治体の福祉や子育て支援の担当職員、まちづくりや子育て支援系の市民団体、不登校を考える親の会からも参加があった。
　第 1 部では、地域子育て支援から、古民家を活用した地域共生の場づくり、さらにはシニアの地域活動応援までを手がける NPO 法人かもママ理事長の河原さん、地区集会で見えてきた、人口減少によって増える空き家に休耕田畑、単身世帯、難しくなる文化の伝承など地域の課題を解決に向けるべく立ち上げた活動拠点「みんなの茶ノ間八三六」の事務局、熊谷さん、東日本大震災被災地・気仙沼で子どもの遊び場作りを通しての被災地支援・まちづくりを手がけた一般社団法人プレーワーカーズ理事の中村さんから、多世代共生の居場所についてそれぞれの立ち上げプロセスや課題意識などをお話いただいた。
　これらを受けて、第 2 部では 7 つのグループで、「わたしにとっての故郷」を語る自己紹介（顔合わせ）から始まって、どのような場を作りたいかのイメージ（思い）を語り合い、場づくりに対して「私がもつスキルやネットワーク」（腕を見せる）を表明、それらを活用して地域で何ができるかを語り合うワークを行った。より具体的にお互いのことを知り、手を携えると何ができるかをイメージする。お互いの「腕」が見えたところで、ようやくネットワークづくりが始まることを実感した人もいたようだ。2016 年度報告会での、厚生労働省子ども家庭局長（当時）の吉田学さんの発言がよみがえる。「顔ぐらいはみんな見える。次はどれくらいに役立つ人なのか、お互い「腕」が見えないと協力しない。そのうちに「腹」の見える関係、こいつは本当に信用できるのか。それでこそ地域包括ケアも広がっている」今回のワークでは、お互いの「腕」の見本かカタログぐらいは見せ合えたかもしれない。新たな動きにつながることを期待したい。

第 1 部スタート

市の職員さんも参加

敦賀市長の挨拶

地域人材交流研修会 in させぼ

＜事業概要＞
開催日時　2019 年 11 月 15 日（金）13：30 ～ 16：30
開催場所　佐世保市男女共同参画推進センター　スピカ　研修室 1
参加者　　NPO/ 市民活動団体、地域包括支援センター、行政、社会福祉協議会、子育て当事者、学生、保育士ほか
参加人数　35 名　保育　2 名（プラス幼児 2 名と乳児 1 名同室保育）
協力団体　NPO 法人ちいきのなかま
後　援　　長崎県　佐世保市　佐世保市社会福祉協議会

＜テーマ＞
「地域でどう支える？　育児と介護の同時進行 = ダブルケア」

＜話題提供者＞
東　恵子さん　一般社団法人ダブルケアサポート代表
岩崎祐一さん　佐世保市子ども未来部子ども政策課主幹兼課長補佐
冨永健三さん　佐世保市社会福祉協議会地域福祉課
野方由紀子さん　ダブルケア当事者
山崎　翠さん　ファミリー・サポート・センター・アドバイザー
田渕真由美さん　佐世保市地域子育て支援拠点よんぶらこ　ひろばスタッフ
園田康訓さん　佐世保市山澄地域包括支援センター長

＜企画趣旨＞
育児と介護が同時期に発生する「ダブルケア」では、育児と介護、両方の不安や悩み、孤独感を抱え、子育て仲間にも介護仲間にも理解してもらえない辛さがある。介護保険だけ、子ども・子育て支援だけでは支えきれず、それぞれの分野に関わる人々同士の連携が求められる。当事者からの声を聞き、実際に家庭で何が起きているのか、どうすれば支えられるのかについて、具体的なケースを元に考えるワークを通して、課題を身近に感じてもらい、分野を越えた地域人材の交流も図る。

＜事業の成果＞
市内の主だった子育て支援者、地域包括支援センター関係者、当事者が参加。お父さんの働く姿を見せようと登壇者のパートナーがお子さん連れで駆けつけたほか、乳児連れの参加もあった。
ダブルケアという名称を広めた一般社団法人ダブルケアサポート代表の東恵子さんのコーディネートで、第 1 部は、東さんからダブルケアの概要をお話いただき、現場で進むさまざまな取り組みとして、佐世保市子ども未来部や社会福祉協議会の取り組み、当事者および体験者からの現場報告と提言、子育て支援者および地域包括支援の現場からの報告で、現場で起きていることをリアルに伝えた。第 2 部では、具体的なダブルケアのケースを上げて、グループごとに対応を協議するケース検討会議を実施。グループワークでは、敢えて分野も専門性も違う人々が同じグループに入るように誘導、分野を超えた複合課題に、それぞれの背景を尊重、お互いの経験に基づく知恵と工夫を出し合い、最後に全員でシェアを行った。どのグループも盛り上がり、参加者アンケートでも、このワークは大変好評であった。
さまざまな立場の人々が、ある家庭の困りごとを支えるべく、語り合う。自分たちが暮らす地域でもこういうことができれば暮らしやすくなるという感想が多く、地域まるごとケアへの理解も深まった。
ダブルケアがテーマの交流会参加者アンケートで必ず目にするのが、「もっと近所の人と交流を持とうと思った」という感想。当事者の大変さが身近に感じられ、さまざまな人との交流が地域で困っている人を支えることにつながるとの確信が得られるテーマであり、当事者や支援者からの生の現場の声を聞き、模擬ケース検討会議に臨むという全体の構成が効を奏していると言えそうだ。

具体的なケースを元に、キーパーソンをどう支えられるか

それぞれの結果をシェア

登壇するパパを応援

にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

子ども・子育ても、地域の課題です
どうか、手を貸してください

にっぽん子ども・子育て応援団の目標

すべての子どもたちが、家族の愛情に育まれ、
また、子ども同士の積極的な関わり合いの中で
そして、地域や社会の多くのおとなたちの慈しみの中で、
心豊かに成長できる環境を保障すること

※「子どもは家族が育てるのか、社会が育てるのか」というとらえ方ではなく、
子どもを真ん中において、子どもの成長にとって不可欠な、家族、
子ども同士の関わり、地域や社会の多くの人との関わり、
それぞれが大切な役割を果たせるよう支えるという考え方に立つことが重要です。

いのちを守りたい

こどもの権利条約と児童虐待予防

2019 年は、国連でこどもの権利条約が採択されてから 30 年、日本政府が批准して 25 年という節目の年に当たる。各地でこどもの権利条約に関するイベントが行なわれ、改めて、子どもは生まれながらに一人の人としての権利を有することを確認、こどもの権利条約に則って、大人の責任として、子ども一人ひとりが、その子らしさを発揮できる環境づくりを進める決意を行なう 1 年にもなった。

節目の年を前に、2016 年に改正された児童福祉法では、児童福祉法の理念として、第 1 条に子どもの権利を保障し、子どもが権利の主体となることが明記された。

大人目線から子ども目線への大改正と言われたこのときの改正では、児童虐待の発生予防として、市町村母子健康包括支援センターの設置、支援を要する妊婦等を把握した医療機関や学校等と市町村との連携など、「妊娠期からの切れ目のない支援」を行なうことが明記され、強調された。さらに、児童虐待発生時の迅速・的確な対応策を規定、虐待などで親や家族とともに暮らせない子どもの養育について、児童養護施設などでの社会的養育から、家庭的養育への比重を大きくすることを明確にした。

しかし、児童虐待に関する重篤な事件が相次ぎ、2016 年に続いての児童福祉法の改正とともに、児童虐待防止法の改正が行なわれた。改正法の施行は 2020 年 4 月 1 日からとなる。

これら改正のポイントは、①子どもの権利を守る②児童相談所の体制強化③関係機関の連携強化の 3 つである。②と③は先に記したように児童福祉法の改正でも定められ、痛ましい事件が起こるたびに叫ばれていたことだが、今回の改正では、子どもの権利を守るために、親及び保護者の子どもへの体罰禁止が児童虐待防止法に明記された。民法で定められている親の懲戒権のあり方については、施行後 2 年をめどに検討することにもなった。

さらに、児童相談所での、子どもの一時保護などの介入を行なう職員と保護者支援を行なう職員の分離、DV 対策との連携強化のため、児童相談所と配偶者暴力相談支援センターとが協力することなども定められた。

重篤な児童虐待事件が起こるたびに、「とても他人事とは思えない」というのが、子育て当事者たちの実感である。市民の側でも、さまざまな勉強会の開催や独自事業の開発などが進められてきた。

児童虐待に至るまでには多様なプロセスがあるが、慣れない子育てに関する不安や戸惑い、「私たち（私）だけで、きちんと子どもを育て上げねば」という焦り、幼子にかかりっきりになるがための慢性的な疲労と社会からの孤立などから、親たちが追い詰められている状況が知られるようになって久しい。

予防的取り組みとして、子育て親子が気軽に集える場所＝子育てひろば・つどいの広場・子育てサロンなどの居場所づくりや、ファミリー・サポート・センター事業や一時預かり事業などの親のレスパイト事業などが進められてきた。妊娠期の両親学級や母子手帳交付の際の面談などや、産後の母親に対するケアとしての産後 2 週間及び 4 週間の健診なども提案、実施されるようになってきた。

子育て家庭の社会からの孤立や、育児困難、養育不全家庭の存在など、かつて子育てをした人々には理解しがたい現状について、もっと興味を持ってもらいたい、より理解を深めてもらいたいと考えて生まれた事業もある。

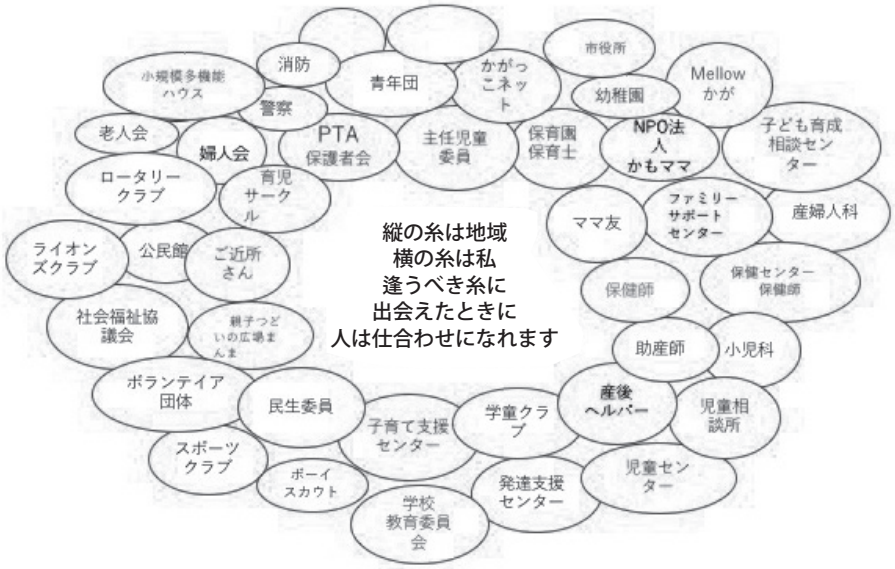
岡山県総社市では、「総社市子どもを虐待から守る条例」に基づき、地域と連携した子ども虐待ゼロのまちを目指して、一般市民向けに「虐待」の知識を持ったサポーター養成講座を開催している。一般市民に向けた子育ての現状から虐待の知識を深めてもらう講座は、全国でも珍しい。

総社市の例は、児童虐待予防には地域住民にも果たせる役割があり、まちづくりにつなげていける取り組みと言えるのではないだろうか。

市民発の取り組みと児童虐待予防に果たせる役割

2019 年度に敦賀で開催した地域人材交流研修会では、「共生型居場所づくり」をテーマに、3 つの取り組みが報告された。

石川県加賀市で地域子育て支援事業に取り組む NPO 法人かもママでは、食生活に着目、妊婦さんに向けた「まんぷく食堂」をスタートさせ、週に 1 回、全ての世代に向けての事業に発展させるとともに、夏休みの欠食児童向けの「お出かけまんぷく食堂」を開催している。また、加賀市みんな「地域まるごとお互いさまの支え合い」シニア活動応援事業を加賀市から受託、古民家を利用しての地域共生型の居場所「地域共生の家 母屋わらわら〜っと」で、シニアの活躍の場の提供とともに、カフェやなんでもありのサロンなどの開催で、多世代が緩やかに交流、子育て文化の継承なども行われている。誰一人孤立させない、支え合いの環境をつくる第一歩は、地域子育て支援事業をはじめ、シニアが地域で活躍できる環境をつくること。子どもとその家族を、地域のあらゆる人々、機関が包み、支えているというプレゼン資料のラストのスライドに、理事長の河原廣子さんの思いがにじむ。



地域人材交流研修会 in つるが 「居場所からうまれる地域の輪」
NPO 法人かもママ代表理事　河原廣子さんのスライドより

福井県美浜町では、人口減少での空き家や休耕田の増加、それらに伴う生活様式の変化などで生じてきた、地域住民の不安や困りごとといった地域課題の解決に向けて、地域の活動拠点「みんなの茶ノ間八三六」を空き家利用で立ち上げた。「本当は、みんなで気兼ねなく酒が飲める場所が欲しいねという雑談から始まった」と事務局の熊谷誓成さんは打ち明ける。活動拠点から、世代を越えた地域住民の交流が生まれ、地域活性化のプロジェクトも立ち上がった。社会的な孤立をなくす取り組みとして、ここでも毎月 1 回「みんなの食堂」を開催、赤ちゃんから高齢者までが集う。

昨年度、地域人材交流研修会を開催した宮城県気仙沼市での取り組みは、年度報告会で関わってきた一般社団法人プレーワーカーズ理事の中村俊一さんから報告をいただいたが、敦賀での交流会でも、地域に根ざした子どもの遊び場づくりを通したまちづくりのプロセスについてお話しいただいた。

この交流会では、後半のワークショプで、お互いが居場所づくりで提供できるスキルや人脈を発表し合い、それを基にどんな居場所をつくるかのイメージを語り合った。「誰もが気軽に立ち寄れる　ぬくもりのある居場所をつくろう」という呼びかけに応じて集まった参加者は、居場所をつくる仲間と出会い、次のステップへ進めただろうか。実際に、かなり積極的なアピールもあった。

厚生労働省が進める「我が事・丸ごと地域共生社会」実現への取り組みは、先ごろ、地域共生社会の実現

に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会（地域共生社会推進検討会）で、その具体的な進め方について報告書をまとめた。「本人・世帯の属性に関わらず受け止める、断らない相談支援」「本人・世帯に合わせ、地域資源を生かしながら、就労支援、居住支援などを提供することで、社会とのつながりを提供する参加支援」「地域社会からの孤立を防ぐとともに、地域における多世代の交流や多様な活躍の場を確保する、地域づくりに向けた支援」を 3 つの柱とし、その実現のために、活動拠点の設置、コーディネート機能の設置、圏域の設定などのスキームとともに、市町村への財政支援、多様な主体との連携を提案している。

「みんなで生きていく」と題して水戸で開催した地域人材交流研修会では、社会福祉協議会職員として分野横断的な地域福祉に尽力してきた染野ユミさんおよび、障がい児・者、高齢者施設および保育所運営を進め、人々が自然に交流できる場として、9月に高齢者支援センター・子育て支援センターなどを１カ所に納めたユーアイまるごと支援センターをオープンさせる藤澤利枝さん、「お父さんのヤキイモタイム」など、場をつくることをきっかけに、地域の人と人とをつなぎ直す取り組みを手がけてきた西川正さんから話題提供いただいた。「みんなで生きていく」ことを実感してもらう一助として、参加者には就労継続支援Ａ型作業所で作られたクッキーをお渡しした。

社会福祉法人ユーアイ村のユーアイまるごと支援センターには相談窓口も設置されており、「断らない相談支援」の先取り。美浜町の「みんなの茶ノ間八三六」はその成り立ちそのものが地域活動拠点。加賀市の「地域共生の家　母屋わらわら〜っと」とともに先取りだ。こうした先行的な取り組みは、全国各地で生まれている。

お手本となるのが、富山型デイサービスだろう。世代も分野もこだわらない、ごちゃまぜの居場所。富山県には現在富山型デイサービスが 130 カ所あり、そのうちの 86 カ所でネットワークを構築している。福祉的意味合いの濃い取り組みだが、カフェのような居場所もあり、その垣根の低さから、誰でも気軽に立ち寄れる場となっている。

富山型デイサービスが生まれたのと同じころ、1996 年に北の大地でも誰も排除しない居場所が誕生した。札幌市の「むくどりホーム」である。藤野むくどり公園に隣接し、視覚障がい児者も幼児も高齢者も遊べる公園を整備、公園をつなげるような形で自宅を開放、障がいの有無も世代も超えた居場所としてスタートした。

地域人材交流研修会 in さっぽろ開催の前日に訪れてみると、玄関を入った途端、奥から出てきた小学生くらいの男の子に、「どうぞ」とクッキーが入ったお茶碗を渡された。いきなりの歓迎に驚いていると、みんなでクッキーを焼いたあと、「楽しみにしていること」を参加者同士で紹介し合っているところだった。毎回、参加者の自己紹介を兼ねて、お題を出してはお互いの近況などを話しているという。障がいのある方、高齢の方、乳幼児と保護者、学生、帰省前のサラリーマン、かつては利用者で、今は親子で運営に参加している方々などが、お互いの「楽しみにしていること」が披露されるたびに拍手で讃えあう。そのまま、翌日交流会の運営スタッフを担ってくださる浜口さんと、ボールプールに " 浸り " ながら、お互いのことを話した。その間にも、小学生らしき男の子がお隣のトランポリンからボールプールにダイブしてくる。お互いを尊重し、受け入れる垣根のなさがじわじわと伝わってくる時間だった。

施設中心から、地域へ。これは決して介護や社会的養護の世界だけの話ではない。児童虐待予防に向けても、地域での取り組みが大きな役割を果たす。

日々の暮らしの中で、親子や子どもの様子を気にかけ、声を掛け合うことや、子ども・子育て家庭を歓迎、受け入れる風土の醸成もまた、親子の孤立や育児不安の緩和と、子育てしやすく、子どもが生き生きと育つ環境づくり、まちづくりにつながる。

法改正に伴い、関係機関の体制や連携の強化が進む一方で、子どもが家族とともに暮らす地域の仲間として、私たちに果たせる役割があるはずだ。

にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

見えてきた！
市民発　ごちゃまぜ　真剣
地域ぐるみで　みんなまるごとケア

地域まるごとケア・プロジェクトはスタートして 5 年目を迎えた。

これまでに 33 の自治体での行政や市民活動団体の取り組みをヒアリング、19 カ所で、それぞれの地域課題に沿ったテーマを元に地域人材交流研修会を開催してきた。

どの自治体にも、「ともに同じ地域で暮らす者として何ができるか」を考え、アクションを起こして仲間を増やし、地域の拠りどころ = 拠点を展開、さまざまなアクションを起こすなかで、しっかりと地域に根を張ってこられた方々の姿があった。

行政主導だけでは、ここまで市民に受け入れられ、市民が生き生きと活動できる地域にはならないな、と、行政と市民との信頼度の高さに感心させられることも、しばしばあった。

市民発。そして、一見ごちゃまぜ。ただし、ごちゃまぜで、ゆるやかな場だからこそ、引き寄せられての真剣勝負が、常に潜んでいる。見立てのプロフェッショナルが必要なところにつなぐ。それができるのは、まさにお互いの腕と腹をよく知る信頼のネットワークが重層的に築かれているからだ。

意外なものの組み合わせも、まさに市民発、ごちゃまぜの真骨頂。振り返れば、全世代に向けた地域共生型居場所の発端となった富山型デイサービスも、制度や分野で分断されていた、赤ちゃんと高齢者の組み合わせが話題となって注目を浴びた。この先は、シニア、特にシニア男性の子育て支援をはじめとする地域参画、中学生と地域の大人が語り合う「大人としゃべり場　トークフォークダンス」、認知症の方々も運営に参画するカフェなど、地域の人と人とを豊かにつなぐ取り組みが、広がって行くだろう。

地域まるごとケア・プロジェクト、5 年目の先進自治体調査及び地域人材交流研修会開催の報告会では、これまでの振り返りで見えてきたことを 4 つのキーワードに込めて、地域ぐるみでみんなまるごとケアのヒントをお伝えする。

市民発

現在法律に書き込まれて制度となっているものの多くが、現場から生まれたものだ。困りごとや課題を発見した市民が、必要に迫られて、知恵と工夫で生み出したもの。地域まるごとケアだって、高齢者の介護・医療の課題から生まれ、徐々に他分野・他職種・一般市民を巻き込んで広がって行った。

ごちゃまぜ

誰もが立ち寄れる居場所は、誰も排除しない、されない場所。緩やかで温もりのある場をつくるのには、豊かな発想とさまざまな配慮が求められる。子どもだけでも入れる「こども食堂」に地域のあらゆる世代の大人が関わり地域の拠点となっているのも、ごちゃまぜの為せる技と言える。

真　剣

ごちゃまぜで、ゆるやかな場だからこそ、困っていて深刻な状態にある人も引き寄せる。困りごとを上手に引き出す見立てのプロフェッショナルが必要なところにつなぐ。時に専門家が何気ないそぶりで関わっていたり。お互いの腕と腹をよく知る信頼のネットワークがセーフティネットの役割も果たす。

地域ぐるみでみんなまるごとケア

地域の課題解決、行政任せにしていていいの？　そのままだと制度にはまらない困りごとは、いつまで経っても解決できないかも。自分たちが暮らす地域だからこそ、心地よく暮らし続けたい。それぞれの得意なことを生かして、課題を解決するのは私たち。隙間を埋める手立てができたら、行政に提案だ。社会を変えられるかもしれない。

○市民発　ないものは自分たちでつくる

全世代の移動支援を考える

「誰もが、安心して移動出来ること」は、人々や地域を元気にする。超高齢社会を迎え、ラストワンマイル（各家庭などの最終目的地を結ぶ）をカバーする「きめ細やかな」地域内交通ニーズが高まっている。同時に、公共交通空白地帯の増加に伴い、車を持たない・運転できない子どもとその保護者や若い世代も移動困難に陥っている。

地域人材交流研修会 in おおがきでは、初めて「移動」がテーマとなった。

子ども・若者・高齢者支援を通して、移動支援の必要性と重要性を感じたという岐阜市の NPO 法人コミュニティサポートスクエアの杉浦陽之助さん、岐阜羽島市で障がい者福祉・児童福祉・更生支援・ボランティアセンターに取り組む社会福祉法人岐阜羽島ボランティア協議会の川合宗次さん、NPO 法人移動ネットあいちの遠山哲夫さんに、話題提供をお願いした。「移動＝住民の足の確保」は「すべての人の社会参加の足がかり＝まちづくりのキーとしても重要」で、「継続のための本気の施策・取り組みが必要である」というのが、お三方共通のご指摘だった。

「移動支援」については、これまでのヒアリングで、三重県名張市でのコミュニティバス、島根県雲南市の消費財をトラックに積んで中山間部の集落を定期的に回る「買い物支援」として語られたことはあるが、「移動支援」という視点からは、語られて来なかった。外出のしづらさについては、幼子を育てている親も高齢者、障がい者も同様である。保育園や学校・習い事などの送迎は、まさに「移動支援」そのものであり、ファミリー・サポート・センター事業は子どもの預かりだけでなく、「移動支援」をも行なっていることになる。杉浦さんが移動支援については家族機能の社会化という視点で考えると良いのでは？と投げかけられたが、ファミリー・サポート・センター事業は、そのわかりやすい具体例と言える。

今年度のヒアリングでは、新たな視点、「移動支援」についても聞いている。

岡山県総社市では、全ての世帯、全世代対象で分野にこだわらない予約型乗合タクシー「雪舟くん」を運行している。障害者手帳を持っていれば、利用料金 1 回 300 円のところ、200 円で利用できる。「障がい者千五百人雇用」を推進する同市の担当者は、通勤援助、つまり移動支援として語った。

広島県福山市には、各地区のまちづくり推進委員会から申し出があれば、地区の移動支援のための車両代を補助する制度があるが、車両運行を担う組織を地区住民で立ち上げていることが条件である。

中山間部を多く擁し、小中学校の合併も行ってきた南砺市では、路線バスの路線を増やし、スクールバスを運行することで、市民の足を守っている。

交流会とともにヒアリングを行った大垣市では、小学 2 年生までの子どもと暮らす世帯に、市内路線バスのチケットを交付している。移動と経済、両面からの子育て支援と言える。

「市民の足の確保」という視点で見てみると、コミュニティバスを自ら運営していた名張市つつじが丘・春日丘自治協議会の取り組みが光る。「すべての人の社会参加の足がかり＝まちづくりのキーとしても重要」というポイントを見事にクリアしている。

地域課題解決を「かたち」にしたら　活動拠点＝地域みんなの居場所ができた

福井県美浜町にある「みんなの茶ノ間八三六」は、人口減少で増えてきた空き家利用で立ち上げた地域の活動拠点だ。空き家や休耕田の増加、それらに伴う生活様式の変化などで生じてきた、地域住民の不安や困りごとといった地域課題の解決に向けて、各集落で開催された座談会で協議を重ねるなど、「なんとかしたい」という思いが「かたち」になった。

活動拠点から、世代を越えた地域住民の交流が生まれ、地域活性化のプロジェクトも立ち上がった。社会的な孤立をなくす取り組みとして、毎月 1 回「みんなの食堂」を開催、赤ちゃんから高齢者までが集う。

「本当は、みんなで気兼ねなく酒が飲める場所が欲しいねという雑談から始まった」と事務局の熊谷誓成さんは打ち明ける。近所には気の利いた飲み屋がなくて、わざわざ車でお隣の敦賀市まで出向き、帰りは代行タクシーなどを利用していた。その不自由さが、「みんなの茶ノ間八三六」立ち上げのきっかけになった。

雑談から地域課題解決の拠点誕生という流れは、市民発ならでは。ないものは、自分たちでつくる。

その寄る辺なさが新たな居場所・取り組みをつくる

初めて触れた赤ちゃんが我が子。横浜市の調査では、子育て当事者の 4 人に 3 人が、そうだと答えた。寄る辺ない子育てが当たり前になっている。子育て当事者の体験から、地域子育て支援拠点は生まれた。加えて老いこそ、誰もが未体験である。ましてや親戚づきあいが疎遠になっている時代、生老病死を垣間見ることも希である。自分を頼もしく育ててくれた親たちが老いていくことに、衝撃を受けるだろう。未体験ゾーンにある相手の心身の状態など、想像だにできない。

子育ての寄る辺なさと、未体験の親の老いと付き合わざるを得ない介護。ダブルケアがテーマの地域人材交流研修会を、今年度も佐世保で開催した。現在３人の子育て中の地域包括支援センター長、園田康訓さんは、名刺に我が子のイラストを使用、地域の高齢者との話題づくりに活用している。自身の経験から、ダブルケアの辛さは、子育てと介護、どちらのコミュニティでも完全には理解されないことと、介護と育児に忙殺されることでコミュニティから離脱せざるを得ない状況にあるのではないかと指摘する。

児童虐待の重篤事件発生をベースに開催することになった札幌での交流会では、札幌市内の主だった子ども・子育て家庭支援に関わる関係者が、それぞれの事業概要を説明したあとに参加者と交流する分散交流会を行った。12 事業の担当者がブースを出してくださった。

こんなに多彩なプログラムを作ってきたのに、子どものいのちを救えなかった悔しさがあるからこそ、次は起こさせないという思いが伝わってきた。

地域連携すなわち重層的なネットワーク。お互いを知り合うことから、それは始まる。

札幌市　分散交流会

札幌市　分散交流会まとめ

支援にかかわる人と人との交流を深める「分散交流会」

札幌市で開催した地域人材交流研修会は、現地協力団体のみなさんの発案で、後半を親子を支える地域連携を実現させるための「分散交流会」とした。札幌市で親子支援にかかわる 12 の事業について、各担当者が事業説明を行った後、12 のブースに分かれて、参加者に直接担当者と意見や情報の交換を行ってもらうというもの。告知チラシには、12 の事業しか掲載できなかったが、それぞれの担当者は行政のみならず、専門家や市民活動団体など多岐にわたった。

さらに、札幌での交流会では、子育て支援にかかわる 10 の団体から運営スタッフを一人ずつ派遣してもらった。それぞれの団体の活動は耳にしていても、実際に顔を合わせたのは初めてという方も少なくなく、団体同士の交流も深めることができた。

参考までに、かかわった団体および関連部署を掲載しておく。

・分散交流会
①子育て世代包括支援センター　札幌市健康福祉局保健所健康企画課地域保健・母子保健担当
②利用者支援事業　札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援総合センター担当
③児童相談所・家庭児童相談室　札幌市子ども未来局児童相談所地域連携課
④さっぽ・こども広場　札幌市子ども未来局児童相談所地域連携課療育指導係
⑤地域教育相談　札幌市立中央幼稚園幼児教育支援員
⑥小児科医
⑦産後ケア事業・拠点での赤ちゃんふれあい講座など　feel 助産院
⑧こどものくらしコーディネート事業　公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会子ども若者事業部子ども事業課
⑨こども緊急サポートネットワーク NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ　札幌市こども緊急サポートネットワーク
⑩さっぽろ子育てサポートセンター（ファミサポ）・ほっ・とプラザ（家事援助） 札幌市社会福祉協議会　ボランティア振興課　ほっ・とプラザ
⑪ DV 支援　DV 心のケア holoholo
⑫ひとり親支援　しんぐるまざあず・ふぉーらむ北海道

・運営スタッフ所属団体
NPO 法人子育て応援かざぐるま　NPO 法人ねっこぼっこのいえ　さっぽろ子育てネットワーク
子育て支援ワーカーズべりいべりい　むくどりホーム・ふれあいの会　きらきらキッズママの会　NPO 法人ピース
NPO 法人ちいさなおうち　NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ　ひまわりサロン　穴ぐら屋　DV 心のケア holoholo

・パネルディスカッション　パネリスト所属部署・団体
札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課　NPO 法人子育て応援かざぐるま　NPO 法人ねっこぼっこのいえ
さっぽろ子育てネットワーク　北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター

○人と人とをつなぐ　ごちゃまぜのよさ

多世代が集う居場所を中心としたコミュニティ形成

岡山県総社市にある「きよね夢てらす」は、清音地区の活動拠点。清音小学校の校庭に隣接、塀がないので、つどいの広場「なかよし広場こっこ」の窓からは、小学生の姿を見ることができる。お邪魔した日には父親の姿もあった。

公立幼稚園が道路計画で移転となったとき、その跡地利用について、旧・清音村長が清音小学校 PTA に活用方法の検討を投げかけた。歴代 PTA 役員を中心に、子育てに関わる保護者から高齢者まで 15 団体 32 人で「幼稚園跡地を考える会」を発足、「清音の宝となる子どもたちの活動を支援すること」を目的とする建物とすることを決定。どのような建物を建てたいかについて話し合いが持たれ、自分たちで模型を作り、部屋の名前も子ども達でもわかりやすく、優しさが伝わる名前をつけた。

「きよね夢てらす」を運営する NPO 法人きよね夢てらすは、「住民主体となるまちづくり」を展開するため設立された「清音地域づくり協議会」の事務局も担う。地域住民が自分たちで利用の仕方を決めて運営する施設に子育てひろばがあり、地域の人たちが自由に出入りするなかで親子が過ごせるのは、地域に見守られての暮らしを実感できる環境と言える。

誰も排除されない　多様でごちゃまぜの社会

地域人材交流研修会 in みとで話題提供をお願いした茨城県水戸市の社会福祉法人ユーアイ村は、2019 年 9 月に障がい（生活・就労支援）・介護（高齢者支援）・保育（子育て支援）3 分野の相談窓口を一つに集約した「ユーアイまるごと支援センター」をオープンした。誰もが食事や買い物ができる「ユーアイキッチン」、生活支援を行う「ユーアイサポート」、介護を担う「ユーアイケアプラン」、「東部高齢者支援センター」、「ユーアイ子育て支援センター」、「ユーアイデザイン」の 6 つの施設を 1 カ所にまとめた。

理事長の藤澤利枝さんは、母親が障がい児施設に勤めていたので、障がい児と一緒に育った。長じるにつれて障がいのある人が社会的に不利な環境にあると気づく。学生時代にドイツに留学、日本は健常者（特に働く世代の男性）が中心に作り上げた社会で、障がいのある人には暮らしづらいと、ますます感じるようになった。しかし、本来、社会は多様でごちゃまぜなのではないか？

介護が必要なお年寄りだけが暮らす特養老人ホームではなく、多様な人、いろいろな人が出入りして、交流できる特別養護老人ホーム。障がい者が地域の中にどんどん出ていけるような施設。子どもと女性の保育者だけでなく男性の育児参加や地域の子育て支援がある保育園。「多様でごちゃまぜ」の第一歩として、まずはいろいろな人に集まってもらえる複合的な施設をつくろう。

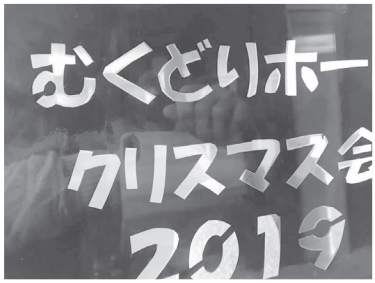
敷居を低くして、誰もが気軽に、そして自由に訪れることができる場所を作りたいと藤澤さんは思っている。

「何かしたい」と思っている人に関わるきっかけをつくる

2005 年からお父さんと子どもが焼き芋をつくるキャンペーン「ヤキイモタイム」を各地で展開してきた NPO 法人ハンズオン埼玉理事の西川正さんに、地域人材交流研修会 in みとでの話題提供をお願いした。焼き芋をつくるためには焚き火が必要で、公園などで焚き火をするには、近隣の住民に挨拶し、理解してもらい、行政にも申請が必要。焼きあがったお芋は、協力してくれた人たちにも分けて歩く。面倒臭いが、子どもを地域で孤立させないために、こういうやり取りで人間関係を作って行く。スマートフォンを眺める父親に「手伝ってくれませんか？」と声をかけると、照れながらも手伝ってくれる。何かのきっかけさえあれば、「何かしたい」と思っている人は結構いる。

最近は、中学生と地域の大人が語り合う「大人としゃべり場　トークフォークダンス」というイベントを行ない、接点の少なかった中学生と地域の大人をつなげている。

札幌市地域子育て支援拠点むくどりホーム・ふれあいの会外観



むくどりホームクリスマス会

障がいの有無に関係なく、幼児から高齢者までが楽しめるバリアフリー公園、藤野むくどり公園

○真剣　多方面と繋がる重層的ネットワークがセーフティネットに

誰も排除しない　されない　止まり木のようなカフェ

多世代共生型の居場所のお手本といえば、富山型デイサービスだろう。世代も分野もこだわらない、ごちゃまぜの居場所。富山県には現在富山型デイサービスが 130 カ所あり、そのうちの 86 カ所でネットワークを構築している。

一般社団法人 Ponte とやまが運営する「みやの森カフェ」は、赤ちゃんから高齢者、近所の人も県外の人も訪れる。開設当初、介護している人たちが来るためのケアラーズカフェにしようと思ったが、子ども、若者の相談が多数来るようになったため、年齢や状況にとらわれないごちゃまぜカフェに方針を変更したという。手作り小物などの委託販売も受けており、一角には誰でも横になれるスペースがある。その垣根の低さから、誰でも気軽に立ち寄れる場。「ごちゃまぜ」の心地よさが醸し出されている。

が、ただ心地よいだけの居場所ではない。

経験を積んだ有償ボランティアを中心に、はたらく練習をしたい若者などがカフェ営業を回している。本人にとっても客として毎回は来られなくても準スタッフとして参加できることで居場所と働く自信を取り戻していくというメリットがある。

小さな社団なので、他の団体、個人との連携が不可欠である。石川県などの他県および富山県内の民間の居場所あるいは制度内の事業所を、地域、困りごとの内容などによって積極的に紹介をしている。最近高齢者関連の事業所とイベントなどを共にすることで連携が取れるようになり、就労の場の提供や、こちらに相談に来た人の相談対応などをお願いしている。富山大学附属病院の総合診療部、在宅医療専門のものがたり診療所、その他精神科の病院などとも連絡が取り合えるので、医療に繋げやすくなってきている。

地域人材交流研修会 in さっぽろ開催の前日に訪れた「むくどりホーム・ふれあいの会」も、富山型デイサービスと同じくらいの歴史を積み重ねてきた、誰も排除されない居場所の一つだ。現在札幌市地域子育て支援拠点にもなっていて、赤ちゃんから高齢者まで、障がいのあるなしにかかわらず、誰もがゆったりと過ごすことができる。（38 ページの写真）

保健師や保育士など、有資格者が利用者と同じようにひろばで過ごしているのも、場づくりの妙。

障がいがあるからこそ、地域に出たい。その存在を地域の方々に知ってもらいたい。そして受け入れてもらいたい。その思いを、その立ち上げから抱き続け、今も活動を続けている。

多方面に張り巡らされた重層的なネットワークが、羽を休めに訪れた人々の困りごとにしっかりと対応、場の居心地のよさに加えて安心感をもたらしている。

分野も職種も越えて　生活を支援する

分野も職種も立場も越えた取り組みを進める必要性・重要性を、どう説明したら理解してもらえるか。地域まるごとケア・プロジェクトは、常にそれを念頭において進めてきた。

高齢者に関しては身体介護や認知症への対応に介護保険という制度があり、地域包括支援センターが、生活支援も含めたきめ細かな対応を行っている。

世代や状態を越えた生活支援の視点から考えると、理解を深める材料として障がい児者への支援が思い浮かぶ。抱える困難な状況は一人ひとり違い、柔軟な対応が求められることは、障がいの多様性を知る人たちには伝えやすい。そこは高齢者も同様だが、もちろん子育て家庭だって、状況は家庭ごと、子ども一人ひとり違っている。

広島県福山市では生活困窮者支援センターが、分野や職種をつないで生活支援を行なう。ひとり親支援や離婚後の面会交流への同行などを行なう NPO 法人こどもステーションなど、市民団体とも連携している。

支えるために、分野や職種も立場も越えて連携、それぞれの得意分野、専門性を生かす。

生活困窮者だけでなく、家族の複合課題への対応でも、多分野多職種連携が求められている。職種や市民活動団体の得意分野、専門性を生かせる重層的ネットワークは、生活困窮者はもとより、なにがしかの困難を抱える人々へのセーフティネットでもあるのだ。

○地域ぐるみで　みんなまるごとケア

子育て支援の現場で進む地域連携の事例

地域	団体名称	主な事業
大垣市	特定非営利活動法人 くすくす	○地域子育て支援事業 ・キッズピアおおがき子育て支援センター交流サロン（地域子育て支援拠点） ・大垣市子育て世代包括支援センター（基本型）　・家庭訪問型子育て支援・大垣市ホームスタート事業 ・大垣市ファミリー・サポート・センター事業　・岐阜県子育て支援事業従事者等研修 ○女性のチャレンジ支援事業　・創業拡大支援×女性活躍新モデル事業 ○男女共同参画社会形成のための調査、研究、企画及び書籍の販売、出版事業
射水市	特定非営利活動法人 ふらっと	自主事業：赤ちゃんでもお年寄りでもどなたでも利用できる居場所。食事もできる。富山型デイサービス。 ダッチファミリー (障害児の親御さんが留守のときに、留守宅に出向いて子どもと一緒に留守番) 医療ケア児の入院付き添い及び入院中の保育、ショートステイ (いずれも自費) 通所介護 多機能型（生活介護・生活訓練）共生型放課後等デイサービス＆共生型児童発達支援事業 射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援） 福祉有償運送（道路交通法 79 条許可） 子育てつどいの広場事業・一時預かり事業 指定特定障害児者・精神相談事業・障害児利用計画等相談支援 指定一般相談支援 学童保育 地域生活支援・交流ハウスふらっとでは上記すべてを、自立支援ハウス DASH では、障害福祉サービス（自立支援給付）生活支援・自立訓練を実施。
総社市	NPO 法人 きよね夢てらす 子育て応援こっこ	NPO 法人きよね夢てらすの 10 の事業のうち「子育て応援こっこ」事業として総社市つどいの広場事業を受託。 ★子育て親子の交流の場の提供と交流の促進 清音会場「なかよし広場こっこ」、天満屋ハッピータウンリブ総社店会場「なかよし広場ぴよこっこ」、岡山県立大学会場「チュッピーひろば」の市内３会場でつどいの広場事業を実施。 ★子育てなどに関する相談、援助の実施 ３会場で、助産師相談、栄養士相談、歯科衛生士相談などを行う。 ★地域の子育て関連情報の提供 ３会場で、市における母子保健事業、地域子育て支援センターや子育てサロンについての情報提供。毎月のチラシによる情報提供、ＨＰへの掲載、facebook での情報発信。 ★子育て及び子育て支援に関する講習などの実施 ３会場それぞれでプレママタイム、プレママ＆パパタイム（両親学級）、赤ちゃん広場、父親・母親向け講座など、会場立地に合わせたプログラムの開催。総社市こども課及び人権まちづくり課との連携による事業を開催。にこにこ訪問、カンガルー広場、スマイル訪問、つどいらっこ、インターナショナル広場（外国にルーツを持つママの集まり）、保健師さんに気になる子について相談など。 ★地域の子育て力を高める取り組み ３会場ごとに立地に合わせた取り組み。 清音会場では愛育委員さんや地域の方との連携に基づくプログラムや交流、夢てらすとの協働事業による外遊び事業なども行っている。リブ総社店会場ではリブ総社店及び店内店舗との連携で専門店別のプチ講座の開催、中学校高校への赤ちゃん登校日の開催など。岡山県立大学会場では Nobody's Perfect の開催、親子で楽しむ音楽会などの開催も行なっている。 ★利用者のエンパワメント ママスタッフの活用、利用者同士での託児、ママ先生による講座の開催などで、利用者が支援を受けるだけでなく、参加することで仲間と出会い、孤独な育児から抜け出し、自ら自信を持って力を発揮できる環境づくりを行う。 ★その他 月 1 回のスタッフ会議の開催、おかやま地域子育て支援拠点ネットワークへの参加、研修会への参加、プレーパークの開催、学生との協働イベントの開催など。
福山市	NPO 法人 こどもステーション	★子育てひろば「もこルーム」の運営 毎週月～金曜日 10:00 ～ 16:00（木曜日は 12：45 まで） 利用料金　1回　100 円　年会費　2000 円 午前中（月曜日は午後も）相談員スタッフを配置。ひろばの見守りを行いながら、利用者の日常的な困りごとや相談に対応している。 ★一時預かり もこルームにて、依頼に応じて随時、通常 1 世帯につきスタッフ 1 名を配置している。 ★イベント託児 企業や各種団体からの依頼により、イベント開催時の託児を行う。託児会場は依頼者が手配する。 ★面会交流支援 もこルームの休日の土日祝日を利用して、1 世帯にスタッフを 2 ～ 3 名配置。 ★子ども子育て情報紙「はらっぱ」 毎月 2500 部発行　地域の子育て支援情報を集めて発信。 ★ひとり親家庭支援 しんぐるまざぁずカフェ・もこちゃん食堂・フードドライブ・もこちゃんパックなど実施。 ひとり親家庭のご利用は全事業無料で実施（WAM 助成）。 ★相談対応 子どもの発達に関する相談→専門相談員と連携し、同行して相談（専門相談員への謝礼　WAM助成） DV に関する相談→必要に応じ、調停への同行やイコールふくやま相談への同行、警察への同行など。 ★子育て講座 女性の心のレジリエンス講座　性の健康教育 " せーの！ "（保護者向け、幼児・小学校低学年向け）

地域における連携体制	課　題
岐阜県や大垣市などの行政、地域の NPO や団体、地元企業、商店街、民生委員など地元のキーパーソン等と、顔の見える関係性を大切にしながら連携を取っている。例えば、親子向けの教室では保健師や理学療法士らと、季節の親子向け行事では地元商店街と、地域住民と食卓を囲むイベントでは民生委員や各地区の社会福祉協議会と、育休復帰のママ支援では地元企業と、といった風に事業やイベントに応じてその都度連携を図っている。	人材の獲得。単なる人手ではなく、「くすくす」の活動理念に共感し、一緒に働くことができる人材を、常にアンテナを張って探している。
清掃や畑仕事、昼食作りは、これをやりたいと手を挙げてくれた地元ボランティアの方々。 富山型デイサービスネットワーク 富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会 富山ケアネットワーク　など、県域のネットワークや協議会で、さまざまなところと連携。	現在、富山型デイサービスは県内に 130 カ所あり、うち 86 カ所がネットワークに参加しているが、障がい児者支援を行っているのはふらっと 1 カ所だけ。 理念と経営のバランス取るのは大変。
「きよね夢てらす」の立ち上がりそのものが、地域の人々の協議によって始まっており、NPO 法人の運営についても利用団体、PTA、校長、町会・自治会から出している理事によって夢てらす協議会が構成されている。地域づくり協議会と夢てらす協議会のメンバーは両方に関われる人が中心で、ほぼ同じ。地域との連携体制は整っている。	リブ総社店のぴよこっこは、受託 2 年目で常勤のお金がついた。16 名のスタッフのうち 1 名は常勤。こっこもパートタイム職員の他に 1 名常勤がいる。チュッピーが常設になったら常勤配置ができるが、難しい。
2019 年 7 月より「福山市子ども子育てサポート会議」を発足。地域の子ども支援、子育て支援などを行なっている民間団体とネットワークを構築した。現在、 7 団体が登録している。10 月 25 日、福山市議会議員に呼びかけて、意見交換学習会を福山市議会棟で開催した。	毎年、自転車操業で運営している状態。ボランティアベースで活動しているが、理事以外はなんとか活動補償をしようと努力してきた。 地域子育て支援拠点として運営していきたいが、福山市では NPO 法人への委託が認められず、希望が見出せない。来年度以降の活動補償をどうしていくか、苦慮している。この活動ができなくなると、利用者が困るのではないかということが心配。

○人間サイズの規模でつくる協働のまちづくり

地域の課題は地域で解決―地域自主組織の取り組み

・住みよい地域づくりに向けた、新たな地縁モデルの結成による協働のまちづくり。
　概ね小中学校区ごとに地域自主組織による市民自治を、次の 4 自治体で実施。
（いずれの自治体の人口も 2019 年 5 月 1 日現在）

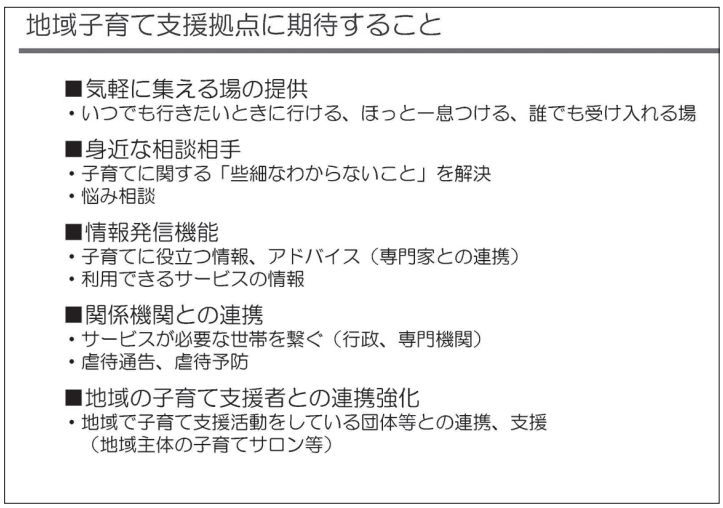
　大垣市（人口 161,325 人）…22 地区のうち 18 地区に地区センター、4 地区に公民館を設置。運営は地域住民。大垣市における長期計画となる大垣市未来ビジョンでは、6 つのピースに分けた分野別計画の中で「みんなが主役のまち（市民協働）」として、地域自治活動の促進を上げている。なお、未来ビジョンの未来創造戦略は「安心できるまち」「元気があるまち」「楽しく子育てができるまち」の 3 つの戦略で構成されている。

　南砺市（人口 50,777 人）…2 年半の準備ののち、今年度から小規模多機能自治に取り組む。 4 町 4 村のまとまりを 5 地区の圏域に分けている。基本の単位は 31 地区（旧小学校）、自治振興会のような区分けがある。小規模多機能の一番小さな区分け。現状 28 地区で始まっていて、来年度 4 月には残りの 3 地区でも始まる予定。

　総社市（人口 69,052 人）…小学校区が基本的な単位。国に先んじて取り組んできた地域包括ケアシステムを例にあげる。まず、21 小学校区に小地域ケア会議を発足。地区ごとの小地域ケア会議には自治会・町会、民生委員、地域住民などが参加、我がこととして課題を捉えてもらえるように仕込んできた。小地域ケア会議の取り組みをほかの地区とも共有できるよう、ポスター発表の手法で、中学校区ごとに合同小地域ケア会議を開催したところ、民生委員から合同小地域ケア会議の改名を提案され、平成 19 年より合同小地域ケア会議を圏域地域包括ケア会議に改名して、民生委員及び福祉委員も参加の第 2 層協議体とした。小学校区という住民の最も身近なところからシステムを積み上げてきた格好だ。
　各校区に地域づくり協議会があり、地域課題などについて地域住民で協議している。地域づくり協議会の活動財源として、地域住民が自ら使途を決定し活用できる「地域づくり自由枠交付金制度」を設けており、2015 年 4 月から市内全域でスタートした。

　福山市（人口 469,168 人）…町会・自治会ベースではまちづくり推進委員会を小学校区ごとに設置。それぞれ地域まちづくり計画を策定、実施するまちづくり推進事業には行政からの財政支援もある。各地域の活動拠点は公民館。小学校区は 80 カ所。福山市社会福祉協議会では、各学区において、小地域で福祉活動を進めるチームを組み、訪問を希望する要援護世帯を定期的に訪問し、声かけや安否確認を行うなどの小地域福祉ネットワーク活動事業を進めている。

・“ 全国屈指の福祉先駆都市 ” を目指して、次々と地域保健医療福祉施策を打ち出している総社市だが、決して行政主導ではない。市として合併する前から、地域課題は住民で協議、決定し、住民自らが解決に向けて取り組む際に、行政が後押しをするという風土があった。現在、校区ごとに地域づくり協議会があり、地域課題などについて住民で協議、決定している。



札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課長田村博美さんのスライド

・密に連携し、隙間を埋めていくためには、お互いの得意なことを尊重することが必要だ。法や制度には限界があり、おのずと隙間が生じる。その隙間を埋めるのは、市民による取り組み。困りごとを抱える当事者により身近なところで出会い、寄り添い、行政の固い言葉を噛み砕いて説明し、必要に応じて専門機関などにつなげていけるのは、当事者と同じ市民サイドの人たちや団体。法や制度、行政は、市民が安寧に暮らせる環境を整え、必要に応じて当事者を含めた市民をバックアップしていく。
　地域人材交流研修会 in さっぽろは、札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課長の田村博美さんによる、札幌市における地域こども・子育て支援の行政側の取り組みの概要説明から始まった。田村さんは、行政説明の最後を、市民が担う地域子育て支援拠点に期待することで締めくくった。

ヒアリング調査票　（自治体向け）

地域包括及び子育て世代包括ケア　先進自治体調査票

世代や制度を越えた地域まるごとのケア体制構築に向けて、自治体及び団体のみなさまに、地域の支援体制などについての現状及び今後の展望についてお伺いします。

自治体向け

自治体名			
ご回答者名		ご所属部署	

貴自治体の子ども・子育て支援施策と地域保健福祉の現状及び今後について教えてください。

1.　子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容について教えてください。

2.　利用者支援事業の詳細について教えてください。

3.　地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無
　ア）ある場合は、その内容と、これまでの経緯などについて教えてください。

　イ）ない場合は、両分野の連携についての予定や検討事案があれば教えてください。

5. 地域保健福祉に関する協議体について
　ア）協議体の有無

　イ）協議体がある場合の体系と陣容

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

7.　生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定。

・自治体基本情報

①　人口（2019 年 5 月 1 日 or 4 月末）	人
②　面積	㎢
③　未就学児童数（5 歳以下）と世帯数	人　　世帯
④　出生数	2017 年度：　　人　2018 年度：　　人
⑤　合計特殊出生率	2017 年度：　　2018 年度：
⑥　人口流出入数	2017 年度：　　人　2018 年度：　　人
⑦　未就学児童の年齢別数と保育状況（2019 年 4 月時点）	5 歳児：1 号認定　　人　2 号認定　　人　在宅　　人 4 歳児：1 号認定　　人　2 号認定　　人　在宅　　人 3 歳児：3 号認定　　人　2 号認定　　人　在宅　　人 2 歳児：3 号認定　　人　在宅　　人 1 歳児：3 号認定　　人　在宅　　人 0 歳児：3 号認定　　人　在宅　　人
⑧子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴	**子育て世代の就業状況、ダブルケアの実情、慣習、社会・文化的背景など**
⑨保育所待機児童数【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】（2019 年 4 月時点）	保育園：公立　　件、私立　　件 認定こども園：計　　件（公立　　件、私立　　件） （幼保連携型　　件、幼稚園型　　件、保育所型　　件、地方裁量型　　件） 幼稚園：公立　　件、私立　　件
⑩子ども・子育て支援関連予算額	2017 年度：　　円 2018 年度：　　円
⑪それぞれの施策を進めるための庁内体制について（庁内組織数、参画部署名）	
⑫子ども・子育て支援事業について（地域子育て支援 13 事業及び母子保健の実際）	

☆子ども・子育て支援事業計画及び地域保健福祉計画、高齢者地域福祉計画及び介護計画をあわせてご提出いただけると幸甚です。

ヒアリング調査票　（NPO・市民活動団体向け）

地域包括及び子育て世代包括ケア　先進自治体調査

世代や制度を越えた地域まるごとのケア体制構築に向けて、自治体及び団体のみなさまに、地域の支援体制などについての現状及び今後の展望についてお伺いします。

地域団体・市民活動団体向け

団体名			
ご回答者名		**部署あるいは役職名**	

貴団体の事業及びこれまでの経緯などについて教えてください。

1. 主たる事業の紹介

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかね

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

5. 地域における連携体制とその実情

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性

イ）ない場合、行政や他団体との連携の現状や今後の予定について

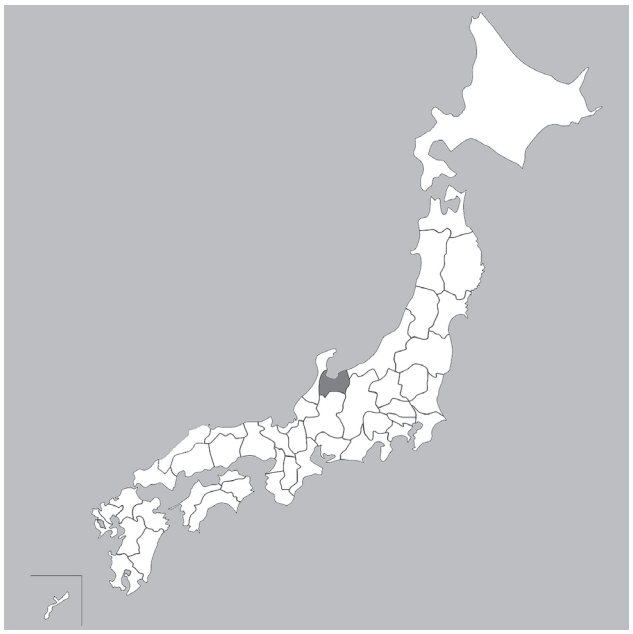
・団体基本情報

団体名		
所在地		
従業員数	名	
事業概要	これまでの事業の歩み	
	事業会計報告	
	事業別利用者数と内訳	
	事業の運営体制（スタッフ数など）	
	実施事業サービスと法令との関係（ex. 介護保険、子ども・子育て支援新制度事業）	
	設置および運営財源	

☆書き込みづらいなど、必要に応じて、貴団体の事業報告書などをご提供いただけると幸甚です。

先進自治体調査

富山県 南砺市



自治体基礎データ

人口(2019年４月末)　50,777人

面積　668.64㎢

未就学児童数(5歳以下)と世帯数　1,883人　1,401世帯

出生数　2017年度: 276人　2018年度: 291人

合計特殊出生率　2017年度: 1.50　2018年度:

人口流出入数　2017年:　人　2018年:　人

未就学児童の年齢別数と保育状況

5歳児: 1号認定　12人　2号認定　331人　在宅　人

(2019年 4月時点)

4歳児: 1号認定　21人　2号認定　299人　在宅　人

3歳児: 1号認定　12人　2号認定　306人　在宅　人

2歳児: 3号認定　258人　在宅　35人

1歳児: 3号認定　226人　在宅　76人

0歳児: 3号認定　26人　在宅　258人

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

南砺市合併は平成 16年 11月 1日、ちょうど 15年になる。合併時の人口は 59,230人だったが、年々減少傾向。少子化も進んでいる。近年は、ひと学年 300人余りから 300人を切る傾向。下りカーブをいかに緩くしていくか。今年度、第二次総合計画を策定していく中で、今後どのような事業を進めていくかが課題。

保育所待機児童数

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】(2019年 4月時点)

保育園: 公立 11園　私立 1園

認定こども園: 計 3園　(公立 1園　私立 2園)

(幼保連携型 2園　幼稚園型 0園　保育所型 1園　地方裁量型 0園)

幼稚園: 公立 0園　私立 0園

子ども・子育て支援関連予算額

2017年度: 2,090,718,963円(給与費除く)

2018年度: 2,152,230,611円(給与費除く)

それぞれの施策を進めるための庁内体制について(庁内組織数、参画部署名)

市民協働部南砺で暮らしません課

地域包括医療ケア部地域包括ケア課、福祉課、健康課、保健センター

教育部こども課

子ども・子育て支援事業について(地域子育て支援 13事業及び母子保健の実際)

①利用者支援事業

②地域子育て支援拠点事業

③妊婦健康診査

④乳児家庭全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)

⑤養育支援訪問事業

⑥ファミリー・サポート・センター事業

⑦一時預かり事業

⑧延長保育事業

⑨病児保育事業

⑩放課後児童クラブ

福野庁舎（市長公室があり、現時点での南砺市の本庁的位置づけ）

南砺市地域包括支援センター

南砺市の地域保健福祉の総合窓口になっている地域包括支援センター 1 階

幼い子どもを遊ばせるスペースも（南砺市地域包括支援センター）

南砺市へのヒアリング

1. 子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容

「なんとの健やか子育て支援 2019」参照
幼稚園は全て幼保連携型の認定こども園に移行済み。
南砺市内に院内保育所、企業主導型保育所等の認可外保育施設があるので、在宅児の数のうち、そうした施設に通っている子どももいる。
子ども・子育て支援事業のニーズ調査は昨年度終了。今年度は子ども・子育て支援事業計画の策定作業に入っている。
・第 1 期まとめる時との違いは？
幼保小の連携、発達に気がかりな子どもの継続的な支援の必要性などから、市の機構改革により平成 28 年 4 月からこども課が教育部に組織替えとなり部内の連携強化を図っている。子ども・子育て支援事業計画は次世代育成支援対策を引き継いで進めているので、関係部署が連携し修正案を作成しているところで、その後パブリックコメント。
・出生祝い金
三世代同居を推奨しており、一緒に住んでいる方（同一敷地別棟可）には家族の間の支え合いを推進するために加算して出している。将来的には事業を見直していく方向。子育てや将来的な介護など家族間の支えあいを期待している。また、高齢者のみの世帯にならないように、空き家対策、防犯面でも、ずっと親と一緒に住んでほしい。

2. 利用者支援事業

母子保健型。南砺市型「ネウボラ」推進事業を推進している。
子育て支援センターは保育園に併設。母子手帳の交付は福光保健センター、健康課保健係で常時受け付けている。必ず面談をする。（平保健センターは、金曜日午前中は常駐している。周知。）地区担当保健師を決めていて、継続的に支援をする。支援対象は妊娠期から 4 歳くらいまで（保育園などに入るまでの間）。地域で担当するため一人が何人担当するかは地域により異なる。心配なケースを主にフォロー。
南砺市には出産できる施設がない。砺波市、高岡市の病院、富山大学付属病院などで出産する。そのため、出産支援交通費を交付している。交通費は妊娠 20 週以降に申請することとなっており、申請時に体の状態や困難がないかなど面談も行う。
・マイナンバーカード連携親子支援アプリ
保護者のマイナンバーカードの個人認証機能を活用して子どもの健診や予防接種の情報・案内などを発信。電子母子手帳の機能も備えている。
・心配なケースには？
保健センターの職員　→ 市のこども課に連携　→ 児相（県の施設）
医療機関からの報告　→ こども課に報告　児相などどこが対応するか相談して連携
こども課に「女性子ども相談室」がある。職員は 4 人。ケースバイケースで対応。継続支援が必要な場合は対応。市と県の連携。こども課がハブになっている。
認定こども園とも連携。子育て支援センターとも連携。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

市長のモットーは「高齢者を大事に」、「誰も取り残さない」。
保育の基本理念は子どもの育ちを支える、保護者の子育てを支える、

子どもと子育てにやさしい社会をつくる。
「富山型」の居場所は、地域共生社会の先取りで、元看護師の惣万佳代子さんが始めたサロン。みんな集まれば動ける人は作業する。みんな同じ人間としてごちゃまぜに見ようという取り組み。
南砺市では小規模多機能自治推進会議ネットワークに参画しており、地区で部会を立ち上げている。今年から始まったばかり。
子どものうちから認知症の教育をしている。「一人暮らしの認知症の方が笑顔で暮らせるまちづくり」という文を「5つのまちづくり規範」の中に掲載している。高齢夫婦のうち一人が亡くなった後などに、認知症になる高齢者もいるので、自治会単位で認知症徘徊訓練を行っている。コントをできる劇団によるレクチャー、実際街に出ての訓練も。
この地域には、人と人とのつながりを大事にする「土徳」という言葉がある。もともとの土地柄。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

小規模多機能自治に基づく地区の部会の中には、週1回0～90歳までの集まりになっているところもある。
平成27年から小中学校に在籍中に、1回は認知症サポーター講座を行う。「認知症の方は困った人ではなくて困っている人だよ」ということを教える。三世代同居率が高い。自分のことを可愛がってくれている祖父母が将来認知症になった時の対応という意味も。
・相倉地区
Iターン、Uターンが4世帯。子どもが12人。保育園は平地域にある。スクールバスなどを使い、子どもたちは地元のおじいちゃんやおばあちゃんが面倒を見ている。若い世代が消防の訓練や獅子舞行事や、屋根の葺き替えなどにも参加している。

5. 地域保健福祉に関する協議体

市の社協とタイアップ。形の上では第2層を設置。第1層はまだ。第2層もうまく動かしきれていない。旧町村ベース。旧4町4村のまとまりを5地区の圏域に分けている。基本の単位は31地区（旧小学校）、自治振興会のような区分けがある。小規模多機能自治の一番小さな区分け。

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

一般社団法人なんと未来支援センターが中間支援として立ち上がり、婚活支援や移住定住の支援なども。センターができたことで、職員の負担は軽くなった。
医療崩壊の危機があった。平成22年に「南砺の地域医療を守る会」「マイスター」。市域が広い。民間の医療が少なくて医師の高齢化が進んでいる。住民自身が公的なものに頼らざるを得なくなってきている。市民病院が2つある（南砺市民病院・公立南砺中央病院）。砺波まで行かずに地元の病院を使うようになった。富山大学医学部の山城清二教授が、若いインターンのお医者さん、総合診療を志す人たちを送り込んでくれた。昔から住民自治をやりたかった市長が、「小規模多機能」という言葉でストンと落ちた、と。五箇山などの山間部の診療所に若い医師を派遣。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成について

第2層コーディネーターとして、5名配置することとしている。
活動範囲は南砺市全域とするが、南砺市高齢者保健福祉計画に定める。日常生活圏域ごとに、それぞれ1名を配置することも可能。

回答者
地域包括医療ケア部担当部長　健康課長　社会福祉事務所長
井口一彦さん
次長　地域包括ケア課長　中家立雄さん
参事　福祉課課長　吉田孝幸さん
健康課　保健センター所長　河原洋子さん
教育部参事　こども課課長　子育て支援センター長　武田秀隆さん
市民協働部　南砺で暮らしません課　協働のまちづくり係長
勇崎香志さん

ヒアリングに伺った地域包括ケアセンターは、南砺市の保健福祉部署の総合窓口も兼ねており、ヒアリング当日は3歳児健診が行われていた。平成29年に元県立高校だった土地を譲り受けて新築した。市の機能は、保健センターほか、合併前の旧4町の施設に分散している。現在、市長室がある福野庁舎、市議会がある福光庁舎が中心機能を担っているが、2020年7月には、福光庁舎が統合した形での市庁舎になる。保健福祉部署は地域包括ケアセンターに集結させたままで継続する。
相倉地区のように、地域の高齢者が若い世代の子どもたちの面倒を見るので、子どもの数が増えている地区もあるが、旧村部では昔から人口が少なく、今も人口減少が進んでいる。保育園も1園あたりの児童数は10人から30人弱と少ない。小学校の統廃合は、福光地域で4つあった小学校が一つ減っている。平地域と上平地域の学校統合では、旧村に1校ずつあった小学校・中学校を、平地域に中学校、上平地域に小学校を置く統合を行っている。通学はスクールバスで、現在までそれを引き継いでいる。
市全体の傾向としては、若い人が平野部に降りてきていて、山間部の人口が減っている。山沿いの集落に住んでいた人が、結婚を機に旧市街地郊外の団地に移り住む。南から北に、砺波市に近い方へ若い人が移動する傾向。通勤は金沢市や富山市へも。車でJRの駅まで行って、そこから通勤する人も。福光地域は富山より金沢の方が近い。生活の足はほぼ車。免許の返納も難しい状況がある。市営のバスをきめ細かく走らせている。JRなどが撤退した路線で市営の路線を増やしている。
小規模多機能自治を始めたが、2年半の準備で始めてしまったので、まだまだこれから。他地域では時間をかけて問題を洗い出してというところもあるが、ここではスタートラインを決めてそこに合わせて始めたかたち。現状28地区で始まっていて、来年度4月には残りの3地区でも始まる予定。31地区を平等に底上げするのは難しい。先進的なところの事例を「自慢大会」という形で盛り上げて、他を引っ張っていってもらう。村社会なので、言葉の浸透度は高い。中身が何なのかというところはこれからかもしれない。
人口減少、過疎化によって起こるさまざまな困難に、一つ一つ立ち向かってきた地域。ものづくりが盛んな側面もあり、地域包括ケアセンターのある井波地区は木彫りの井波彫刻が盛んな地域。井波彫刻は欄間や衝立、仏像、獅子頭などが知られている。世界遺産の五箇山では、合掌造りを守るために、さまざまな伝統技術を受け継ぐ努力がなされ、それが新たな産業を生んでいる。手漉き和紙やシルク染など、さまざまな手仕事が受け継がれてきた。その勤勉さもあるのだろうか、貧困

率はそれほど高くない。統計的にも４～５％の間。富山県は生活保護率も日本一低く、持ち家率も高い。収入に対して支出が低いので手元に残りやすいという。

行政ヒアリングで出てきた、この土地の人と人とのつながりを大事にする「土徳」という人柄に、実際に触れることができた。本文中にも出てきた富山型のごちゃまぜの居場所については、砺波市、射水市の居場所を視察、意見交換なども行なった。南砺市にも素敵な居場所があり、砺波市などのヒアリングの際に ponte とやまの加藤愛理子さんとともにご案内くださった中山明美さんは南砺市で「ほっこり南砺」というみんなの居場所を運営、民泊事業も手がけていらっしゃる。行政へのヒアリング終了後にお邪魔したところ、子育て支援のために家を建てたという木下三喜子さんをご紹介くださった。

田んぼが広がるところに瀟洒な 2 階建ての家があり、1 階の半分を木下さんのお子様がカフェとして営業、もう半分を居場所スペースに、2 階には体を動かすスペースと研修スペースとして使っているという。「だれでもハウスめぐみ」と名付けられたスペースは、「赤ちゃんからお年寄りまで、誰でも気軽に遊びにきていただいて、遊びながらまた語らいながら心を明るく軽くしていただきたい」と始めたそう。木下さんは長く保育士をしていらして、長年親子に接しながら、子どもと親の置かれた環境が次第に厳しくなり、支えること、共に歩んでいける環境づくり、実際に働きかけられる場づくりが必要だと思うようになったという。２階の研修スペースでは、発達が気になるお子さんと親向けなど、親と子の暮らしが少しでも明るく軽くなるための学習会を開催している。基本交流スペースはノンプログラムだが、手品を披露してくださるなど、地域の人が訪れたり、野外での活動や、2階の体を動かすスペースでのリズム遊びなど、ときどきプログラムが入る。

田んぼに向かって庭もあり、そこに設けられたブランコは、カナダなどで見るように座るところが柔らかな素材で出来ていて、座った子どもの体を柔らかく支えてくれる。彼の地では立って漕がせない意味合いもあったが、木下さんは 100 均ショップで見つけて、とっさにブランコに応用しようと思いついただけとのこと。1回 100 円の協力金以外は受け取らず、場を続けている。地域の親子のために、ひたすら温もりのある場づくりを心がけ、困りごとを抱える親子に伴走し続ける木下さんを、中山さんは「まさに土徳の人」と紹介してくださった。そう笑う中山さんご自身が、土徳の人。南砺市の土地柄かもしれない。

ほっこり南砺外観

めぐみ1階

めぐみ外観

めぐみ1階壁面

めぐみ看板

めぐみブランコ

一般社団法人 Ponte とやま

団体基礎データ
所在地：富山県砺波市宮森 303
従業員数：3名
事業会計報告：　2018 年度は全収入が 800 万円ほど
事業別利用者数と内訳：
事業の運営体制（スタッフ数など）：理事長、理事、従業員、講師 10 名ボランティア 6 名ほど
実施事業サービスと法令との関係：認知症カフェ事業（砺波市）
設置及び運営財源：個人
ＨＰ：https://ponte-toyama.com

1. 主たる事業

みやの森カフェの運営：週 3 日のランチ営業・相談会、当事者会、凸凹キッズのためのプログラム（園芸療法・カフェ体験・こくごの教室・製作活動・プログラミング教室など）、介護おしゃべり会、認知症カフェ（月 1 回砺波市との協働）・就労支援（カフェ内での就労体験）
学習サポート：県内 5 箇所での小中学生・高校生の学習支援、
他に　小学生の運動教室（富山大学との協働）、イベント・フォーラムなどの開催、駅チカ居場所（駅に近い場所を借りて居場所活動・砺波市との協働）、特養「かがやき」での就労サポート事業

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

理事長水野カオルは、20 年間特別支援教育の教員。加藤は 20 年間富山 YMCA フリースクール講師。二人とも、障がいを持つ姉妹がいることで知り合い、意気投合。8 年ほど前から発達障がいなどの生きづらさを持つ子どもたち、若者達の支援活動を開始。5 年前、加藤が終の棲家を建てる際、庭に小さなカフェを作る。ここを拠点にして一般社団法人「Ponte とやま」を 2014 年 7 月に設立。当初介護している人たちが来るためのケアラーズカフェにしようと思ったが、子ども、若者の相談が多数来るようになったため、年齢や状況にとらわれないごちゃまぜカフェに方針を変更した。5 年経った今､赤ちゃんから高齢者、近所の人も県外の人も訪れるカフェになっている。学習サポートや個別相談の需要も増えてきている。

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかね

設立当時は、理事長水野と理事加藤、カフェを手伝ってくれる有償ボランティア 3 名、学習サポートを手伝う学生 5 名などで運営開始。2018 年から会計および広報担当従業員を非常勤で雇用。現在カフェは有償ボランティア 6 名、学習サポート講師は 10 名。カフェの建築、初期費用は加藤が拠出。その後は、二人で収入を確保してきた。行政からの助成は、月 1 回の認知症カフェに委託費が支払われている。駅チカ居場所には場所代が助成されている。それ以外は、カフェ、学習サポート、プログラム参加費、個人相談料、特養「かがやき」での就労サポートの相談料などが収入源。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

カフェでの雇用は行わず、経験を積んだ有償ボランティアを中心に、はたらく練習をしたい若者などがカフェ営業を回している。本人にとっても客として毎回は来られなくても準スタッフとして参加できることで居場所と働く自信を取り戻していくというメリットがある。現在週 2, 3 回のランチ営業なのでそれで成り立っているが、回数を増やすのは責任者の負担が大きく不可能である。学習サポートも学生が卒業するとそのたびに人の確保が難しい。社団においても現在従業員は非常勤で一人のみ。そのための財政的な圧迫は少ないが、仕事の負担はけっこう大きくなってきている。

5. 地域における連携体制とその実情

小さな社団なので、他の団体、個人との連携が不可欠である。石川県などの他県および富山県内の民間の居場所あるいは制度内の事業所を、地域、困りごとの内容などによって積極的に紹介をしている。最近高齢者関連の事業所とイベントなどを共にすることで連携が取れるようになり、就労の場を提供してもらったり、こちらに相談に来た人の相談対応などをお願いしている。富山大学附属病院の総合診療部、在宅医療専門のものがたり診療所、その他精神科の病院などとも連絡が取り合えるので、医療に繋げやすくなってきている。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
認知症カフェ（ほっとなみカフェ）：月 1 回の活動で、25000 円の助成をもらっている。臨床美術と笑いヨガを交互に行っている。地域･年齢･状況がごちゃまぜでもかまわないと言われているので自由な雰囲気で活動している。認知症の相談はここではほとんど入らないが、ふだんカフェのときに少しずつ相談が入るようになってきた。
駅チカ居場所：みやの森カフェは公共の交通手段がほとんど無いため、月に 1 回、駅から歩いて 5 分のギャラリーを借りておしゃべり会をしている。2019 年度限りの助成金で場所代と駐車場代を助成してもらっている。若者達を含めて毎回 20 人近く参加している。

回答者：一般社団法人 Ponte とやま理事　加藤愛理子さん

金沢市でヒアリングを行った「日常生活支援サポートハウス」の山本実千代さんから、ご紹介いただいて加藤さんと連絡を取り始めた。山本さん、加藤さんと、さらにもう 1 法人、居場所づくりを行なっている団体同士で情報や意見の交換を定期的に行っている。タイミングよく、一般社団法人 Ponte とやま設立 5 周年記念イベントに参加、その懇親会でみやの森カフェへお邪魔した。関わる方々が一堂に会しただけでなく、みやの森カフェの雰囲気、団体のミッションやポリシーなども十分に感じることができた。
カフェには誰でも横になれるスペースがあり、子育てひろばの親のための昼寝スペースを思わせるようで、この場の緩くてぬくもりの感じられる雰囲気を象徴しているかのようであった。
Ponte とやまには新しくデザイン出版部が誕生、「グラフィックファシリテーションで綴る　とやま居場所×人」Vol.1 と 2 を発行した。富山県内の居場所を運営する人たちのつながりの中から生まれた 2 冊である。ここでは、今回ヒアリングを行なった「特定非営利活動法人ふらっ

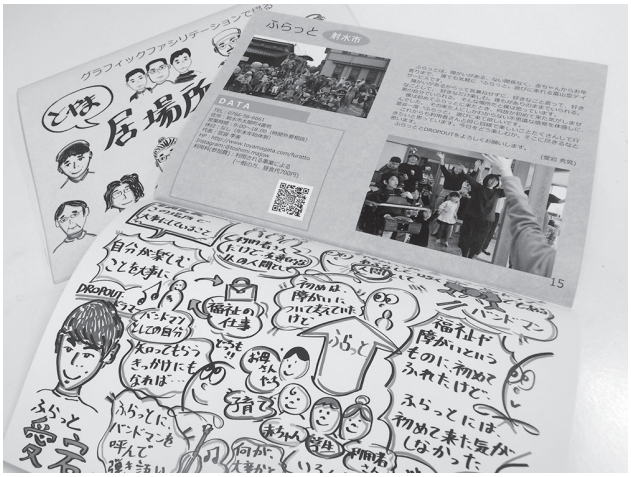
と」、「一般社団法人ガチョック」のほか、お世話になった中山明美さんが運営する南砺市内の「ほっこり南砺」などを取り上げている。居場所を運営する人々同士が、出会い、意見や情報を交換し合うのは、日常的なことらしい。これぞネットワーク。訪れた人の困りごとには、ネットワークで知り合った助っ人や機関をつなぐ。ごちゃまぜにつながり、つなげるのが当たり前になっていることが素敵だ。

カフェと団体の立ち上がりについては、「庭に小さなカフェをつくったらみんなの居場所になった一つなげる×つながる　ごちゃまぜカフェ」（ぶどう社刊）に詳しい。

ponteとやま　みやの森カフェ外観

ponteとやま　カフェ内　加藤愛理子さん

グラフィックファシリテーションで綴る　とやま居場所×人



グラフィックファシリテーションで綴る　とやま居場所×人

みやの森カフェを通じて ponte とやまの取り組みを紹介した本

特定非営利活動法人ふらっと

団体基礎データ
所在地：〒 939-0361　富山県射水市太閤町 14 番地
従業員数：正規職員　12 名　非常勤　20 名　このほかに学生アルバイトなど
事業会計報告：平成 30 年度経常収益　86,369,362 円
事業別利用者数と内訳：
事業の運営体制（スタッフ数など）：　平成 29 年度事業報告によれば、職員 27 名体制。
実施事業サービスと法令との関係：
■障害福祉サービス
多機能型（生活介護・生活訓練）事業
指定相談支援事業
射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援）
基準該当児童デイサービス事業
富山県単独在宅障害児（者）等デイケア事業
福祉有償運送移送サービス（道路交通法許可）
■介護保険サービス
基準該当通所介護事業
基準該当通所予防介護事業
■子育てつどいの広場事業
設置及び運営財源：　在宅福祉サービス事業収益ほか
ＨＰ：http://www.toyamagata.com/furatto/

1. 主たる事業

自主事業：赤ちゃんでもお年寄りでもどなたでも利用できる居場所。食事もできる。富山型デイサービス。
ダッチファミリー (障がい児の親御さんが留守のときに、留守宅に出向いて子どもと一緒に留守番)
医療ケア児の入院付き添い及び入院中の保育、ショートステイ (いずれも自費)
通所介護
多機能型（生活介護・生活訓練）共生型放課後等デイサービス＆共生型児童発達支援事業
射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援）
福祉有償運送（道路交通法 79 条許可）
子育てつどいの広場事業・一時預かり事業
指定特定障害児者・精神相談事業・障害児利用計画等相談支援
指定一般相談支援
学童保育
地域生活支援・交流ハウスふらっとでは上記すべてを、自立支援ハウス DASH では、障害福祉サービス（自立支援給付）生活支援・自立訓練を実施。

2. ここに至るまでのきっかけ

自身の長男が自閉症だったことから、同じ発達障がい児母子たちとサークルを立ち上げ、県外の障がい児支援施策などを視察。親の立場として質の高い場を求めていたので、他県の優れた取り組みは大変参考になった。県教育委員会の後押しもあり、長男は小学校・中学校と地元の公立校に通学、インクルーシブ教育の先鞭をつける。
2000 年、周囲の勧めもあり、公設民営の形で地域生活支援・交流支援ハウスふらっとを開設した。開設に際しては、事業者だけでなく、利用者の家族や地域の方々、行政など、あらゆる方々のサポートが大きかった。
（現在までの経緯は、宮袋さんの自著「バリア・ブレイク」（雲母書房刊）に詳しい）

3. 関わってきた人（キーパーソン）、もの、お金

長男を連れて買い物などさまざまなところへ行ったが、その都度、自閉症の長男は思いもかけない行動に出る。行く先々でさまざまな人に頭を下げることになったが、地域の人とつながるきっかけにもなった。夫が公務員だったので、公務員宿舎に住んでいた。同じ宿舎に住む同じ年頃の子どもに長男が噛み付いたのがきっかけで、子どもの母親と大親友になるなど。

長男を地元の公立小学校に通わせたいと地元教育委員会と交渉、県教育委の後押しがあって小・中と地元の公立校へ。高校は特別支援学校に進学。成人式で小中のクラスメートと再会。何の隔たりもなく当時と変わらぬ元クラスメートたちとの関係に、「息子は地域で育ったと実感した」。

富山型デイサービスの創始者惣万佳代子さんが講演に行くときに、ドライバー役をやっていた。長男を連れて行っていたので、講演が終わるたびに、長男の行動の後始末をしていた。その姿をみていた惣万さんから、公設民営で立ち上げる高齢者と若年層等の交流スペース (現在のふらっと) の運営を任せたいと旧小杉町議会で決まりかけたときに、「自分の子どもも抱えているのに無理」と反対されたが、逆に発奮。障がい児の親にとってどうしても必要なのだと初心を貫いた。

惣万さんが運営する富山型デイサービス「このゆびとーまれ」では、夏に近くの特別支援学校でプールを借りていたが、校長が代わって借りられなくなってしまった。何度交渉しても平行線。当時の県教育長に事の次第をファクシミリで送ると、全県の特別支援学校の校長が招集された。これをきっかけに「富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会」がスタート。富山型デイサービスで障がい者がスタッフとして働いていることが知られたり、特別支援学校に子どもを通わせる親の訴えを見過ごさず、解決に導いたり、双方の相互理解を深める議論の場となっている。また、平成 25 年からは、「特区」ではあるが、障がいのあるスタッフと一緒に働く事業所にも「施設外就労協力金」が入るようになるなど、それまで現場の気概でやってきたことが、制度上、きちんと認められていっている。

現在、宮袋さんの長男もふらっとを利用しているが、スタッフのおかげで、長男との距離がうまく保たれ、長男も落ち着いて一緒にいられるようになった。「この子のために」と熱心にやっていた頃、わが子は荒れていたのが、今は落ち着いててお互いにハッピー。

現在、富山型デイサービスは県内に 130 カ所あり、うち 86 カ所がネッ

トワークに参加しているが、障がい児者支援を行っているのはふらっと１カ所だけ。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

・鍵をかけられないこと。利用する子どもたちの状態から鍵をかけられないが、鍵をかけないことで利用者が外に出て行ってしまったり、無用心であったりと大変悩ましい。
・理念と経営のバランス取るのは大変。

5. 地域における連携体制とその実情

清掃や畑仕事、昼食作りは、これをやりたいと手を挙げてくれた地元ボランティアの方々。
富山型デイサービス・ネットワーク
富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会
富山ケア・ネットワークなど、県域のネットワークや協議会で、さまざまなところと連携。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
通所介護
多機能型（生活介護・生活訓練）共生型放課後等デイサービス＆共生型児童発達支援事業
射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援）
福祉有償運送（道路交通法 79 条許可）
子育てつどいの広場事業・一時預かり事業・放課後児童クラブ（以上、子ども・子育て支援新制度地域子育て支援事業）
指定特定障害児者・精神相談事業・障害児利用計画等相談支援
指定一般相談支援

回答者：特定非営利活動法人ふらっと理事長　宮袋季美さん

休日にお邪魔し、建物内で子どもたちがくつろぐ中でお話をお聞きした。こちらがメモを書き込む調査票に興味を示した男児が興味の赴くままに手に取ろうとするのを、思わず必死になって引っ張ってしまった。ムキになっちゃいけないよねと苦笑いしていたら、宮袋さんがうまくとりなして、返してくださった。障がい児には、その子ならではの発達の特性があるので、十把一絡げな対応はできない。いきなり出会って適切な対応をするのは難しい。しかし、強弱はあれど、人間、一人一人特性は違うのだから、対応が難しいのは障がいを抱える人だけではない。
宮袋さんご自身が、自閉症の我が子を授かるとは思ってもみなかったし、なんだか違うなと思いながらの育児のスタートで、自閉症とわかるまでにも時間がかかったという。出かける先でさまざまな狼藉を働く我が子を追いかけ、ひたすら謝り、時にお金を払う。そうしたことが、地域で宮袋さん親子の存在を認知させることになったし、自分のものを買いに行く暇がないから、手元には若い頃に買った派手な色合いの服しかなくて、年相応の格好もできない。しかし、そのおかげで目立つことが、逆によかったかもしれないと笑う。ひたすら前向きに物事を切り開いてきたパワフルな日々は、著書に詳しい。

医療福祉事業に関わる人は、「○○のために働く」の○○のところに利用者とか障がい者、患者などを入れることが多いが、宮袋さんは利用者の日常を守るためのサービスとして万全を尽くそうとしているので、雇用しているスタッフに「なんのために働いてるの？」と尋ねて、「生活のため」「お金のため」という返答に「よっしゃ！　頑張ろう」と思う。もし「利用者」とか「障がい者」という言葉が入るようではダメだという。プロフェッショナルであることへの宮袋さん流の表現だと感じた。

ふらっと道路看板

ふらっと外観看板

ふらっと玄関

宮袋さんの著書「バリア・ブレイク」

地域包括及び子育て世代包括ケア　先進自治体調査

一般社団法人ガチョック

団体基礎データ
所在地：富山県射水市戸破 1893
従業員数：3 名
これまでの事業の歩み：平成 29 年 9 月 22 日設立
事業会計報告：2018 年度　140 万円
事業別利用者数と内訳：5 名
事業の運営体制（スタッフ数など）：3 名
実施事業サービスと法令との関係：障害者就労支援事業 B 型
設置及び運営財源：Youtube への動画アップによる広告収入
https://www.youtube.com/c/gachok
https://www.youtube.com/c/gachokmusic（新規チャンネル開設）
ＨＰ：http://gachok.toyama.jp/

1. 主たる事業

就労継続支援事業 B 型
困りごとや福祉関係の相談・訪問支援
誰でもいられる場所の提供
対象者：困りごとをお持ちの方、障害をお持ちの方、学校にも家にも居たくない方、その他遊びに来たい方
利用料：相談　無料 / 居場所利用　300 円 / 自宅訪問　3000 円
開所時間：9：00 ～ 17：00

2. ここに至るまでのきっかけ

澤田さんは、もともと病院で働くソーシャルワーカーだった。30 歳のときに一人で波照間島を旅行した。そこではびっくりするくらい誰も働いていない。価値観がまったく違う。周囲の期待や価値観でがんじがらめになっていた澤田さんは、「これでいいんじゃない？」と衝撃を受けた。「仲間たちと自分で事業をやっちゃう？」
福祉畑だったので、できることは福祉。福祉の世界で生きていこうと改めて決めた。自分たちが仕事をしていて、かゆいところに手が届かなかったところや、制度を使うと対応できなくなってしまう人たちを助けてくれる人がいるといいよね、自由に動けるワーカーがいたらいいと思い、起業を決めた。
不登校や引きこもりの若者がいられる場所づくり。障害者の就労支援として、まともにしっかり働くのは難しいし、納期があると追われてしまう。納期もなく、対人スキルも必要がない仕事として YouTube に動画をあげてフォロワーを増やし、広告収入を得る方法を考えた。YouTube の収益化要件を満たし、広告収入が得られるようにした。動画サイトでは、その動画が好きな人がフォロワーとなって集まってくる。再生回数増を目指して、次々にコンテンツを増やしていった。2 つのチャンネルを運営、ひとつは動画数 1300 本を超え、フォロワー数も 1 万人を超える。あたらしいチャンネルでは、さらにアイデアを凝らした動画アップを目指している。

3. 関わってきた人（キーパーソン）、もの、お金

思いを同じくするスタッフ 3 名（社会福祉士、精神保健福祉士、教員

免許）と、利用者 5 名。
登録したいという人は増えている。
法人としてお金儲けにつながる事業は行わないが、就労継続支援事業 B 型を通じて、（利用者にも法人 = スタッフにも収入をもたらす）収益が得られるように考えている。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

お金をどうやって回すか。
居場所運営は、お金にならないのに手間がかかる。ビジネスモデルとしては破綻している。
近所に住む大家さんのご厚意で、家賃 55,000 円のところを 50,000 円にしていただいた。先月ようやくスタッフ一人につき 6 万円の給料を支払えた。もちろん社会保険料天引き後の手取り額。

5. 地域における連携体制とその実情

清掃や畑仕事、昼食作りは、これをやりたいと手を挙げてくれた地元ボランティアの方々。
富山型デイサービスネットワーク
富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会
富山ケアネットワーク　など、県域のネットワークや協議会で、さまざまなところと連携。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
就労継続支援 B 型事業所

回答者：一般社団法人ガチョック代表　澤田啓輔さん

民家まるごとが居場所。その1室で就労継続支援事業B型としての動画作成機材を運び込んで作業をしているようだ。人とのコミュニケーションが苦手でも、自ら動画を作ってサイトにアップすることは出来る。良い着眼点だと思った。
案内役の加藤さん、中山さんだけでなく、宮袋さんも同行。富山型デイサービスの現状などについても、澤田さんも交えてあれこれお聞きするひと時となった。

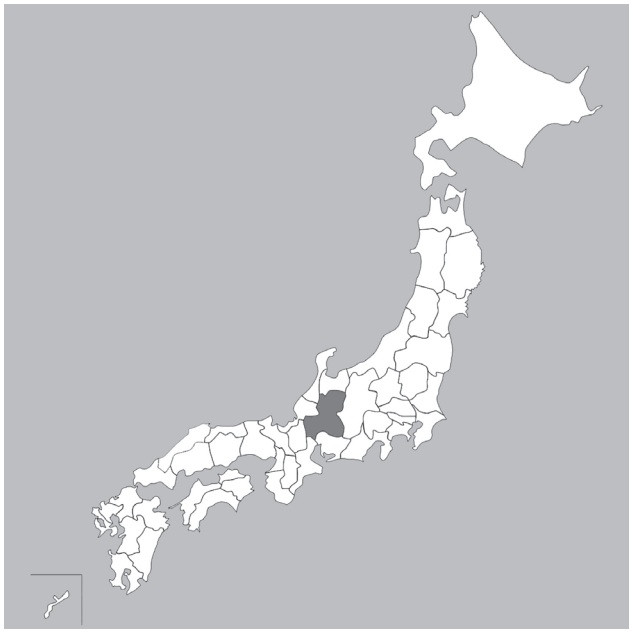
ガチョック外観

ガチョック看板

ガチョックなんでも相談看板

ガチョック作業場

岐阜県 大垣市



自治体基礎データ

人口（2019 年 4 月末） 161,325 人

面積 206.57㎢

未就学児童数（5 歳以下）と世帯数 8,166 人 6,201 世帯

※国勢調査 H27

出生数 2017 年度：1,269 人 2018 年度：1,222 人

合計特殊出生率 2017 年度：1.47 2018 年度：未発表

人口流出入数 2017 年度：364 人 2018 年度：320 人

未就学児童の年齢別数と保育状況（2019 年 4 月時点）

5 歳児：1 号認定 381 人 2 号認定 898 人 在宅 98 人（差引）

4 歳児：1 号認定 368 人 2 号認定 859 人 在宅 92 人（差引）

3 歳児：3 号認定 365 人 2 号認定 865 人 在宅 157 人（差引）

2 歳児：3 号認定 689 人 在宅 649 人（差引）

1 歳児：3 号認定 463 人 在宅 781 人（差引）

0 歳児：3 号認定 113 人 在宅 1,079 人（差引）

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

※回答は省略させていただきました。

保育所待機児童数

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

（2019 年 4 月時点）

→保育所待機児童数 0 人 保育園：公立 16 件、私立 9 件

認定こども園：計 7 件（公立 0 件、私立 7 件）

→保育所待機児童数 0 人 (幼保連携型 6 件、幼稚園型 0 件、保育所型 1 件、地方裁量型 0 件)

→右欄には本市の設置状況を記載

幼稚園：公立 15 件、私立 3 件

子ども・子育て支援関連予算額

2017 年度：10,137,010 千 円（当初予算）

2018 年度：10,514,790 千 円（当初予算）

※児童福祉費及び幼稚園費の予算額を計上しました。

それぞれの施策を進めるための庁内体制について（庁内組織数、参画部署名）

大垣市子育て支援対策推進本部（16 部局 28 課）

※部署名は省略させていただきました。

大垣市役所外観

大垣市へのヒアリング

1. 子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容

大垣市保健センターでは、キッズピアおおがき子育て支援センターと「大垣市子育て世代包括支援センター」を設置し、連携のもと利用者支援事業を行っている。センターでは、保健師や助産師が母子健康手帳交付時の面接やアセスメントをし、関係機関の連携が必要と判断された場合は、キッズピアとの「妊産婦支援検討会議」や、関係機関との「個別ケース会議」、既存の「要保護児童対策地域協議会」で情報共有や支援検討を行う。ホームページの作成やリーフレット配布 医療機関や民生委員・児童委員、幼稚園・保育園などを行い、関係機関への周知を図っている。

2. 利用者支援事業

母子保健型では、専任の保健師と助産師が配置され、市内の妊産婦の情報管理を一括して行う。
母子健康手帳交付時には全数面接を行い、母子保健事業や子育て支援事業、地区担当者名を伝えるための全員に「ママと赤ちゃんのすこやかプラン」、ハイリスク妊婦には「妊婦支援プラン」を渡している。センターでは、直通の電話番号を備えた電話相談や、授乳室やベビーベッドを備えた相談室を活用した来所相談を実施している。妊娠期からの切れ目ない支援を行うため、妊産婦情報は地区担当保健師に引継ぎ、母子保健事業に繋げている。
基本型では、子育てアドバイザー（利用者支援専門員）が子育て相談や子育て情報の提供を行うなど、利用者に寄り添った支援を行っている。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

各種の福祉制度や分野におけるこれまでの『縦割り』の仕組みから、世帯が抱える複合的課題に包括的に対応する仕組みをつくり、また、サービスを受ける側、支える側といった固定概念を超えて、地域住民や地域の多様な主体が、周囲の人の困りごとも『自分のこと』として考えて、人と人、人と資源が世代や分野を超えてお互いに支え合い、『丸ごと』つながる地域共生社会の実現を目指すことを目的としている。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

ア）事例なし
イ）予定、検討事案なし

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア）協議体の有無
有　大垣市地域福祉計画策定・評価委員会

イ）協議体がある場合の体系と陣容

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

様々な団体等から委員として参加いただくことで、現状を把握し意見を反映する。
大垣市地域福祉計画策定・評価委員会の委員構成
「平成 31 年 3 月現在」（順不同・敬称略）
学識経験のある者
◎山田　武司　岐阜経済大学教授
　後藤　康文　岐阜経済大学講師
社会福祉を目的とする事業を経営する者
　伊藤　浩明　大垣市介護サービス事業者連絡会代表
　北嶋　　勉　大垣市介護サービス事業者連絡会代表
　脇淵　竜舟　大垣民間保育園連合会会長
　吉田　麗己　大垣市医師会副会長
社会福祉に関する活動を行う者
　宇納　弘幸　大垣市ＰＴＡ連合会代表
〇岡本　敏美　大垣市障害者団体連絡協議会会長
　酒井　保吉　大垣市連合自治会連絡協議会副会長
　中山　恵二　大垣市社会福祉協議会常務理事
　浅山　孝平　岐阜経済大学ボランティア・ラーニングセンター代表
　山田　明子　大垣市女性連合会副会長
　西田　勝嘉　かがやきクラブ大垣会長
　高橋　和子　大垣市民生・児童委員協議会代表
　林　　暁朗　大垣市青年のつどい協議会会長
　赤尾　春江　人権擁護委員代表
　安田　典子　ＮＰＯ法人くすくす理事長
　大橋　俊雄　大垣市ボランティア連絡協議会会長
その他市民が必要と認める者
　西松　　浩　岐阜県西濃保健所健康増進課長
　成瀬　重雄　大垣商工会議所専務理事
　平田　利男　市民委員
　川瀬　信子　市民委員

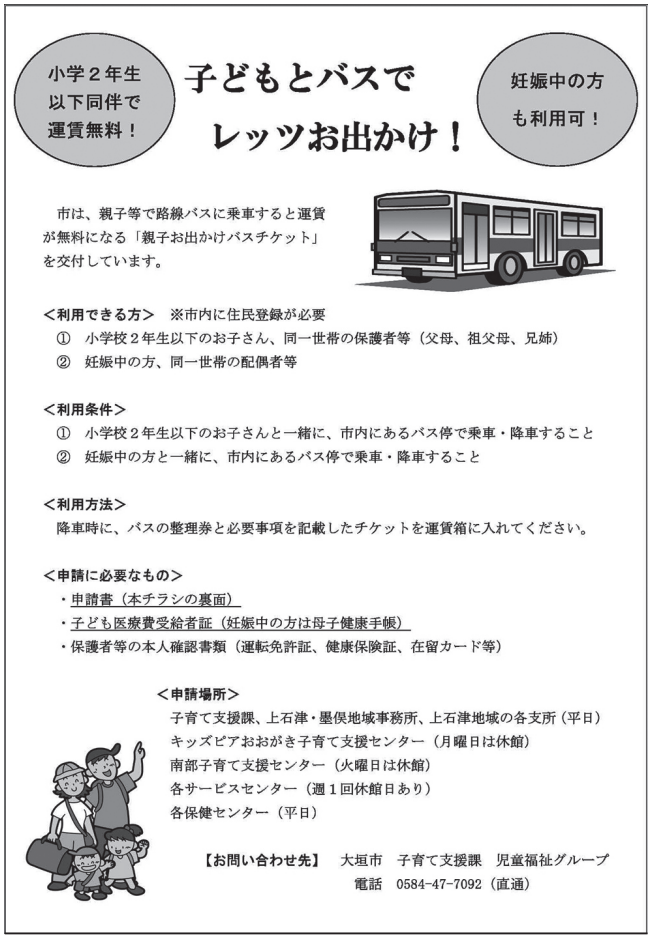
◎委員長、〇副委員長

7.　生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

現在、生活支援コーディネーターは、第 1 層コーディネーターを 1 人、第 2 層コーディネーターを 2 人配置している。今後も同様の人員配置を予定している。
また、生活支援養成講座を平成 28 年度から各 17 地区において開催し、人材養成に努めている。今後は、3 地区で養成講座を行う予定をしている。

回答者
子育て支援課（回答：社会福祉課、子育て総合支援センター）
説田　誠

子育て支援冊子「水都っ子」



親子バス利用支援事業リーフレット

特定非営利活動法人くすくす

団体基礎データ
所在地　岐阜県大垣市宮町 1 丁目 1 番地 スイトアベニュー 2 階
キッズピアおおがき子育て支援センター交流サロン
従業員数：23 名

これまでの事業の歩み：
・2002 年より現在まで、「応援と承認」を基盤に地域子育て支援拠点事業を実施（2002 年～大垣市子育て交流プラザ指定管理者、2016 年～キッズピアおおがき子育て支援センター交流サロン）
・2002 年より、岐阜県や大垣市より委託を受けるなどして、子育て支援者養成に係る講座を実施。
・地域子育て支援拠点を運営すると同時に、「孫育てサロン」や家庭訪問型支援「ホームスタート事業」など地域のニーズに応じて事業やイベントを実施。すこやか赤ちゃん訪問員としてもスタッフが委嘱を受け、乳児家庭訪問も実施している。
・2006 年～ 2015 年まで、岐阜県より委託を受け、県内の子育て支援及び支援者のためのサポートに係る業務を実施（子育て支援者のための研修事業は、岐阜県より委託を受け現在も実施）。地域における子育て応援ガイドブックや孫育てガイドブックなどを作成。
・企業と協働して「子育てひろば」運営や食育冊子の食べることに関わる相談コーナーを執筆 , 男女共同参画講座企画など実施。
・2007 年～大垣市商店街振興組合連合会の協力を得て、親子で個店を廻るハロウィンイベントを実施。
・2016 年～大垣市保健センターと共催で赤ちゃんの発達を促す親子教室を実施。
・岐阜県、大垣市、養老町などとの協働事業として、男女共同参画や女性の活躍推進に関する講座の企画・運営なども実施。
・2018 年～大垣市子育て世代包括支援センター基本型を受託。
・2019 年～大垣市ファミリー・サポート・センター事業を受託。

事業会計報告：H30 年度決算　経常収益合計 31,750,577 円
経常費用合計 30,950,396 円
事業別利用者数と内訳：H30 年度実績
〇地域子育て支援事業　42,251 人
・キッズピアおおがき交流サロン（33,849 人）
・その他の親子ひろば事業（7,549 人）
・研修事業（468 人）
・相談・訪問事業（185 人）
・地域との連携イベント（200 人）
〇女性のチャレンジ支援事業　約 300 人

事業の運営体制（スタッフ数など）：スタッフ 23 名　常勤 5 名
実施事業サービスと法令との関係：子ども・子育て支援法　地域子育て支援事業
・地域子育て支援拠点事業（基本型）
・利用者支援事業（基本型）
・ファミリー・サポート・センター事業
設置及び運営財源：大垣市委託事業、岐阜県委託事業、養老町委託事業
その他委託及び事業収入、会費
H P：http://www.wagamama.npo-jp.net

1. 主たる事業

〇地域子育て支援事業
・キッズピアおおがき子育て支援センター交流サロン（地域子育て支援拠点）
・大垣市子育て世代包括支援センター（基本型）
・家庭訪問型子育て支援・大垣市ホームスタート事業
・大垣市ファミリー・サポート・センター事業
・岐阜県子育て支援事業従事者等研修
〇女性のチャレンジ支援事業
・創業拡大支援×女性活躍新モデル事業
〇男女共同参画社会形成のための調査、研究、企画及び書籍の販売、出版事業

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

1992 年に「女性アカデミー企画委員」に応募したことをきっかけに仲間と出会い、1996 年に「大垣市女性会議」を発足。1997 年に「岐阜女性会議ネット」を、2000 年にはくすくすの前身である『大垣市の子育てを考える会』を立ち上げ、男女共同参画の視点から勉強会や子育て支援活動を行っていた。会に新たな仲間が加わり、2002 年 2 月、「地域に子育ての輪を広げる」というビジョンを描き、NPO 法人化した。「くすくす」という団体名には、活動拠点となる大垣を代表する常緑照葉樹のクスノキが新しい葉が出そろうのを待って古い葉が落葉することから、そんな風に子育て支援を循環していけたらいいなという思いと、子どもも親も『くすくすと笑える・すくすくと育つ』応援がしたい、という思いが込められている。

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかね

・くすくすでは当事者性を大切にしており、サービスの受け手が次は提供者になっていける「当事者性を生かした循環型支援」を目指している。地域の様々な立場の人に支えられてきたことはもちろんだが、子育て当事者であり、子育て支援の試行錯誤を繰り返してきたくすくすのスタッフ全員がキーパーソンである。
・「こんなもの、こんなことあったらいいな」というスタッフの思いを企画書に仕上げ、自分たちでできることは自分たちで即実行、社会的課題は行政等へ提案、を続けている。「想いを言葉にすれば、自分が変わる。その言葉を形にすれば、社会が変わる」

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

スタッフがエンパワーメントし、エンパワーメントされる場でもある。スタッフ一人ひとりが、「ひとりのいきいきと生きるモデル」として存在し、「母親」の役割に閉じこもらないこと。ひとりの「人」として、自分のライフスタイルに合った働き方をし、お互いが助け合い、お互いの個性や多様性を認め合うことが大切。
苦労することと言えば、人材の獲得。単なる人手ではなく、「くすくす」の活動理念に共感し、一緒に働くことができる人材を、常にアンテナを張って探している。

5. 地域における連携体制とその実情

岐阜県や大垣市などの行政、地域の NPO や団体、地元企業、商店街、民生委員など地元のキーパーソン等と、顔の見える関係性を大切にしながら連携を取っている。例えば、親子向けの教室では保健師や理学療法士らと、季節の親子向け行事では地元商店街と、地域住民と食卓を囲むイベントでは民生委員や各地区の社会福祉協議会と、育休復帰のママ支援では地元企業と、といった風に事業やイベントに応じてその都度連携を図っている。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
岐阜県及び岐阜県大垣市から委託事業を受けている（以下の通り）
・キッズピアおおがき子育て支援センター交流サロン（岐阜県大垣市より地域子育て支援拠点の運営を受託）
・大垣市子育て世代包括支援センター基本型（岐阜県大垣市より受託）
・大垣市家庭訪問型子育て支援ホームスタート事業（岐阜県大垣市より受託）
・大垣市ファミリー・サポート・センター事業（岐阜県大垣市より受託）

回答者
特定非営利活動法人くすくす副理事長・スタッフ　石井久美子さん

理事長の安田典子さんの提案もあり、地域人材交流研修会 in おおがきでは、移動支援をテーマにした。近隣の町で、人口減少と過疎化により路線バスが廃線となり、地域住民が移動手段に困っており、いずれ大垣市も同じ課題を抱えるのではないかというのが、その理由だった。
移動支援という新たな地域課題を発見、その解決策を探りながら、話題提供いただく方々を安田さんは自ら探していった。結果、子ども・若者支援を通して移動支援の必要性と重要性への気づきを語ってくださった岐阜市の NPO 法人コミュニティサポートスクエアの杉浦陽之助さん、岐阜羽島市で障がい福祉・児童福祉・更生支援・ボランティアセンターに取り組む社会福祉法人岐阜羽島ボランティア協議会の川合宗次さん、NPO 法人移動ネットあいちの遠山哲夫さんに、話題提供をお願いした。「移動＝住民の足の確保」は「すべての人の社会参加の足がかり＝まちづくりのキーとしても重要」で、「継続のための本気の施策・取り組みが必要である」というのが、お三方共通のご指摘だった。
大垣市はきめ細かな子ども・子育て支援策を行なっており、小学 2 年生までの子どもと暮らす世帯には、無料で市内の路線バスに乗れるチケットを交付している。行きたい場所へ行くために必要な交通費の支援もまた移動支援である。しかし、もし路線バスが廃線になってしまったら。実際、合併を繰り返している大垣市でも、中山間部は移動手段が自家用車しかない地域も出始めているようで、そういう地域でコミュニティバスを走らせられないか、というのが安田さんたちの最初の課題解決策だった。
しかし、岐阜羽島の川合さんと話すうちに、送迎も行なうファミリー・サポート・センター事業こそ移動支援そのものであるという一つの結論を導き出したという。ただし、ファミリー・サポート・センター事業は地域子育て支援事業の一つであり、国土交通省管轄の運輸ではないし、福祉有償運送でもない。交流会での川合さんや遠山さんのお話でも、そのところが指摘されていた。
法人としてのモットー「想いを言葉にすれば、自分が変わる。その言葉を形にすれば、社会が変わる」。交流会を通して移動支援という地域課題を地域に発信した。地域まるごとケア・プロジェクトとしても、新たな視点をいただいた。交流会終了後に、「今後１０年取り組まなくてはならない課題を発掘してしまった」と安田さんは笑ったが、NPO 法人くすくすのみなさんは、すでに次のステップを見据えていらっしゃるに違いない。

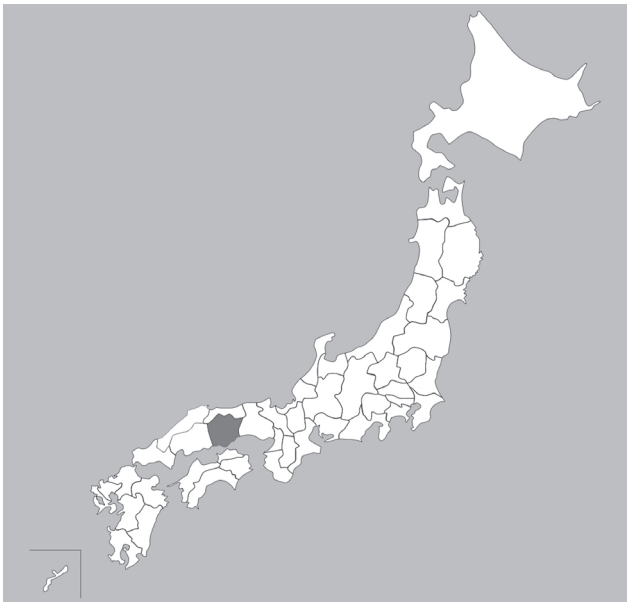
キッズピア外観

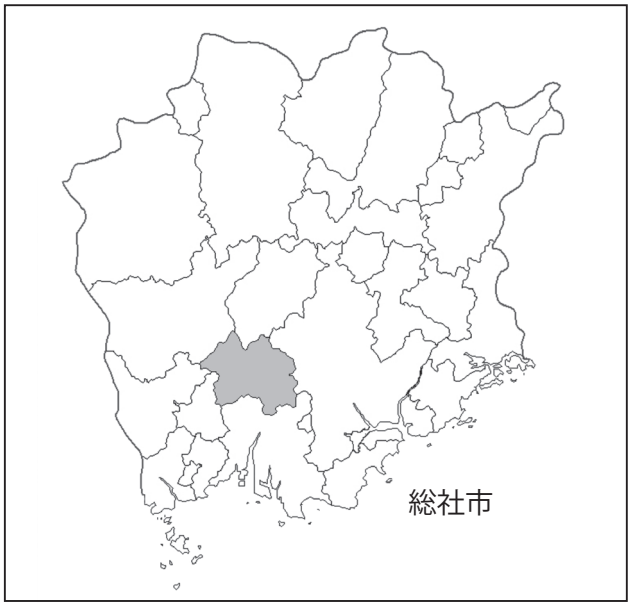
キッズピア一時預かり室

キッズピア玄関

キッズピア交流ひろば

岡山県 総社市





自治体基礎データ

人口（2019 年 4 月末） 69,052 人

面積　211.90㎢

未就学児童数（5 歳以下）と世帯数　3,636 人　27,920 世帯

出生数　2017 年度：535 人　2018 年度：524 人

合計特殊出生率　2015 年度：1.41　2016 年度：1.53

人口流出入数　2017 年：763 人増　2018 年：580 人増

未就学児童の年齢別数と保育状況（2019 年 4 月時点）

5 歳児：1 号認定　301 人　2 号認定　319 人　在宅　　人

4 歳児：1 号認定　305 人　2 号認定　326 人　在宅　　人

3 歳児：1 号認定　254 人　2 号認定　294 人　在宅　　人

2 歳児：3 号認定　327 人　在宅　　人

1 歳児：3 号認定　280 人　在宅　　人

0 歳児：3 号認定　71 人　在宅　　人

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

【子育て世代の就業状況】

・就学前児童・小学生の父親の約 9 割がフルタイム勤務

・就学前児童・小学生の母親の約 4 割がフルタイム勤務

・就学前児童の母親の約 4 割が就労していない

・小学生の母親の約 2 割が就労していない

【世帯構成】

・就学前児童・小学生の約 2 割が三世代世帯（子どもと親と祖父母）

※数値については，平成 30 年度に実施したアンケート調査より記載（就学前児童・小学生世帯を 1,000 世帯ずつ無作為抽出し実施）

保育所待機児童数

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

（2019 年 4 月時点）11 人

子ども・子育て支援関連予算額

2017 年度：44.0 億円　2018 年度：56.4 億円

それぞれの施策を進めるための庁内体制について（庁内組織数、参画部署名） 8 部 33 課室（市長部局）

子ども・子育て支援事業について（地域子育て支援 13 事業及び母子保健の実際）

①利用者支援事業　こども課に母子保健コーディネーター，こども夢づくり課に保育コンシェルジュを設置

②地域子育て支援拠点事業

・つどいの広場‥市内 4 か所　・地域子育て支援センター‥市内 5 か所

③妊婦健診　無料券（14 回分）配布

④乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）

生後 4 か月までの乳児のいる家庭をすべて訪問

⑤養育支援訪問事業等　乳児家庭全戸訪問等により把握した保護者の養育を支援することが特に必要なケースを訪問し，養育に関する相談支援等を行う

⑥子育て短期支援事業　県内の事業所と契約し実施

⑦ファミリー・サポート・センター事業　市内ＮＰＯ法人に委託して実施中　・通常サポート　700 円 /1 時間　・同行サポート　500 円 /1 回

⑧一時預かり事業　市内保育所　5 か所で実施

・2,200 円 / 日　　1 ヶ月に 13 日利用可能

⑨延長保育事業　全保育所，認定こども園（保育部）で実施

・400 円 / 時間　5000 円 / 月　保育短時間認定 7:00 ～ 8:00　16:00 ～ 19:00　保育標準時間認定　18:00 ～ 19:00

⑩病児保育事業　「ほっとチュッピー」を市内小児科医院に開設

・2,000/ 日　1,000 円 / 半日　・昼食代　300 円　おやつ代　100 円

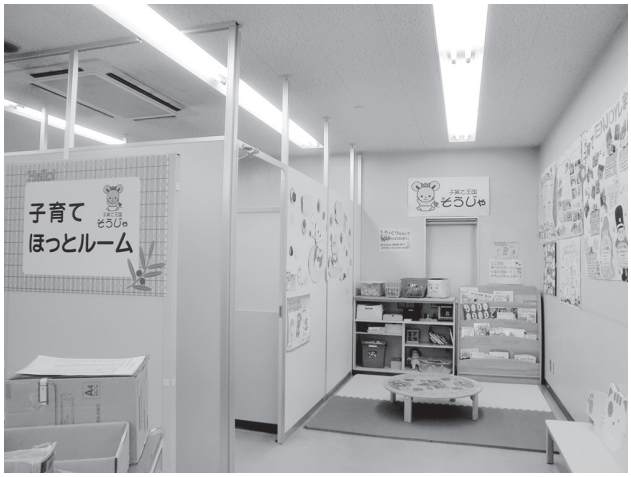
⑪放課後児童クラブ　市内 14 小学校区で実施中

⑫実費徴収に係る補足給付を行う事業　未実施

⑬多様な事業者の参入促進・能力活用事業　未実施

総社市役所

子育て王国看板



子育てほっとルーム（利用者支援）

子育て王国にぺこちゃんが

総社市へのヒアリング

1. 子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容

【総社市子ども・子育て支援事業計画】
事業内容については，現在，第 2 期計画を策定中。
第 1 期については，下記の 6 つの基本目標を掲げ，計画を策定した。
〇就学前の学校教育・保育の提供体制を充実させる
〇地域における子ども・子育て支援を充実させる
〇困難を抱える子ども・家庭を支援する
〇子どもと保護者の健康支援を充実させる
〇ワーク・ライフ・バランスを推進する
〇次代を担う子どもの生きる力を育む

2. 利用者支援事業

【目的】
妊娠期から子育て期にわたるまでの母子保健や育児に関する様々な悩み等に円滑に対応するため，身近で気軽に利用できる場所において相談支援等を実施し，妊娠期から子育て期にわたるまでの切れ目ない支援体制を構築する。
【内容】
〇安定した妊娠出産・育児を迎えるための相談支援
〇妊娠中から支援を必要とする妊婦に対する支援方針検討会議と支援プランの策定
〇出産後間もない時期の産婦に対する育児不安の解消や養育技術の提供等のための相談支援
〇心身の不調や育児不安があることなどから手厚い支援を要する産婦に対する支援方針検討会議と支援プランの策定
〇子育て支援の関係機関と連携した相談支援体制づくり

子育て世代包括支援センターにおける母子保健型で推進しているが、子ども家庭総合支援拠点及びつどいの広場事業ほか、きめ細かな地域子育て支援施策が子ども家庭の生活全体を支えている。（後述）

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

「子育て王国そうじゃ」を掲げた子育て施策の推進，予約型乗合タクシー「雪舟くん」（全ての世帯、全世代対象。分野にこだわらない）の運行，「障がい者千五百人雇用」や，「地食べ」による小規模農家の活性化，少子高齢化が急速化している地区の「英語特区」と定住助成制度の実施による地域再生など，福祉と連結した事業を進め，だれもが安全・安心で快適な生活が送れ，さらに多くの人が移り住んでくる施策を充実・強化していく。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

未定

5. 地域保健福祉に関する協議体について

全市、5 圏域、21 地区の三層構造の協議体の設置
地域包括ケアシステムについては、国に先んじて平成 17 年度より取

り組んできた。
地域包括支援センター、社会福祉協議会、総社市が各ケア会議の事務局と構成員を担い、ケア会議ごとの検討課題や意見を共有できる体制として構築している。
平成 17 年 7 月より、21 小学校区に小地域ケア会議を発足。地区ごとの小地域ケア会議には自治会・町会、民生委員、地域住民などが参加、我がこととして課題を捉えてもらえるように仕込んできた。小地域ケア会議の取り組みをほかの地区とも共有できるよう、ポスター発表の手法で、中学校区ごとに合同小地域ケア会議を開催したところ、民生委員から合同小地域ケア会議の改名を提案され、平成 19 年より合同小地域ケア会議を圏域地域包括ケア会議に改名して、民生委員及び福祉委員も参加の第 2 層協議体とした。小学校区という住民の最も身近なところからシステムを積み上げてきた格好だ。
制度設計は、総社市が事務局を務める「総社市地域包括ケア会議」で協議、小委員会として設置している「地域医療介護連携推進委員会」で事業化まで担当。生活支援サービス検討委員会が、第 1 層協議体として、ニーズとサービスの調整を行い、生活支援サービスの構築とサポーター人材発掘を担う。
地域福祉の推進役は、社会福祉協議会が事務局を務める「圏域地域包括ケア会議」（第 2 層協議体）。
さらに地域の要として、地域包括支援センターが事務局を担う「小地域ケア会議」。その下に地域ケア個別会議を設置、事例ごとのマネジメントを推進している。
一般的な説明としては上記のような表現になるが、前述のように、総社市の場合は上からではなく下からの積み上げと見るのが、正しい。
地域ケア個別会議で個別課題を解決、解決に向けたネットワークを小地域ケア会議で構築、発見された地域課題を圏域地域包括ケア会議で協議、地域づくり資源の開発を行い、地域包括ケア会議で圏域の生活課題を共有することにより、総社市が抱える問題・課題を明らかにし、医療・介護・福祉の連携や政策反映を図る。これらにより、重層的な地域包括ケアをネットワークの構築、社会資源の発掘・開発を推進していく。
これらの取り組みの中で、生活支援コーディネーターは連携の核として積極的に動いている。

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

子育て支援においては，要保護児童対策地域協議会に医療機関・主任児童委員・民生委員の代表者に参画いただいている。また，地域における子どもの見守りの一環として，今年度より地域住民向けに児童虐待に関する研修を行っている。研修には，市内企業の従業員も参加いただいている。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成について

平成 28 年より配置。

回答者
保健福祉部こども課子育て支援係長　日笠哲宏さん
子育て支援係　渡邊一樹さん
福祉課課長補佐兼障がい福祉係長　中山知輝さん
障がい福祉係主事　片岡大士さん
長寿介護課地域ケア推進係主査　野瀬明子さん

【子育て王国そうじゃ　子育て王国事業】
総社市は " 全国屈指の福祉先駆都市 " を目指して保健福祉政策全体を充実させてきている。中でも、子育て支援施策については「子育て王国そうじゃ」を名乗ることで、市役所全体で、そうあるべきとの矜持を持って施策に取り組めるようプレッシャーを自ら与える効果を生んでいる。
政策の優先順位を決める際には、子どもを最優先にしている。

・総社市の子育て支援の方向性
" 子ども本位 " の視点で、地域・行政・学校が家庭をバックアップ、親も一緒に成長していく子育て支援。
・こども「そうじゃ教育大綱」
・家庭「親も共に成長していく」
家庭看護力の養成講座、中学校・高校での「赤ちゃん登校日」
・地域「地域力の結集による、子ども・家庭の見守り」
『総社市子どもを虐待から守る条例』の制定、『子ども虐待 SOS サポーター』の養成
・行政・学校「全国屈指の福祉文化先駆都市」を目指した福祉王国プログラムの枠組み
発達障がい児に対する「そうじゃ式早期一貫サポートシステム」による支援
福祉・介護・教育分野とも連携した「ひきこもり支援」
多様な性を認め合う社会の推進（LGBT への対応）
これらを通して、0 歳から 20 歳まで切れ目のない保健・福祉・教育の支援体制を構築している。
平成 28 年 8 月 22 日から。市役所西庁舎 1 階に保健福祉部こども課と教育委員会を配置、キッズスペースを設けるなどして、こどもに関する手続き、相談支援が切れ目なくワンストップでできるようにしている。総社市では、このフロアを「子育て王国」と名付けている。
・子育て世代包括支援センター（子育てほっとルーム）
平成 28 年 8 月に子育て王国内にオープン。面接や手続きがしやすいように、遊びやおむつ替えのスペースを設けた。計測ができるので、気軽に立ち寄れ、相談できる場となっている。
・「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会
「子育て王国」を目指して、平成 20 年 3 月に「子育て王国」応援団を結成。市民・企業・市・大学が協働して、総社市の社会性を活かしながら、まち全体で子どもを見守り、育てていこうとする機運を醸成することを目的に、それに賛同する個人を持って構成。平成 30 年 3 月までの 10 年間、「子育て王国そうじゃ」まちづくり委員会の実行部隊として活動した。事務局を NPO 法人保育サポートあい・あいが担当。
現在、「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会は、小児科医、県立大学職員、保育協議会、社会福祉協議会、愛育委員、栄養委員、主任児童委員、親子クラブ、農業後継者クラブ、子育て支援の NPO 法人、民間企業、人権擁護委員、司法関係者などで構成。チュッピー（総社市のマスコットキャラクター）子どもまつり、農業体験＆食育プログラム、家庭看護力養成講座、小児科医による「子育て出前講座」などを開催している。
・つどいの広場との連携事業
市内 4 カ所に親子の交流スペースとして設置。運営を NPO 法人きよね夢てらす　子育て応援こっこと NPO 法人ほっとはあとが受託している。
地域と連携して多職種で親子の見守り支援ができる場は重要であるとの認識のもと、こども課との連携事業を行なっている。

・にこにこ訪問　初めは広場には行きにくいという声のもと、つどいの広場スタッフが訪問し、孤立化防止に向けた働きかけを行う。
・カンガルー広場　病院や市は相談しづらいという声のもと、気軽に立ち寄れる広場に専門職が出向いて相談できる場の提供。
・スマイル訪問　上記2事業に新たな事業をプラス、統合する形で令和元年7月からスタートした新規事業。こども課とNPO法人との連携により、育児困難を抱える親からの要請により訪問を行う「にこにこ訪問ぷらす」、月3会場でのカンガルー広場の開催、3会場での育児相談（つどいラッコ）の実施、他課とのコラボレーションによる大人の検診・予防接種・幼保説明会の開催。
連携体制として、毎月1回ひろばスタッフ会議を開催、要フォロー児の支援方法の確認や情報共有・意見交換を行い、年に3回（前期・中期・後期）、ひろば代表者との連絡会を開催している。
・子ども虐待SOSサポーター養成講座
「総社市子どもを虐待から守る条例」に基づき、地域と連携した子ども虐待ゼロのまちを目指して、一般市民向けに「虐待」の知識を持ったサポーター養成講座を開催。地域での子どもの見守り強化を目指している。一般市民向けのこうした講座の開催は、全国でも珍しい。

【障がい者千五百人雇用】
平成20年のリーマン・ショックをきっかけに、障がい者の就労を支援しようと、岡山県立支援学校の新設誘致に動いたが、平成22年、設置はお隣の倉敷市に決定。では、卒業生の就労は総社市がお世話をしようと体制整備に動く。
平成23年5月、ハローワーク、企業関係者などで組織する「障がい者千人雇用委員会」を設置、まずは5年計画で開始。同じ年の7月には、ハローワーク総社と「福祉から就労」支援協定を締結したことを受け、「就労支援ルーム」を設置し、市から職員2名がハローワークに常駐。同年10月には総社商工会議所と包括協定を締結し、会員企業に対し、助成制度の周知やセミナー、雇用意向調査、福祉的事業所の見学などを開始。同年12月には「障がい者千人雇用推進条例」を制定、障がい者千人雇用の実現のための基本的事項や、市・企業・市民の役割を明文化。
平成24年4月、マッチングと生活支援の拠点として「障がい者千人雇用センター」を設置、障害者就業・生活支援センターおよびハローワークから職員派遣。
平成25年4月には、障がい者千人雇用をライフステージ支援として位置付け。千人雇用を中心に、就学前・就学時の支援、安心した老後のための居住支援を視野に入れて政策を検討することに。
平成26年6月、福祉的就労から一般就労へ移行し、6カ月以上経過した方に10万円を支給する独自政策「就労移行支援金制度」を創設。
平成29年5月、「障がい者千人雇用」事業による就労者1000人達成。同年9月、「障がい者千五百人雇用」事業として再スタート。
総社市には障害者手帳所持者が3000人おり、そのうち18歳から64歳の人は1200人。この方々を就労につなごうと、「障がい者千人雇用」事業とした。現在は1,060人程度を推移している。
特別支援学校への支援としては、2年生の頃から実習を始め、卒業時に本人と保護者、受け入れ団体、相談担当者が一堂に会して顔合わせを行う。担当者一人につき100ケース以上を受け持っている。
スタート当初は就労の内訳の半分以上が福祉的就労者だったが、一般就労者の割合は増えて6、7割が一般就労者となってきた。
障がい者千五百人雇用事業の体制は、障害者が就労を通して、生きがいを感じながら安心して暮らすことのできる地域社会の実現に寄与することを目的に、総社市5名、ハローワーク総社6名、障がい者千五百人雇用センター4名が当たっている。
ハローワーク総社の2階に設置した「就労支援ルーム」では、「福祉から就労」に向けてワンストップで付き添い型の綿密な支援を実施。平成23年7月から平成31年3月までに市外の方も含む813人の障がい者が就職した。
障がい者千五百人雇用センターの職員は、登録者に対してマッチングから生活までマンツーマンでサポートを行うとともに、企業など就労先へのアフターケアも担当する。
他の分野の政策とも連携しており、例えば乗合タクシー「雪舟くん」を利用する際に障害者手帳所持者は100円割引で、片道200円で通勤できる。
障がい者の市県民税納税者数及び給与収入額がアップしてきた一方、短時間労働が増加して平均給与収入が低下していることが課題になっており、工賃アップに向けて、市がさまざまなアイデアを提供している。

【福祉王国プログラム】
総社市では、全国屈指の福祉先駆都市を実現するため、各課題に対し、分野をまたがる総合的な支援のための体制を構築することを目指している。

次々と福祉課題に立ち向かう総社市ゆえに行政主導と思いがちだが、実はそうではない。
NPO法人きよね夢てらす　子育て応援こっこでヒアリングをしていた時に、「市では、何か地域課題があると必ず住民に「こういう課題があるんですが」と投げてくる。住民たちで協議して、自分たちでアクションを起こすことを決めるのを待っている」と福光さんがおっしゃった。きよね夢てらす自体、公立幼稚園の移転が決まり、跡地をどうするか、市は「住民のみなさんで決めてください」と、住民による協議と決定を求めた。結果、自分たちの拠点を作ることを決め、建物は市が建てたが、仕様は住民の協議の元に決められ、運営も住民たちで設立したNPO法人きよね夢てらすが行なっている。
この総社市行政の姿勢を裏付けたのは、長寿介護課の野瀬さんが協議体について説明を始めたときだ。小地域ケア会議を始める時のこと。「やってみない？と地域住民に声をかけます。決定は住民。自分たちが暮らす街だから、住民同士で地域の課題を検討する場は本当に必要なの？ということから、住民で話し合ってもらう。地域課題は自分たちの課題、我がこととして共有し、意見交換して、決定してもらう。そこで助言するくらい（が行政の役割）。このスタンスが一番効果がある」
先ほどの福光さんと同じことをおっしゃっている！　行政としての姿勢が、住民主体なんだ。
「行政が何でもできると思ったら、それは無理」野瀬さんはさらに続ける。「行政だけで進めるには限界がある」とこども課の渡邊さんも頷く。「自分たちが、（この地域が）住みよくなる一助になっている（と実感できる）。自分たちで考え行動する市民と、私たちは一緒に悩むんです」（野瀬さん）
裏返せば、市民の力を信じているということか。
もう一つ特筆しておきたいのは、総社市役所内のフラットな雰囲気だ。職員同士に垣根が感じられない。もともと同じ部署だったにしても、部署が変われば何となくセクト意識のようなものが感じられるもの。全くなし。いかにしてそのような雰囲気になったのか、非常に気になる。

福祉王国プログラム2019の各部会

住民一人ひとりに寄り添った支援を実現するため、各部会で次のとおり目標を設定する。

・個人や世帯の抱える複合的課題などへの包括的な支援
・分野をまたがる総合的サービス提供の支援

→ **横断的調整**

新規

子ども虐待ゼロ部会
【事 務 局】こども課 【関連会議】要保護児童対策地域協議会
「地域と連携した子ども虐待ゼロの体制整備」を目指す。

発達障がい児支援部会
【事 務 局】学校教育課 【関連会議】校長会 幼稚園・こども園長会
発達障がい児の切れ目ない支援に向けて
「中学卒業後のアクセス100%」を達成する。

高齢者支援部会
【事 務 局】長寿介護課
【関連会議】
地域包括ケア会議

制度の狭間にある高齢者の「そうじゃ台帳」を作成し,
「見守り100% 孤独ゼロ」
を達成する。

医療体制整備部会
【事 務 局】健康医療課 【関連会議】医療費適正化推進委員会
歩くことで健康づくりを推進し,
「医療費抑制1億円」を目指す。

障がい者支援部会
【事 務 局】福祉課 【関連会議】地域自立支援協議会
障がい者大綱を制定し,
「障がい者1,500人雇用」を推進する。

待機児童ゼロ部会
【事 務 局】こども夢づくり課
【関連会議】子ども・子育て会議
「年間を通じての待機児童ゼロ」
の達成を目指す。

ひきこもり支援部会
【事 務 局】福祉課
【関連会議】ひきこもり支援等検討委員会
「ひきこもりからの社会参加100人」
の達成を目指す。

保健・福祉・教育の切れ目のない支援

0歳　20歳

そうじゃ式早期一貫サポートシステム

段階	早期発見	4歳	早期発達支援	特別支援教育			就労支援
学校	保育所・幼稚園・こども園			小学校	中学校	高校	大学・専門学校・職場
				特別支援学校			

支援

- **乳幼児健診**：4か月児健診／1歳6か月児健診／3歳児健診
- **相談支援事業所**（相談センターらぽーる，相談支援事業所「あみーたⅡ」，社協相談支援センター）
- **療育**（児童発達支援）／**療育**（放課後等デイサービス）
- **4歳児発達支援事業**（4歳児巡回・5歳児フォロー巡回・小学校巡回）
- **総合検診**
- **ことばの教室**（H30～きらりキッズ）
- **発育発達相談**／**特別支援学級**
- **総社市特別支援教育推進センターきらり**（情緒障がい通級指導教室）
- **中・高の連携強化**
  - ・生徒指導連絡会
  - ・中高校長会
  - ・出前授業
- **連絡協議会**（中学・市教委・障がい者基幹相談支援センター）
- ・障がい者千五百人雇用センター
- ・「就労支援ルーム」（ハローワーク総社）

行政

こども課	こども課・こども夢づくり課・学校教育課・福祉課	小・中：学校教育課・こども課・こども夢づくり課・福祉課 高校：こども課・福祉課	福祉課・健康医療課

児童福祉法，障害者総合支援法に基づくサービス

その他の機関

- **はばたき園**
  - **児童発達支援センター**
  - **相談支援事業**（相談は18歳まで）：相談センターらぽーる
  - **療育相談**：総社PEC（プレ療育）
  - **児童発達支援**：総社はばたき園，かしゅかしゅ
- **社協**：**障がい者基幹相談支援センター**
  - ・発達障がい支援コーディネーター配置　・地域自立支援協議会の運営
  - **ひきこもり支援**
- **県**：**おかやま発達障害者支援センター**

みどり　…教育支援

きいろ　…保健福祉系支援

総社市発達障がい支援部会

特定非営利活動法人きよね夢てらす　子育て応援こっこ

団体基礎データ
所在地：岡山県総社市清音軽部 666 番地
従業員数：16 名
事業会計報告：　2018 年度
収入　委託料　総社市つどいの広場事業（清音会場）3,723,000
総社市つどいの広場事業（岡山県立大学会場）1,398,000
総社市つどいの広場事業（リブ総社店会場）8,317,000
地域支援 1,360,000
合計 14,798,000
支出　委託料　総社市つどいの広場事業（清音会場）3,723,000
総社市つどいの広場事業（岡山県立大学会場）1,398,000
総社市つどいの広場事業（リブ総社店会場）8,317,000
地域支援 1,360,000
合計 14,798,000
事業別利用者数と内訳：総社市つどいの広場事業　清音会場　なかよし広場こっこ
開設時間　9:30 ～ 16:00　　開設日　月・火・木・金・第 4 水曜日午前・第 1 日曜日午前
開設場所　きよね夢てらす　年間開設日数 210 日　月平均 17 日
年間利用組数（実）334 組　年間利用人数（のべ）5002 人（子ども）
登録者数（実）457 人　年間利用組数（のべ）　午前 2210 組　午後 1858 組
スタッフの人数合計 16 人（保育士 11 人、助産師 1 人、栄養士 2 人、看護師 1 人、子育て支援員 1 人）
・子育てなどに関する相談、援助の実施
・地域の子育て関連情報の提供
・子育て及び子育て支援に関する講習などの実施
同級生タイム、赤ちゃんタイム、プレママタイム、パパデー、その他（つどいらっこなど）
・地域の子育て力を高める取り組み
愛育委員さんとの連携、地域の方との連携、外遊び事業、きよねスポーツくらぶとの協働事業
・利用者のエンパワメント（ママスタッフの活用、利用者同士での託児、ママ先生講座など）
・子育て支援団体などとの連携・協働事業
・その他
スタッフ会議、研修会参加、備中県民局備中子育てカレッジ学生ネットワーク事業、避難訓練
総社市つどいの広場事業　天満屋ハッピータウンリブ総社店会場　なかよし広場ぴよこっこ
開設時間　10:00 ～ 16:30　開設日　月～土
開設場所　天満屋ハッピータウンリブ総社店　年間開設日数　276 日　月平均　23 日
年間利用組数（実）874 組　年間利用人数（のべ）10267 人（子ども）
参加者数（実）242 人（子ども）　年間利用組数（のべ）午前 505 組　午後 364 組
スタッフの人数合計 16 人（保育士 11 人、助産師 1 人、栄養士 2 人、看護師 1 人、子育て支援者 1 人）
・子育てなどに関する相談、援助の実施
・地域の子育て関連情報の提供
・子育て及び子育て支援に関する講習などの実施
プレママ＆パパタイム、双子ちゃんタイム、その他（つどいらっこ、インターナショナル広場など）
・地域の子育て力を高める取り組み
リブ総社店及び店内各店舗との連携、チラシ配布・設置、中学校高校への赤ちゃん登校日
・利用者のエンパワメント（ママスタッフの活用、利用者同士での託児、こっこ応援隊など）
・子育て支援団体などとの連携・協働事業
・その他
スタッフ会議、研修会参加、備中県民局備中子育てカレッジ学生ネットワーク事業、避難訓練
総社市つどいの広場事業　岡山県立大学会場　チュッピーひろば
開設時間　10:00 ～ 15:00
開設日　原則として第 1・第 2 火曜日　第 3・第 4 水曜日　（8 月・9 月・3 月は 2 日／週開催）
開設場所　岡山県立大学　年間開設日数 276 日　月平均 23 日
年間利用組数（実）172 組　年間利用人数（のべ）1075 人（子ども）
登録者数（実）1237 人（子ども）年間利用組数（のべ）午前 3517 組　午後 4873 組
スタッフの人数合計 16 人（保育士 11 人、助産師 1 人、栄養士 2 人、看護師 1 人、子育て支援員 1 人）
ひろばへの学生参加 98 人（のべ／年）
・地域の子育て関連情報の提供
・子育て及び子育て支援に関する講習などの実施
Nobody's Perfect の開催など
・その他
大学・学生との連携イベント・調査研究などへの協力・連携、豪雨災害対応など
実施事業サービスと法令との関係：　子ども・子育て支援法
設置及び運営財源：　総社市からの委託費（指定管理）
ＨＰ：http://www.piyokokko.com

1. 主たる事業

NPO 法人きよね夢てらすの 10 の事業のうち「子育て応援こっこ」事業として総社市つどいの広場事業を受託。
★子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
清音会場「なかよし広場こっこ」、天満屋ハッピータウンリブ総社店会場「なかよし広場ぴよこっこ」、岡山県立大学会場「チュッピーひろば」の市内３会場でつどいの広場事業を実施。
★子育てなどに関する相談、援助の実施
３会場で、助産師相談、栄養士相談、歯科衛生士相談などを行う。
★地域の子育て関連情報の提供
３会場で、市における母子保健事業、地域子育て支援センターや子育てサロンについての情報提供。毎月のチラシによる情報提供、ＨＰへの掲載、facebook、Line、instagram での情報発信。
★子育て及び子育て支援に関する講習などの実施
３会場それぞれでプレママタイム、プレママ＆パパタイム（両親学級）、赤ちゃん広場、父親・母親向け講座など、会場立地に合わせたプログラムの開催。総社市こども課及び人権まちづくり課との連携による事業を開催。にこにこ訪問、カンガルー広場、スマイル訪問、つどいらっ

こ、インターナショナル広場（外国にルーツを持つママの集まり）、保健師さんに気になる子について相談など。
★地域の子育て力を高める取り組み
3会場ごとに立地に合わせた取り組み。
清音会場では愛育委員さんや地域の方との連携に基づくプログラムや交流、夢てらすとの協働事業による外遊び事業なども行っている。リブ総社店会場ではリブ総社店及び店内店舗との連携で専門店別のプチ講座の開催、中学校高校への赤ちゃん登校日の開催など。岡山県立大学会場では Nobody's Perfect の開催、親子で楽しみ音楽会などの開催も行なっている。
★利用者のエンパワメント
ママスタッフの活用、利用者同士での託児、ママ先生による講座の開催などで、利用者が支援を受けるだけでなく、参加することで仲間と出会い、孤独な育児から抜け出し、自ら自信を持って力を発揮できる環境づくりを行う。
★その他
月1回のスタッフ会議の開催、おかやま地域子育て支援拠点ネットワークへの参加、研修会への参加、プレーパークの開催、学生との協働イベントの開催など。

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

現在、子育て応援こっこは、NPO 法人きよね夢てらすの構成団体として1事業を受け持つ位置付けになっているが、平成 14 年に、合併前の清音村直営ひろばとして清音福祉センターで活動をスタートした。児童虐待防止にもなるというつどいの広場事業を採択、「なかよし広場こっこ」の運営を開始した。総社市として合併後、市からの委託を受けるため任意団体へ移行した。当時のスタッフは 10 名ほど。
一方、平成 14 年に公立幼稚園が道路拡張のため移転することとなり、その跡地利用について、清音村長が清音小学校 PTA に活用方法の検討を投げかけた。歴代 PTA 役員を中心に、子育てに関わる保護者から高齢者まで 15 団体 32 人で「幼稚園跡地を考える会」を発足、平成 13 年 8 月から月2回のペースで話し合いを重ね、「清音の宝となる子ども達の活動を支援すること」を目的とする建物とすることを決定。どのような建物を建てたいかについて話し合いが持たれ、自分たちで模型を作り、部屋の名前も子ども達でもわかりやすく、優しさが伝わる名前をつけた。「きよね夢てらす」という名前も公募によって、地域のみんなで決めた。
平成 15 年 5 月、「きよね夢てらす」が完成。同年 11 月には NPO 法人きよね夢てらす設立総会が開催され、翌年 3 月に認証を受けて、NPO 法人きよね夢てらすが本格スタートした。
平成 17 年 3 月、清音村は山手村、総社市と対等合併。平成 18 年度から指定管理を受託。開設当初からなかよし広場でつどいの広場事業を行っていた子育て応援こっこは、きよね夢てらす以外に岡山県立大学とリブ総社店でもつどいの広場を総社市から委託され、平成 22 年、NPO 法人きよね夢てらすの構成団体となった。

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかね

保健師さん　福光さんにつどいの広場運営に参加するよう声をかけた。
利用者さんで有資格者だった人がひろばスタッフに。これまでに 15 人。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

行政の人がよくしてくれている。16 名のスタッフのうち、なかよし広場ぴよこっこの1名が常勤。なかよし広場こっこも・チュッピーひろばでも常勤スタッフを配置したいが予算・人員面で難しい。
一時預かりの実施を検討しているが、他団体との関係とかもありなかなか実施できない。

5. 地域における連携体制とその実情

「きよね夢てらす」の立ち上がりそのものが、地域の人々の協議によって始まっており、NPO 法人の運営についても利用団体、PTA、校長、町会・自治会から出している理事によって夢てらす協議会が構成されている。地域づくり協議会と夢てらす協議会のメンバーは両方に関われる人が中心で、ほぼ同じ。地域との連携体制は整っている。

6. 行政からの業務委託の有無

イ）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
NPO 法人きよね夢てらすとしては、建物の運営とふるさとふれあい広場について指定管理を受けている他、こっこの総社市つどいの広場事業・草刈り・ウインターフェスティバル・北山公民館の運営を総社市から委託されている。

回答者
特定非営利活動法人きよね夢てらす理事　子育て応援こっこ代表
福光節子さん

2018 年 7 月の西日本豪雨のとき、総社市内の工場が爆発及び火災事故を起こした。その爆風により、きよね夢てらすの玄関扉も被害を受けた。建物そのものは無事で、川の対岸、倉敷市真備町から避難して来た子育て親子を多く受け入れたという。災害時に、つい大人の被害にばかり目が向きがちななかで、幼子親子をサポート出来たのは、そこに子育て応援こっこの活動があったからと言える。
西日本豪雨の直前まで、総社市で地域まるごとケア・プロジェクトの地域人材交流研修会開催に向けて、行政の担当者と連絡を取り合っていた。豪雨により中止とさせていただき、今回のヒアリングとなった。福光さんのご案内で、洪水に見舞われた真備町にも足を運び、営業を再開していた食堂で食事をした。建て替えられた建物がある一方で、廃墟となったままの建物もあった。道路の復旧状態に、短期間でよくぞここまでと感心した。
きよね夢てらすは小学校の校庭に隣接、塀がないので、なかよし広場こっこの窓からは、小学生の姿を見ることができる。広い校庭に設置されたローラー滑り台に、広場利用のお子さんがチャレンジすることもあるという。地域住民が自分たちで利用の仕方を決めて運営する施設に子育てひろばがあり、地域の人たちが自由に出入りするながで親子が過ごせるというのは、地域に見守られての暮らしを実感できる環境と言える。お邪魔した日には父親の姿もあった。
「市では、何か地域課題があると必ず住民に「こういう課題があるんですが」と投げてくる。住民たちで協議して、自分たちでアクションを起こすことを決めるのを待っている」きよね夢てらすの成り立ちをお聞きする際に、真っ先に福光さんは、そうおっしゃった。それは清音村時代から、行政主導ではなく住民主体で地域のことをやって来た

ということ。総社市役所でのヒアリングでも「行政だけではやりきれない」と聞き、図らずも裏が取れてしまったと、驚いた。
NPO 法人きよね夢てらすの構成団体は、「きよね夢てらす」、「子育て応援こっこ」、総合型地域スポーツクラブ「きよねスポーツくらぶ」で、住民主体となるまちづくりを展開するため設立された「清音地域づくり協議会」の事務局も担っている。「子育て応援こっこ」、総合型地域スポーツクラブ「きよねスポーツくらぶ」は、それぞれ事業を担っており、「きよね夢てらす」は、「幼稚園跡地を考える会」を中心としたボランティア組織であり、マネジメント会員、アクティブ会員、サポーター会員、賛助会員からなり、施設管理、事業の企画・運営を担っている。また、若手メンバーによって設立された「W-Accord」は、地域の活性化や子どもの育成に向けた事業を企画・運営、世代間の連携、地域団体との連携のもと、まちづくりに貢献している。このほか「おたまじゃくしの会」、「清音小学校 PTA」「きよね地域子ども教室」とも支援・連携を図るなど、清音地区で暮らす人々の活動拠点として、地域社会の連携と生涯学習の推進という、NPO 法人きよね夢てらすの目的を着実に達成に導いている。
岡山県立大学のキャンパス内のチュッピーひろば、きよね夢てらすのなかよし広場こっこ、天満屋ハッピータウンリブ総社店のなかよし広場ぴよこっこと、いずれも立地条件も利用者層もかなり違う。それぞれの立地条件などに合わせての子育てひろばの運営により、そこで暮らす親子が抱える課題や困りごと、それに対するサポート環境の整備は、とてもきめ細かい。行政が全国屈指の福祉先駆都市の実現を目指し取り組む中で、市民活動団体との連携はもちろん念頭にあるだろう。子育て応援こっこの他団体との連携・協働事業の概要からも伺える。その一つ一つをきちんと積み上げての今、そしてこれから。子育て応援こっこの他団体との連携・協働事業の概要を以下、記しておく。

【子育て支援団体などとの連携・協働事業】
岡山子育てネットワークへの参加
岡山県立大学などの先生との連携
おかやま地域子育て支援拠点ネットワークへの参加
CAP 岡山との協働事業
岡山県立大学実習生受け入れ
岡山医療センター付属看護学校助産科県立大学実習生受け入れ
県大そうじゃ子育てカレッジ実行委員会への参加
小児科医による研修会
子ども・子育て会議への参加
県立大学生への大学卒論協力
子育てひろば全国連絡協議会基礎研修・応用研修でのファシリテーター参加
岡山県助産師会との協働事業
こども防災ネットワークおかやまとの協働事業
総社市自殺対策連絡協議会への参加
「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会への参加
その他として　備中県民局の備中子育てカレッジ学生ネットワーク推進事業

きよね夢てらす外観

なかよし広場こっこ

なかよし広場こっこ

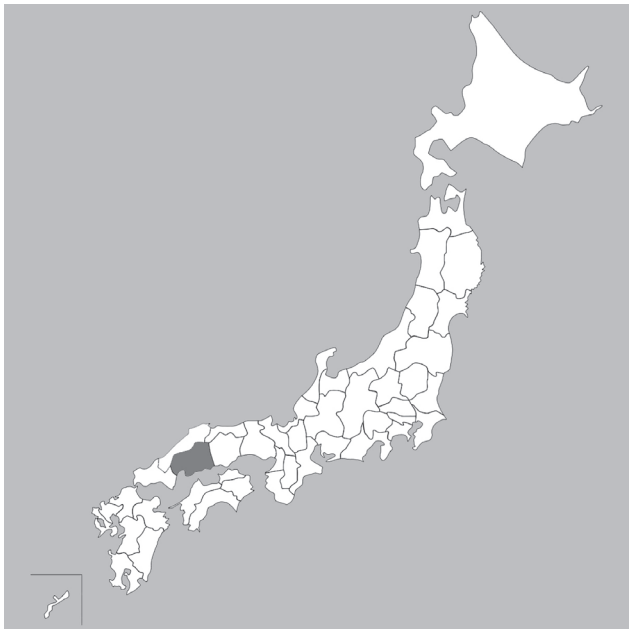
チュッピー広場（岡山県立大学内）

繁華街の大規模商業施設内にあるつどいの広場・なかよし広場ぴよこっこ

なかよし広場こっこから小学校の校庭が望める

なかよし広場こっこ利用の幼児も挑戦することがあるローラー滑り台（清音小学校）

広島県 福山市



自治体基礎データ

人口（2019 年 4 月末）　469,168 人

面積　518㎢

未就学児童数（5 歳以下）と世帯数　23,981 人　　世帯

出生数　2017 年度：4,010 人　2018 年度：3,776 人

合計特殊出生率　2017 年度：1.67　2018 年度：未確定

人口流出入数　2017 年：564 人減　2018 年：786 人減

未就学児童の年齢別数と保育状況（2019 年 4 月時点）

5 歳児：1 号認定　　724 人　2 号認定　2,657 人　在宅　不明

4 歳児：1 号認定　　637 人　2 号認定　2,539 人　在宅　不明

3 歳児：1 号認定　　505 人　2 号認定　2,614 人　在宅　不明

2 歳児：3 号認定　2,271 人　在宅　不明

1 歳児：3 号認定　1,815 人　在宅　不明

0 歳児：3 号認定　　373 人　在宅　不明

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

保育所待機児童数

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】（2019 年 4 月時点）

10 人

子ども・子育て支援関連予算額

2017 年度：266 億円（児童福祉費　当初予算書）

2018 年度：299 億円（児童福祉費　当初予算書）

それぞれの施策を進めるための庁内体制について（庁内組織数，参画部署名）　8 部 33 課室（市長部局）

地域子ども・子育て支援事業について（地域子育て支援 13 事業及び母子保健の実際）

①利用者支援事業（子育て世代包括支援センター）

②地域子育て支援拠点事業

③妊婦健康診査

④乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん訪問事業）

⑤養育支援訪問事業等（育児支援家庭訪問事業）

⑥子育て短期支援事業（ショートステイ）

⑦ファミリー・サポート・センター事業（子育て援助活動支援事業）

⑧一時預かり事業

⑨延長保育事業（時間外保育事業）

⑩病児保育事業

⑪放課後児童クラブ（放課後児童健全育成事業）

⑫実費徴収に係る補足給付を行う事業※ 2019 年 10 月から実施

⑬多様な事業者の参入促進・能力活用事業

福山市役所

福山市へのヒアリング

1. 子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容

【福山市ネウボラ事業計画】
現在策定中の第 2 期子ども・子育て支援事業計画から上記に名称を変更。2017 年度から，担当部署名を子育て支援課からネウボラ推進課に変更し，子ども・子育て家庭に対する支援施策全般を総合的に展開する「福山ネウボラ」を創設するとともに,ネウボラ相談窓口「あのね」（子育て世代包括支援センター）を市内 12 か所に開設し，様々な施策を展開する中で，妊娠・出産・子育てに関し，切れ目のない支援に取り組んでいる。
児童虐待の発生予防に向けた啓発を推進するとともに，子ども及びその家庭に対し，専門性を発揮した支援を行う「子ども家庭総合支援拠点」を 2021 年度に設置予定である。各関係機関と連携を図りながら必要なサービスや地域資源につなぐソーシャルワークを総合的に行うことで，市が担うべき在宅支援の強化に取り組む。
子どもの貧困対策に向けては，2017 年度に子どもの生活に関する実態調査を実施し，2018 年度に「福山市子どもの健やかな成長を支援する施策の基本的な考え方」を取りまとめた。これを踏まえ「子どもの貧困対策計画」を福山市ネウボラ事業計画と一体的に策定中。

【福山ネウボラ相談窓口（あのね）】
2017 年 6 月に妊娠期からの切れ目のない相談支援の場の提供をめざし，妊娠・出産・子育てに関する相談窓口「愛称：あのね」（子育て世代包括支援センター）を市内 12 か所に設置。地域子育て支援拠点事業所でもある，商業施設内に設置しているふくやま子育て応援センター，公立の保育所・こども園（6か所），支所（4か所），すこやかセンター（保健所）に設置。
保育士と保健師・助産師・看護師のいずれかの資格を持つ看護職のネウボラ相談員が，母子健康手帳の交付や，妊娠や出産，からだやこころのこと，子育て，しつけ，教育・保育施設などの相談，子どもの成長に合わせた母子保健や子育て支援事業（妊娠・出産・子育てに関する事業）について紹介している。妊娠後期は特に出産に向けての不安が高まりやすくなるため，妊娠 32 週以降に「あのね」で面談をし，安心して出産・子育てが出来るよう支援している。面談をした妊婦には，来所プレゼントを配付し，生まれてくる子どもへのお祝いの気持ちを込めて，絵本や子育てグッズもプレゼントしている。

2. 利用者支援事業

子育て世代包括支援センターである「あのね」は，利用者支援事業の基本型および母子保健型の併設型。妊娠期から子育て期までの総合相談窓口として，ネウボラ相談員（保育士および看護職）を配置し，様々な相談に対応している。また，利用者支援事業基本型の役割として，保育士のネウボラ相談員を中心に地域に出向き，地域の子育て資源の把握や出張相談などにより，子どもや家族の状況から必要な支援に結びつけている。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

大正 5 年に福山町を廃して福山市が誕生，昭和８年に，さらに 10 カ村の合併など，近隣の市町との合併を繰り返してきた。東部，北部，神辺，松永の支所を拠点支所として位置付けている。
2017 年度にスタートした地域福祉計画の基本理念は「一人ひとりの人権が尊重され，住み慣れた地域で心豊かに夢を持ち続けて暮らし続けられるまち　ふくやま」。基本方策は「つながりあいの促進」,「支え合いの促進」,「地域福祉を支えるしくみづくり」の 3 つ。
町内会・自治会ベースではまちづくり推進委員会を小学校区ごとに設置。それぞれ地域まちづくり計画を策定，実施するまちづくり推進事業には行政からの財政支援もある。小学校区は 80 か所，中学校区は 36 か所。
福山市社会福祉協議会では，各学区において，小地域で福祉活動を進めるチームを組み，訪問を希望する要援護世帯を定期的に訪問し，声かけや安否確認を行うなどの小地域福祉ネットワーク活動事業を進めている。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

市域担当の保健師は，従来から母子，高齢者，精神障がい者などを包含した保健活動を行っており，必要に応じて，介護や高齢者施策と母子保健・子育て支援施策で連携し，情報共有や役割分担をしながら，家庭全体への支援を行っている。
高齢者保健福祉計画の中では，世代間交流も推進している。保育施設地域活動事業や地域からの依頼により，保育施設の児童が地域の居場所等に出向いて高齢者と交流をしている。また，高齢者の方が小学校に出向いて行事に参加するなど，小学校児童と高齢者の交流も行われている。
高齢者施設に保育所を併設したり，地域の児童と交流が出来る部屋を設置することで，世代間交流を促す動きもある。
地域での子ども食堂も，高齢者など多世代が関わり，地域食堂となっているところがある。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

第 1 層は市全域，第 2 層は 11 の日常生活圏域で協議体を設置。

協議体は，地域資源やニーズの掘り起こし，担い手の発掘などを目的に開催し，地域内のネットワーク化や地域のことを考える場おこしを推進している。地域性が様々ある中で，継続的に地域に入るなどしてきた。
これらの取り組みの中で，生活支援コーディネーターは連携の核として積極的に動いている。

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

地域の動きとしては，個人と団体とで運営する子ども食堂ネットワークが立ち上がっており，食品衛生講習会や交流会を年 1 回開催している。子ども食堂の開催は月 1 回か 2 回のところが多い。

7.　生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

福山市における生活支援コーディネーターについては，福山市社会福祉協議会へ委託し，第 1 層（第 2 層兼務）に 1 名，第 2 層に 2 名の計 3 名を配置している。
人材養成については，コーディネーターとしてのスキルアップを図る

ため，県地域包括ケア推進センターが開催する養成研修などに参加していく。

回答者
保健福祉局福祉部生活困窮者自立支援センター
次長　高松寿弥さん
長寿社会応援部高齢者支援課
次長　檀上尊信さん
主事　中村美佐紀さん
児童部ネウボラ推進課
保健師　佐藤美鈴さん

福山版ネウボラの拠点「あのね」は駅前の商業施設内

福山版ネウボラのツール類

地域包括及び子育て世代包括ケア　先進自治体調査

特定非営利活動法人こどもステーション

団体基礎データ
所在地：広島県福山市神辺町道上 2862-1
従業員数：7 名（スタッフ 17 名）
事業会計報告：2018 年度　収入　会費収入 140,000
寄付収入　1,057,312　事業収入　6,809,247
その他　14　前期繰越金　131,589
合計 8,138,162
支出　事業費　6,044,491　管理費　1,869,047
合計 7,913,538
繰越金　224,624
事業別利用者数と内訳：子育てひろば運営事業　もこルーム・親子イベント
開設日 235 日　利用者数　2,446 人（1,114 世帯）
新規利用世帯数　117 世帯
もこルーム一般利用（平日一般利用日）イベント除く
開室日数　166 日　大人 764 人　子ども 926 人
合計　1,690 人
もこルームの備品貸し出し　63 件（未返却　11 件）
地域情報の提供事業　子ども・子育て情報誌「はらっぱ」発行
発行日　毎月最終金曜日　発行部数　2500 部
主な配布・設置場所　計 89 カ所
保育所・幼稚園・子育て支援施設　23 カ所
公共施設　8 カ所　医療機関　14 カ所
お店関連　32 カ所　企業・各種団体　12 カ所
他、個人協力
ＨＰを活用した「もこナビ」による情報提供　随時更新
子育て及び子育て支援に関する学習機会の提供と調査・研究事業
「もこママ研修会」
＊もこママ登録者数（2019 年 3 月末現在）19 人
研修会　毎月 1 回　述べ 120 人
アドボケーター養成講座、スタッフ研修、子育て講座
子育てサークル・自主活動グループの育成と支援事業
サークル活動　2団体　開催回数　のべ 51 回
専有利用による共催イベント　3 件
自助グループ推進活動　4 企画　通年
子どもの諸活動支援事業
子ども対象イベント（夏休みこども企画）　7 件
保育サポート　他団体　5 件　のべ利用者　49 人
自団体　5 件　のべ利用者　142 人
一時預かり　63 回　のべ利用者　68 人
面会交流援助活動　133 回（うちキャンセル 26 回）
援助実施ケース　17 ケース
面会交流に関する相談数　25 件
ひとり親家庭支援活動
しんぐるまざぁずカフェ　11 回　279 人
こども食堂もこちゃん　　11 回　308 人
フードドライブ　145 回
学習支援もこスタ府中　36 回　77 人
広報事業　ぷらっとほぉむ　24 号　発行
ＨＰバナー広告
こどもステーションの活動紹介など　facebook 他
子ども食堂もこちゃん　facebook
新聞掲載　6 件
講座・講話　4件
掲示　1件　日本子ども虐待防止学会学術集会岡山大会
パブリックコメント・要望書・アンケート協力　3 件
助成金・受賞など　WAM 助成
国際ソロプチミスト福山　福山クラブ賞
アサヒ飲料株式会社×社会福祉法人広島県共同募金
子ども食堂支援助成金
ワイズメンズクラブ国際協会西日本区　メネットアワー
おてらおやつクラブから物資援助
お寺さんを含むその他の物資援助
事業の運営体制（スタッフ数など）：
実施事業サービスと法令との関係：
設置及び運営財源：
ＨＰ：http://kodomostation.or.jp

1. 主たる事業

★子育てひろば「もこルーム」の運営
毎週月～金曜日 10:00 ～ 16:00（木曜日は 12：45 まで）
利用料金　1回　100 円　年会費　2000 円
午前中（月曜日は午後も）相談員スタッフを配置。ひろばの見守りを行いながら、利用者の日常的な困りごとや相談に対応している。
★一時預かり
もこルームにて、依頼に応じて随時、通常 1 世帯につきスタッフ 1 名を配置している。
★イベント託児
企業や各種団体からの依頼により、イベント開催時の託児を行う。託児会場は依頼者が手配する。
★面会交流支援
もこルームの休日の土日祝日を利用して、1 世帯にスタッフを 2 ～ 3 名配置。
★子ども子育て情報紙「はらっぱ」
毎月 2500 部発行　地域の子育て支援情報を集めて発信。
★ひとり親家庭支援
しんぐるまざぁずカフェ・もこちゃん食堂・フードドライブ・もこちゃんパックなど実施。
ひとり親家庭のご利用は全事業無料で実施（WAM 助成）。
★相談対応
子どもの発達に関する相談→専門相談員と連携し、同行して相談（専門相談員への謝礼　WAM）
DV に関する相談→必要に応じ、調停への同行やイコールふくやま相談への同行、警察への同行など。
★子育て講座
女性の心のレジリエンス講座　性の健康教育 " せーの！ "（保護者向け、幼児・小学校低学年向け）

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

2003 年、地域の公民館にて、絵本の読み聴かせの会「こども文庫」

を開いていたことがきっかけとなり、子育てサロンとなる。そこに集まっていた母親たちが「いつでも誰もが集えるひろばを作りたい」と、こどもステーションを発足。以降、「親と子のいこいのスペース」を 3 カ所で開設。子育て情報紙「はらっぱ」創刊、文部科学省子ども居場所事業受託など、さまざまな子育て支援活動を行いながら、2010 年 12 月 NPO 法人化。広島県の子育てイクちゃん応援団である「広島ガス株式会社」のご紹介で、広島ガス東中国株式会社と出会い、もこルーム開設に向けて話し合いを進め、2012 年 5 月、広島ガス東中国株式会社体験型ショールーム「ハートラボ」内に、もこルームを開設した。

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかね

広島ガス東中国株式会社様からハートラボ管理委託料をいただき、もこルームの賃貸料と共益費を支払っている。ガス代、電気代、水道代は、広島ガス東中国株式会社様がもこルームの分も含めて支払ってくださっている。
もこルーム開設プロジェクトでは、もこルーム開設時に寄付を集め資金提供いただいた。
もこママ　子ども・子育て支援に関わる人員を養成。
もこメイト　会員として、もこルームを利用。こどもステーションとしても個人の活動を応援。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

毎年、自転車操業で運営している状態。ボランティアベースで活動しているが、理事以外はなんとか活動補償をしようと努力してきた。
地域子育て支援拠点として運営していきたいが、福山市では NPO 法人への委託が認められず、希望が見出せない。来年度以降の活動補償をどうしていくか、苦慮している。この活動ができなくなると、利用者が困るのではないかということが心配。

5. 地域における連携体制とその実情

2019 年 7 月より「福山市子ども子育てサポート会議」を発足。地域の子ども支援、子育て支援などを行なっている民間団体とネットワークを構築した。現在、7 団体が登録している。10 月 25 日、福山市議会議員に呼びかけて、意見交換学習会を福山市議会棟で開催した。

6. 行政からの業務委託の有無

ウ）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
なし。
平成 28 年度～ 30 年度には、広島県より、府中市のひとり親家庭学習支援事業を受託していた。
エ）ない場合、行政や他団体との連携の現状や今後の予定について
イコールふくやま　相談時に託児が必要な状況であれば、相談室付きの託児室で託児を行う。
相談者に子どものいる場合、必要に応じてさまざまな同行支援や日常的な相談に応じている。
イコール相談から離れた後の継続的な支援（同行やフードドライブ、見守り支援など）
すまいるネット　相談者に託児が必要な状況があれば、親子を同行支援して子どもを見守る。もこルームで託児。
ネウボラ推進課　民間シェルターから出産にあたりトワイライトステイを利用したサイト、その後の乳児院への同行支援。

回答者
特定非営利活動法人こどもステーション理事長　奥野しのぶさん

こどもステーション外観　ショールームの運営管理をしながらひろば運営

ハロウイン・イベントのプレゼントの準備

ひろばスペース

生活支援

NPO 法人こどもステーションでは、ひとり親支援を行なっており、衣類や食料などの生活必需品をストック、必要な家族に提供している。また、ガス会社のショールームならではの設備、浴室や洗濯機・乾燥機、料理教室が行なえる厨房施設などを、必要としている利用者に使ってもらっている。

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域人材交流研修会 in さっぽろ
「地域子育て支援拠点発　“ 地域連携 ” で親子を支える」参加者アンケート集計

参加者アンケート　参加者数　59 名　回答数　56 名　回答率　95%

1．研修会に参加していかがでしたか？

a. とてもよかった　38
b. よかった　14
c. ふつう　0
d. 無回答　4

2．研修会の開催をどのようにしてお知りになりましたか？（複数回答あり）

a. ちらし　17
b. ホームページ
c. インターネットの記事　2
d. 友達の紹介　6
e. 新聞などの紹介記事
f. その他
・かざぐるまからの案内　3　・川田先生から　1
・会に案内が来た　3　・案内　1　・フェイスブック　2
・未来局職員　1　・他の先生から　1　・役所から　1
・子育てサロン代表より　1　・職場で　1
・詳細不明　5
g . 無回答　2

3．この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください

・どんな話なのか？と思い
・日常の仕事の中に活かせる情報が得られると思ったので。子育て拠点の活動を改めて知る機会となるので
・設営スタッフとして声がかかり、勉強になると思って参加しました
・旭川で子育て支援を微力ながら行ってきました。勤務していた園が札幌にも進出予定のため、情報を得ることと、現状把握がしたかったので
・地域の中で何をしていくのが良いのかを知りたくて（細々と行ってはいますが）
・山田さんが登壇されるので
・子育て支援の方たちとつながりたかったので。つながりを増やすため。 5
・いろいろな専門の方のお話を聞くことができました。身近な人にも声をかけたい
・児童デイサービス、地域の中での子ども食堂を運営し、地域での交流がいかに必要かを感じ、学びたいと思っていました。
・“ 交流会 ”、” 連携 “ にひかれました。内容が魅力的　2
・子育てにつながる支援の話が聞けるため
・行政が外の場で何を言うのか知りたかった。様々な支援の資源を知りたかった。自己研鑽のため
・地域連携が大切だと感じているから
・何かひろばで生かせることがあればと思って
・情報の整理を自分なりにしたかった
・団体の中で常設サロン等をさせていただいています。他団体の活動を含め、子育て支援というところのあらたなヒントをいただきたく、参加しました　5
・子育て支援（サロン）や電話相談などに関わっており、情報を得たいと思った
・家族支援制度や子育て支援の情報（最新）を知りたかった。虐待未然防止に取り組みについて知りたかった。子育て支援にかかわる情報を知りたいと思い参加しました　15
・仕事で精神障がいのある親の支援に関わっており、他の支援機関とつながりたいなと思って参加しました
・地域子育て支援拠点の方々、地域の連携先の方々の生の声を聞きたいと思ったため。いろいろな活動をされている方の話を聞ける
・子どもを育てる親として、またいろいろなお母さんたちとかかわりを持つ中で、皆さん不安があることを感じ、私自身も来年保育士の学校に通うため、札幌市としてどんな支援があるのか知り、周りのお母さんたちのサポートに役立てたいと思ったため
・担当の方から、直接情報を聞くことができるから
・常設サロンのスタッフをしているため、研修を受けたかった
・地域連携が何があるかわからなかったので
・地域での仲間のテーマに興味がありました　2
・自分の中で必要ないろいろなことを学んでみたい（皆さんのお話で）
・身近なコミュニティをよりよくしたく、参加しました
・新しい情報を収集して、子育て支援に活かしたいと考えた

4．　研修会の感想をお聞かせください

・良かった
・様々な事業の話を聞くことができ、とても参考になりました。子育て拠点としての活動の大切さ、大変さを知りました
・いろいろな問題をかかえている現状を知ることができた
・知らなかったことばかりで、大変勉強になりました。とても学ぶことが多かったです　2
・自分の家庭が異常だったと大人になってから認識するようになった。しかし親は相談先を知っていなかった。または当事者は異常だと理解していなかったように思う。そのまま高齢になり、問題は解決していない
・さまざまなサポートがあることを、多くの人に知らせることができるのでよかった
・武田課長のお話で、親にすすめたのち、行ったかどうか確認している（と思う）、同じ建物の中なら可能な限り同行している（と思う）とのことですが、「と思う」ではなく、「です」と伝える体制づくりが必要なのではないでしょうか？
・ブースでの話がよかったです
・テーマに沿って、テーブル訪問型がとても良かったです。内容がとても豊かで、どこの切り口からも、多く学ぶことができました
・内容が濃くて時間が足りない感じです。新しいサービス？団体？（DV 心のケア）も知れてよかったです
・多様な支援機関があり、大変勉強になりました
・とても参考になり、勉強になりました
・様々な資源を知ることができて、とても勉強になりました。子どもを預けて、やっとの思いで参加したので、時間が守られるとだらにうれしかったです
・もう少しゆっくり話を聞きたい。1部も2部も。1部は特に早口でしたね
・長い時間だったが、飽きずにいられた
・いつもの勉強会では学習できないことも知る機会になりました
・すごく刺激的でした
・交流会などでいろいろ詳しく話を聞くことができよかった
・事例の実際を知れた。拠点事業の持つ意味について整理できた
・いろいろな立場の中で子どもに関わっている方とたくさんお話ができ、参加して自分のスキルにもつながると思った
・子育て支援のスペシャリストが勢ぞろいで、最新の情報をトータルで知ることができました
・情報を知る、つながることがいかに大事か……各所で思いました
・２０年くらい前から広場を行っていますが、ますますその必要性が増し、予防的支援という役割の明確化もなされていることがわかりました。川田先生のお話で、「孤立した子育ての解決だけでなく地域コミュニティの再構築につながる多世代型のひろば」といっていただき、私たちのしているひろばの意義を再確認できました
・ねっこぼっこのサロンはすごい！小林さんの視点は学びたいです。異世代が集える場、理想です。そして夜のサロンも……。専門的な知識を持つスタッフの重要性を感じます。夜のサロンの必要性は私も、もう少し若い時に感じた事、ありました
・子育て支援拠点がメインの話でしたが、子育てに関わる全ての機関はつながることが必要だし、つながりをもてるための支援（機関同士も利用者とも）が必要なんだなと感じました
・札幌市の取り組みは知ることができたが、本当に支援が必要な人たちに認知されているのか、また立地的な問題、身体的な理由などでサロンに行けない方のケアをもっと考えてほしい

・もう少ししじっくり聞きたいこともあったのですが、時間がなかったのが残念です
・いろいろなことが難しいと感じた
・広くいろいろな情報を知ることができた
・いろいろな支援拠点の内容がわかり、ためになりました
・とても参考になりました。子育てサロンで役立てたいです
・やはり札幌市は「妊娠期から」「切れ目ない」支援と「連携」が課題だと思った。たくさんの支援、制度、団体がある。それぞれとても重要な取り組みをしている。これをつなげてうまく活用しなければもったいない。あと今の 10 代・20 代は電話よりも LINE 相談
・いろいろな事業を知ることができてよかったです
・時間が足りないなあと思いました。もっとお話を聞きたかったです。ありがとうございました
・子育て支援に関わる機関や団体の具体的な活動内容を知ることができ、よかった　5
・とても新しい形式でよかったが、時期的なこともあり、最後まで参加できず、残念だった
・様々な活動支援がなされていることを知ることができました。もっとたくさんのママや子育てに関わる人たちにも知ってほしいことばかりでした
・初めて参加しましたが、熱意あるスタッフの力を感じました。子育てに関しては時代の流れとともに親の姿も変わってくるので、姿に応じた支援が終わることなく続くと思われます。みんなで子育て支援、共に行っていきたいと思います。たいへん、色濃い研修でした、ありがとうございました
・PP じゃなきゃ NG、PDF は使えないよ、など発表者の方も困ってましたし、時間がもったいないと思いました。でも色々な話が聞けてよかったです！ありがとうございました
・お疲れさまでした。ありがとうございます。いつもとは違う、好きなブースをまわるというのがよかったです
・１3時半から開始と思っていたので、スタートが聞けなくて残念でした。
・もっと各プログラムの時間をとってはどうか？

5．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください

・難しい
・“ 近所のおばさん ” 的な地域で見守りができる社会が望ましいと心から思います。個人で社会を変えることは難しいので、行政、民間、様々な連携で創り上げることが本当に大切だと思います
・たくさんの団体が上手につながれば、大きな力になるのだと改めて思いました
・もっともっといろいろな所とつながっていきたいと思いました
・アウトリーチ、気楽に寄れる場が必要
・まだまだ子育て支援を、地域全体という取り組みが広く理解され協力者が多くはありませんが、国の施策として、全面に出てきたことは、大きな動きと思う。ネットワークを無理せずできるところからのつながりを大切にしていくことが大事かと思います。（子育て家庭のために、子どもたちの未来のために）
・ダブルケアを広げたいです
・縦、横の連携がもっとスムーズにいったらよいと思いました
・情報提供がまだ不十分と思いました
・連携のためには、顔が見える関係づくり、じっくり話し合う機会、子育て当事者とのゆったりとした関わりが必要と思います。拠点の方や地域の方と本当につながりたいです。親子さんにももっときめ細かいかかわり、ケアが必要と思っております。でも支援者の数が少なすぎます。上記のような必要な時間が取れません。もっと保育士・保健師・心理士を大切にしてほしいです
札幌市さん、賃金・人員配置を見直してください。専門職の、現場の声をまず聴いて下さい。子どもの命、守る気持ちはありますか？
・みんながつながることの大切さを再確認
・小さなことから、実践が大切と思うので、できることから積み重ねていきたい
・地域の中で、ヘルプを出せる、出しやすい環境や人間関係が、本当に大切になってくるのだろうと実感です。小さな単位…… 身近なところでの多様な「つながり」が作れることも……私たちが、サロンをやっている意味があるかと感じています
・世代を越えて、大小にかかわらずできることでつながり続けようと思います
・知識や情報を知らないと大変だと思った
・地域の人みんながより幸せになれる地域づくりに少しでも役に立てたらと思います
・自分が今後かかわっていく中で、少しでも一人で子育てしている方の助けになったり、力になったりできればうれしく思います
・徒歩で行ける範囲にそれぞれの特色・カラー、できるだけの資源がある
・専門機関をきちんと把握すること、専門性の向上につながる学習を継続すること、など子育て支援にかかわる者としてしっかりやっていきたいと思います
・子供の安心・安全が守られることは大前提なのですが、親の支援がやはりまだまだ少ないなと思いました。子も親も川田先生の話にもあったように地域、コミュニティの課題でもあり、この視点が希望でもあるなと感じました。私事ですが明日からまたがんばります
・様々な家庭のニーズに応じて、必要な支援を全ての人に届くようにしてほしい
・グループでなきゃできないこと、個々でもできること、があるのでまずは、自分から何ができることをしてみたい
・助産所の紹介を広めたいと思う。町内会での話をしたいです
・連携が大事。母子からの悩みを次々とつなげていくようにしたいと思いました
・本日のように現場の方が地域の他の支援の情報を知ることで知り合うことは大切だと思いました。あとはせっかくの「市の包括支援センター利用者支援事業制度」をもっと有効なものにしたい。人出不足はあるが、やり方、システムの工夫はできるのではないか
・顔がわかる関係作りを積極的に行っていきたい

6．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればお聞かせください

・多くの話を聞くことができる、とても貴重な場をつくっていただき、ありがとうございました。ただ時間が限られているので、すべてを聞けなかったことが残念です
・このような機会をありがとうございました。また学ばせていただきたいです。とっても良い取り組みだと思いました　4
・子育てを中心に、様々な団体や、活動している人たちとのつながりや、学ぶ機会が本当に大切だと思いました。プロジェクトについては、よく知らなかったので、今回とても良かったです。機会をいただきありがとうございました
・様々な子育てに関わる支援について知ることができました。日々出会う人たちに必要な人に、必要な時につながっていけるよう、知れてよかったです
・わかりやすい連携であり続けてほしいです
・本当にありがとうございました。様々な視点から考え、支えていくことの必要性を実感しました
・多世代・地域、税の背景、今の社会の状況……いろいろと活動している中で課題に思っていたことも多く、「なるほど……」と思うことがたくさんありました。時間がもっとたくさんあったら……と思うくらい、もっと聞きたいと思うことばかりです
・高齢者も含め、まるごとに向かいたいです

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域人材交流研修会 in やまがた「みんなで考えっぺ　子どもが真ん中のまちづくり」参加者アンケート集計

参加者総数：24 名　アンケート回答数：22 通　回答率：92%

1．研修会に参加していかがでしたか？

a. とてもよかった　18
b. よかった　4

2．研修会の開催をどのようにしてお知りになりましたか？（複数回答あり）

a. ちらし　10
b. ホームページ
c. インターネットの記事
d. 友達の紹介　4
e. 新聞などの紹介記事
f. その他
・登壇者からの紹介　・施設からの通知　・市からの情報
・主任児童民生委員からの紹介
・支援センター　連絡会で資料をいただきました
・お知らせをいただいて　・職場　2

3．この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください

・子育てをどう考えているのか、これからどう考えていくのか参考にしたかった
・様々な取り組みを学びたいと思った
・自己研鑽
・山形の子育て状況を知りたい、情報交換したい
・普段関わることがない人と話せる機会だと思った
・開催場所が近かったから
・業務命令
・人数が足りないということで
・子育てに関わる業務を行っているため、子どもが " 真ん中 " のまちづくりについてとても興味があった
・様々な分野の方々の活動を知り、自分の悩みも解決できたらよいなあと思いました
・教育に関する勉強をしているので、知識を広げるためにも参加しようと思いました
・活動している人、介護している人・・・とみんなが対象、みんなで子育てを考える機会ということで参加しました
・地域で暮らす仲間として何ができるかに興味があったから
・子育てに関わる人たちの意見を参考にさせていただきたいと思ったため
・自分の関わっている支援について、違う方向性からの視点・意見を知りたかった
・山形市の取り組み方と、今後の地域の連携をどうすればいいのかを知りたかった
・教育について学ぶ者として、勉強になったから
・とても興味があったから
・他の関係機関の方々の話を聞いたり、自分の知らないことを聞いて今後に役立てたいと思った

4．研修会の感想をお聞かせください

・各々の意見を聞けてよかった
・単なる講演の場ではなくグループ別のワークショップで楽しく勉強できた
・前半の取り組みの話を聞いての後半のワークは、様々な立場での意見を聞くことができ、たくさんの学びとなった
・良かったです
・たくさん情報交換できてよかった
・報告を聞いてからのグループワークだったので、話しやすかったです。様々なかかわりをしている方々で話ができ、いろんな発想を得られました。やってみたいこと、自分の気づきがありました。それがうれしかったです。
・いろいろな人の思いや意見が聞けたこと、「こやし」になりました
・ざっくばらんに話し合えてよかったです
・各々の発表を心にとめ、活動を進めたい
・若い人の意見も聞けてよかったです
・いろいろな場で活躍されている方々の思いや気持ちを知ることができた
・とてもわかりやすく、活動の幅が様々な方々の話をお聞きできて、とても参考になりました
・山形の子育ての現状・課題が見えてきて解決のためのアイデアを考えるというよい経験ができました
・それぞれの立場の方の話を聞くことができ、又ワークでは、各グループの発想が勉強になり、力になりました。資料が見えなかった（山形市）
・県をまたいでの方や色々な方と話すことができてとても良い時間になった
・様々な立場の方と色々な意見を交えて話をすることができ、とても良い機会となった
・目からウロコの提案もあり、新しい発想をいただけた。できないと思いこまない、どうすればできるんだろうと考えることの大切さを学びました。
・立場は様々でも同じテーマで話し合うと、共通する部分が見つかりまたあらたな発見があった
・大変勉強になりました
・今まで知らなかった問題を知ることができ、学生として何かできることはないかと考えた。自分から動いて、周りを巻き込んでいければいいなと思った
・はじめの一歩　何か自分でやれることをやっていこうと思います
・様々な世代・各関係者より話を聞くことで子育て支援に対する視野が広がりました

5．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください

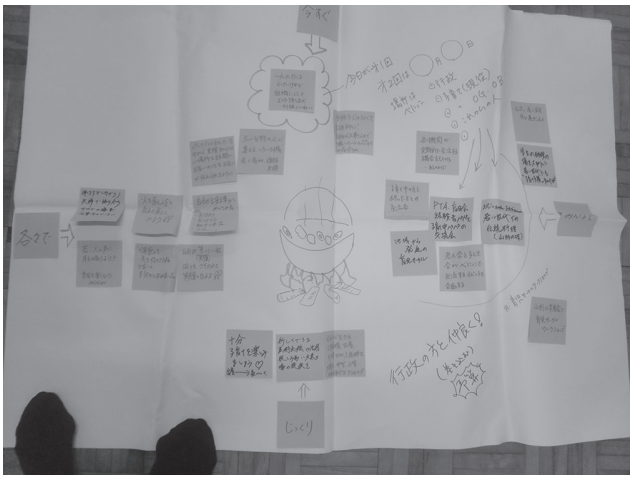
・こういった会を継続し、広めていくことが必要だ
・大人と子ども、それに加えて老人も含めたコミュニケーション作りを大切にしていきたい
・知ることでつなげること、できることがある
・連携が必要
・自分のところだけでなく、皆がやっていることに目を向けて生活したいです
・地域の方々と触れ合う機会を自分から作る努力が必要
・障がい、大人、子ども、関係するところすべてに共有させたワンストップができたらよい
・皆に情報発信していきたい
・地域でまとまることが一番なんですね
・地域、親同士、子同士、近所同士での繋がりが一番大きいと思った
・横のつながり …… 今日のような研修会で私たちがつながっていくことが大切ですね
・町内会での関係づくりが大切と思う。高齢化している町内会役員の方々、若い世代の町内会への参加・関心は必要と思う
・これから私たちがしていきたいこと、やらなくてはいけないことなど、明確にわかった。いろんな人の意見を聞けてよかった
・子どもの暮らしやすい地域ができればよいなと思う
・ワークショップで語り合ったことを大切に、小さなアイデアや思いを一つでも実現できるように語り続けていきたいと思います
・アイデアをまずやってみる、一緒にできる仲間とやっていきたい
・さまざまな世代、さまざまな立場の人とつながる場が大切だと思う
・十分に子育てが楽しめる社会、山形にしていくために何が必要か、じっくり考えていきたい

6．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればお聞かせください

・もっとこういった活動を皆に知ってほしい、ＰＲしましょう！
・是非、継続してもらいたい、していきたい
・担当者だけなく、地域へのＰＲが必要
・本日の体験ありがとうございました
・子ども関係だけでなく、障がい、高齢者関係にもお知らせすると良い意見が多くなったと思います

・各々の話が聞け、楽しかった
・ワークショップで新しい発見があり、自分の思いを伝えることができ、とても勉強になる時間でした。皆さんに感謝いたします。ありがとうございました
・ゆっくり報告書等を読ませていただきます
・またこのようなチャンスがほしい
・これからもよろしくお願いします

テレビ局の取材も入った。



山形でもいよいよ市民版子ども・子育て会議がスタートか？

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域人材交流研修会 in みと「みんなと生きていく」」参加者アンケート集計

参加者数：24 名　アンケート回答数：22 名　回答率：92%

1. 研修会に参加していかがでしたか？
a. とてもよかった　15
b. よかった　6
c. ふつう　0
d. よくなかった　0
無回答　1

2. 研修会の開催をどのようにしてお知りになりましたか？（複数回答）
b. ちらし　5
b. ホームページ　3
c. インターネットの記事　1
d. 友達の紹介　6
e. 新聞などの紹介記事　0
f. その他　10（メール、メルマガ、FB、セカンドリーグ茨城からの案内、会社の通知）

3. この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください。
・子育て、地域で暮らす……。とても大切なこと
・ファミリーサポートセンターに従事しているため
・「小規模多機能」というキーワード。多様性を受け入れる場のあり方について考えたかった
・地域で活動している方々が、どこに課題を感じているのか興味がありまして
・地域包括ケアというワードに惹かれて
・「地域まるごと」「みんなで生きていく」というキーワードに惹かれました。
・地域で活動している方々と交流のきっかけになればと思ったから
・地域まるごとケアという考え方に共感した。同じようなことを考えている人たちとつながりたいと思ったから
・さわやか福祉財団、セカンドリーグ茨城、茨城県社会福祉協議会が絡んでいるため
・地域で自分自身ができることは何かをしりたかった
・お友達に参加するとよいとすすめられた
・普段会えない方たちと交流したくて
・自分が何か地域の役に立てることを見つけたかったから
・地域で暮らすというテーマに興味があったため
・誘われて
・地域づくり、包括支援センターのあり方について学びたかった
・Facebook に紹介があった
・自分は現在、どこにも所属していないけれど、みなで楽しく幸せに暮らせる世の中になったらいいな。何か自分もできたらいいなと思っているので、研修会の内容に興味を持ちました
・自分のしている仕事の課題のヒントになれば
・「地域とのつながり」「みんなで生きていく」といっても？？なので、広げたくても個では難しい現状で、ヒントとなれば
・自分自身が子育て真っ最中で、困ったり、世代の違う方との交流に難しさを感じることがあり、「みんなで生きていく」という話に興味があった

4. 研修会の感想をお聞かせください
・さまざまな情報を知ることができ、とてもよかった。皆さん頑張っていると感じた
・すばらしい各者（原文ママ）、他の意見が聞けてとても参考になりました。
・ユーアイ村さん、やりたいことのデザイン、見える化に衝撃受けた。午後の会、すごく楽しかったです！
・午前中の 3 人のお話が、とても面白かったです
・とても楽しかった。人と人が出会う、つながる工夫について考えを広げることができた
・今までもやもやしていた部分が、すっきりしたところがあり、ほんとうによかったです！
・大変参考になった。西川さんの話は、父親の立場としても参加してみたいと思った
・そうそうたる顔ぶれでした
・3 人の方の話、視点（point of view）が異なっていてよかった
・いろいろな人たちに出会えてよかった
・とても勉強になった。西川さんのやきいもや路上の活動は面白いと思った。ユーアイさんの活動も素晴らしい。近くでこういう場所があるのは心強い
・いろんな方と話ができて勉強になりました
・とても素晴らしい話をたくさん聞けて、今後自分の活動に活かせるヒントが見つかった。いろんな職種、立場の方と交流できて勉強になった
・ワークショップもあり、よかった
・とても参考になりました
・面白かった
・市長のお話からパネラーのみなさんのお話まで、とても興味深い内容でした
・たのしかったです
・即、活かしてみようと思えるヒントが盛りだくさんでした
・西川さんのお話、もっと聞きたかったです。本、読んでみます

5. 地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。
・これからの時代、とても重要なことと感じています。一人ではひと家庭では、生きていけませんから
・なかなか難しいと思うが、少しずつ自分のできることをすすめていきたいです
・人が関われる場のデザインができるようになりたい。実現に向けて行動したい
・横のつながりの大切さを感じています
・子どもは縁結びの神様。子どもを真ん中に地域とつながる人を増やしたい
・分断をやめたい。何から始めようか？
・お互いの顔の見える関係が大切
・とうにかしてもらいたい、じゃなく、自分たちでどうにかしよう。自分もなんとかしようとみなが思えるのがスタートだと思いました
・まるごとは？　専門性必要と思う。ネットワークが必要
・まずはご近所さんを知ることが大事だなと思った。地域活動にこれから参加することをしていきたいと思う。そこからまた、いろいろしていきたい。
・立場、役割を超えて誰もが対等に交流できる、集まれる場作りが必要だと感じた
・地域住民への理解、周知が必要であると思う
・出会いの場を作ることはいつも必要だと考えています
・実際にやってみたい
・地域ではないですが、活動している仲間との交流が、ママと子ども＋パパになり、家族同士がつながり、広がっていく、が「みんなで生きていく」になるのかな？

6. 地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればおきかせください。
・これからも情報を提供してください
・このような場を設けていただいたことに感謝します。COLORS さんのクッキーを資料として、というアイデア素晴らしいです！おいしかったです
・よい刺激になりました。ありがとうございました
・また参加したいです
・今後も何かあったら参加したいです
・セカンドリーグ、もっとがんばれ
・これからの活動楽しみです。ありがとうございました
・また茨城でも開催していただきたい
・成功例のようなものが知りたい

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域人材交流研修会 in おおがき
「子どもと共に築く地域！　全世代の移動支援をともに考える」参加者アンケート集計

参加者数　51 名　回答数　24 名　答率　47%

1．研修会に参加していかがでしたか？

a. とてもよかった　17
b. よかった　7

2．研修会の開催をどのようにしてお知りになりましたか？（複数回答あり）

a. ちらし　9
b. ホームページ
c. インターネットの記事　1
d. 友達の紹介　7
e. 新聞などの紹介記事
f. その他　2（理由明記なし）
・講演依頼の際
・職場
・協力団体
・安田さんの紹介　1
・大学の紹介　4

3．この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください

・移動支援や地域まるごとケアに興味があったから
・グループファシリテーターとしてお呼びいただきました
・課題提供者から、共通の課題へのヒントが得られるかもしれないと考えた
・移動困難の課題を把握したかった
・今後の大きな課題となる「移動支援」を考えるにあたり学びを深めたいのと、つながりを作るため
・ピンときたため
・地域の課題、問題点など生の声を聞きたかった
・関心があったから
・今後、様々なグループワークなどがあると思い、また人生の先輩方と一緒にできると思う大切な機会だと思ったため
・前に安田さんのお話を聞く機会があり、その時に興味を持ち、参加させていただきました
・大学で行政の研究をしているのだが、行政とはちがう視点から課題を見つけたいと思ったから
・様々な考えを聞いて勉強になると思ったから
・いろんな経験になると思ったから
・子育て支援についてのお話を安田さんから以前聞き、それ以来、福祉に関して興味を持つようになったため
・「移動支援」に興味があったので
・地域課題について考えることができるため
・学生として企業の方、NPO法人の方々が来られて、議論ができたことが勉強になりました
・地域で何ができるかということに興味がありました
・様々なNPOの方々のお話を聞く機会がなかなかないと思い、勉強になると感じ、参加させていただきました
・地域の移動支援のことについて、様々な方の意見を聞き、自分の視点を広げたいと思ったから
・安田さんのNPOのボランティアを通じて、子育てについて興味を抱いたため
・どんな話がでるのか、興味深かった
・当市においても、同様なワークショップを予定しているので、きました

4．　研修会の感想をお聞かせください

・とても勉強になった
・（4と5あわせて）グループディスカッションでのキーワード「縦割りをいかに解消していくか」。縦割りは何も行政だけでなく、市民組織・市民団体も。そこをネットワーキングしていくことで課題解決の糸口はみえてくるかも … と希望が持てる。また、行動への一歩が比較的むつかしくないことなのかもと実感できる場でした
・皆さん真剣、まじめ
・年齢層の幅の広い意見を聞けたのがよかった
・何か一つでも自分の身にして帰ろうと思いましたが、良い時間になりました
・はじめて出会う方とワークショップができて勉強になりました。大学生が積極的で頼もしかったです。大垣市以外の方との意見交換ができよかったです
・様々な分野の方とお話しできてよかったです
・とても勉強になった
・予想していた通り、とてもレベルの高い方が多くてこちらとしても楽にでき、これからの糧にしていきたいです
・いろいろな立場の方々から意見を聞くことができ、とても勉強になりました
・協力したい人、利用したい人がどうやればつながれるのか考え、まだまだ改善点が多いことを知れてよかった
・難しい問題について、様々な視点からの考えを聞くことができてよかったです
・様々な立場の人からいろんな意見や感想を聞くことができたので、とても刺激になりました
・実際の現状を知ることで、今、何が足りていないのかが分かった
・「つながる」ことが大切だなあと思いました
・様々な分野で活躍されている人たちのお話をきくことができて良かった。
・自分の知らないこと、自分の知らない部分を知れた、そのような場でとても勉強になりました
・知らない部分もあり、勉強になりました
・「移動支援」という問題について考えたこともなかったですし、貴重なお話をいただいたので、来て良かったと感じております
・地域、民間、NPOなどが連携して地域の課題を解決していくことが大事だと思いました
・移動手段の課題が多く、やはり地域の助け合いが重要で、自治会の存在の大きさがわかった。日頃から地域をイメージしながら生活していきたいと考えた
・いろんな意見が聞けた。どんなものがあるかも知らず、興味だけで来たが、行政も送迎だけでなく、資金や、知らせる方法の壁があることがわかり、協力できるところはしていきたい
・移動支援は大変むずかしい

5．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください

・何をするにも行政の手助けが必要になってくると思うので、積極的に行動していきたいと思った
・一人一人の意識がちょっと変わるといいかなと思う。その「ちょっと」が少しずつ大きく、また集まることで大きな変化となれば
・お互いを思いやること、つながりを大切にすることから、誰もが住みやすい社会になると思いました
・住民との話し合い、行政、市民（住民）、学生
・地域全体で解決してくという仕組みは大変重要だと思います
・いろんな意見を聞けて参考にさせていただきます
・私達若者にも様々なことができるため、実現していきたいです
・今置かれている立場の強みを武器に支援できればいいなと思いました
・移動に関することで、子どもや高齢者が必要としていることが行政に伝わっていない現状を住民から発信していかなければならないと感じた
・住民同士で問題を解決することが大切だと思った。日常から良い関係を築いていく大切さもわかった
・自分にできることは少なからずあるので、行動に移したいです
・地域住民が他人事と思わず、協力しあえる環境づくりがとても大切だと思った
・“自助”をいろいろな場面で求められます。自助を支える仕組みを作らなければ ····

・行政の人だけでなく、地域の人たちの協力を得ながら行っていくのがよいと思いました
・政策としてはとてもよいと考えますが、今回の議論にもありましたように公共交通の部分を良くしていくべきだと考えます
・現実化する時の課題はまだ多いのでは。リーダーが本当に必要なのか、構築化、組織化の難しさを感じました
・若者という立場から、地域貢献できることをさがして実行をしたいと思います
・小さなことは、自分からでもできるので、そういう機会があれば参加し、これからも高齢化社会が進んでいくので、様々な観点に目を向けていきたいと思いました
・若い世代の地域活動の参加を促していくことが重要と考える
・自分の協力できるところはぜひしたいです
・地域包括ケアに子育てを組み込むことは大

6．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればお聞かせください

・今回のディスカッションでさらに興味が出た
・またこのような交流学習会があったら参加したいです
・各地域をつなげるきっかけになると思うので、ぜひ様々な地域で活動してください
・こんな企画を考えて今後も広げていってください
・とてもよいことだと思い、勉強になりました。ありがとうございました
・現在、求められている支援は、総合的なものだと感じました
・このような「機会」を重ねることが大切かと思います。ぜひ今後ともよろしくお願いします
・自分は福井出身なのですが、私鉄のバス運用があるので、そういったところとも協力していくべきだと考えます
・このような機会があれば是非参加したい

グループ発表

大垣交流会

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域人材交流研修会 in つるが
「誰もが気軽に立ち寄れる　ぬくもりのある居場所をつくろう」参加者アンケート集計

参加者数　40 名　回答数　22 名　回答率　55%

1．研修会に参加していかがでしたか？

a. とてもよかった　15
b. よかった　5
c. ふつう　2

2．研修会の開催をどのようにしてお知りになりましたか？（複数回答あり）

a. ちらし　11
b. ホームページ
c. インターネットの記事
d. 友達の紹介　5
e. 新聞などの紹介記事
f. その他　6
・職場　2
・林先生　2

3．この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください

・つながり、ネットワークについて学びたかった　2
・居場所づくりに興味あり　2
・法人として地域とのかかわり、向き合い方を考えている　2
・地域活動に興味あり　2
・地域づくりに向けてすべての世代の意識を高く持つためにどうしたらよいかを知りたかったから
・子育て支援センターに勤務しているが、老人の方とのかかわり方等、ヒントがないか
・仕事上、少しでも参考になることがあればと思い参加した
・様々な職種のみなさまと意見を交わしたかった
・誰もが気軽に立ち寄れる…という題目が支援センター事業にも必要だと思った
・つながりをつくりたい
・世代を越えるってどうやって？という疑問を解決してみたくて参加した
・不登校の子の居場所を徒歩圏内に作りたいという思いから

4．　研修会の感想をお聞かせください

・いろいろな立場の方からの意見が聞けて参考になった　5
・グループワークが楽しかった。似たような気持の方と話ができた　3
・3 名の方の活動報告に感動した。少しでも居場所が各地域に増えていくよう様々なつながりを大事にしていきたいと改めて思った。 2
・苦手なグループワークですが、今回はグループの人に恵まれ、楽しい時間だった
・講師の方の活躍の話が刺激になった。もう少し内容に深まりがあるとよかった
・はじめてお会いする人のパワーに圧倒された
・皆さん、強い思いを持って活動されていた。今後も応援していきたい
・もっと参加すべき
・法人の中では立場の関係でつながりにくさがあるが、事業所をされている方との情報も聞くことができ、幅広く情報を伝えていくことができると感じた
・あっという間の時間だった。明日への仕事に活かしていきたい。
・居場所作りについては様々な可能性と手段があることを知り、勉強になった
・少しでも多くの方と話し合う場所を作っていきたい
・つながりあうきっかけをいただけてありがたい

5．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください

・小さなことでも自分が手をつけられる範囲から行動していきたい　4
・少しでも多くの方と話し合う場をつくっていきたい　2
・いろいろな方の協力が必要なので、連携できる力を持つことが必要　2
・つながりを大事に年齢に関係なく、住みよい市になっていけばいい　2
・地域での実践等、行政でも真剣に考えていかなければならないと感じた
・地域の人たちを動かすには、楽しみ、興味、必要性を感じていただくことが重要
・誰もが他人を評価せず、強制もなく、楽しく参加できる居場所をつくることは今を生きるすべての人にとって大切
・思いのある人は必ずいるので、どうつなげていくかが重要
・どこに所属しているから、ではなく、個人的にできることがたくさんあり、そちらのほうが良い時もあることを知った

6．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればお聞かせください

・貴重な機会をいただき、気づきがあった　4
・また、敦賀で開催してほしい　2

シェアタイム

どんな場所にしたいか

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域人材交流研修会 in させぼ
「地域でどう支える？　育児と介護の同時進行＝ダブルケア」参加者アンケート集計

参加者数　35 名　回答数　23 名　回答率　66%

1．研修会に参加していかがでしたか？

a. とてもよかった　21
b. よかった　2

2．研修会の開催をどのようにしてお知りになりましたか？（複数回答あり）

a. ちらし　5
b. ホームページ
c. インターネットの記事　2
d. 友達の紹介　6
e. 新聞などの紹介記事
f. その他　10
・講演依頼の際　1
・職場　2
・協力団体　7

3．この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください

・仕事の場面でダブルケアに直面することがあり、支援についていろいろな人の意見をききたかったため
・ダブルケアは身近なことだと思った
・行政の立場として参加する必要があると感じた
・数年前に子どもが未就園児でダブルケアをすることになりました。どこに相談すればよいのか、どのように親のことを進めたら良いのか、私には見当もつかず悩んだので、このような機会があって専門家の方を交えて話がききたいと思った
・ひと通り、介護、子育てが終わった今、振り返ってみようと思いました。
・まさか登壇者で参加するとは思っていませんでしたが、いい機会を作っていただき、ありがとうございました。＊リレーの時間がもう少し欲しかった
・交流ができる場だと思った
・病院（リハビリ）での仕事にいかせると思えた
・私自身もダブルケアをしていて、自分のために参加した
・子育て支援を高齢者が担えないか、そんな可能性があればいい
・トリプルケアのような生活をしているので

4．　研修会の感想をお聞かせください

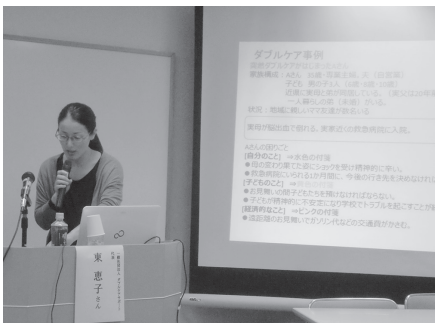
・子育て・介護等の専門家と話し合えてとても有意義だった
・ダブルケアの難しさについて、体験談等を聞いて知ることができた。各支援者の方や参加者と意見交換ができたことが良かった
・初めて顔を合わせる方ばかりでしたが、今まで触れることのなかった社会資源に触れることができ、良かったです
・今、育児中でそれだけで大変と感じていましたが、そこに介護がプラスされるとさらに大変だと思いました。私も支援したいと思います
・広義の意味でのダブルケアについて知り、幅広い知識と困りごとをあらかじめ知っておくことが大切だと感じた
・Wケアの方々が苦労をすんなり話されていることに驚いた。いろいろな方々との出会いで、知らなかったサービスを確認できた
・はじめてで緊張したけど、とても楽しかった
・もっと他人に相談してもいいんだと思えた。介護、育児が楽しめるようなやり方を見つけるヒントになった
・参加された方々が活発に意見をだしあえてよかった。当事者の方が発表してくださったことに感謝します
・介護など今までにお会いできなかった方々とともに考えることができたことはとても参考になりました。当事者の方々、グループワークの意見も学びがたくさんありました
・いろいろな話がきけて良かった。出会いもたくさんあってよかった。同じような悩みで頑張っている人がいることを知れて少し安心した
・日頃とは違った視点での話を聞くことができました。今後、ダブルケアの問題を地域として考えていく必要があると感じた
・もっとケアマネさん等をよんできてくれたら、と思った
・自分にない発想がきけたり、いろんな人に出会えたりして良かった
・他職種や子ども食堂での活動、当事者がきけ、意見交換ができて良かった

5．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください

・地域での顔の見える関係づくり、多世代交流をすすめていきたい。そのため、様々な立場の人と意見交換することは重要だと考えるので、このような場は貴重でした
・異年齢、異世代の交流はとても大切だと思う。そのためにも地域づくりを！
・子育てと高齢が一緒になれたらいいですね。企画を練らないといけないと思いました
・いろいろな主体が連携していくためのハブの役割を行政は担っていく必要があると思う
・ダブルケアの方への情報・提案ができるよう、私自身が学ぶ必要性を感じた
・すべての年代の方が相談できるしくみを早くつくってほしいです。若年者は伝える力が弱いということでしたので、チェックシートがあると答えやすいです
・社協という立場でいろいろな方々の意見、気持ちを取り入れながら推進できればと思う
・もっと近所の方との交流を持とうと思った
・地域のつながりが欲しい。近くに頼れる人が欲しい
・「支援を受けた人が支援する側になる」の繰り返しが上手にいくように、たくさんの方々に発信できたら、と思った
・関係機関が連携してこれまで支援してきたと思うが、その一つ一つのケースが積み重なりシステムとして総合相談ができるようになればいい
・私も地域のため、人の為に働きたい
・隣の誰かが困っているとき、どこかの誰かがそっと手を差し伸べる世の中にできたらいい
・子育て、介護、障がいと相談する場所を分けないで、困ったら「地域包括に」となっていけるようにしたい
・マンションごと町内会会費を払わない等、すでにある地域コミュニティに入りにくい場合もある。もっと円滑に地域が顔見知りになればいい

6．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればお聞かせください

・街づくりの大切さを感じた
・イベントを打って行かないといけないなと思った
・託児付きで助かりました。ありがとうございました
・地域が一体になれるようなお付き合いを日頃より少しずつでもやっていこうと思う人が増えて、このプロジェクトが根付くことを期待しています
・たくさんの分野の人（医療・介護・保育など）にきいてほしい話だと思った
・佐世保市で、より連携がとれるといい
・他地域でもぜひやりたい
・これからも情報収集等、活用させていただきたい
・地域の顔の見えるネットワークを今後も作っていきたい
・他職種、様々な立場の方と顔の見える関係づくりのため、このような場が継続的にあればいいなと思う



後半のケース検討会議スタート

3年間の調査からのまとめ

第 1 期地域まるごとケア・プロジェクトの概要とまとめ

2015 年度のまとめ

2015 年度は北海道北見市、岩手県大船渡市、東京都世田谷区、三重県名張市、滋賀県東近江市、島根県雲南市、香川県高松市、大分県臼杵市へのヒアリングから、制度に分断され見えなかった複合課題に行政側も気づき始めたこと、子どもや子育ての現実を地域の人々にもっと理解してもらう必要があることなどがわかった。

2015 年度のヒアリング結果に基づくキーワード

初年度である 2015 年度の調査報告では、ヒアリング終了後に全員で結果を共有、キーワードを出すワークを行ない、課題の抽出と、問題提起を行なった。

課　　題

地域福祉、地域包括に子ども・子育て支援が入っていない。
子育て支援にはお金がつかない。
旧住民、新住民、仮住民、転勤族。
地縁づくり、組織化の困難さ。
人口規模による難しさ（人口が多過ぎても少な過ぎても困難）。
企業の支援が見えない。

提案につながるキーワード

生涯現役＝全員参加（赤ちゃんから高齢者まで）の地域づくり。
多世代が集う居場所を中心としたコミュニティ形成。
地域に張り巡らされた重層的なネットワーク。
誰もが納得、参加していると感じられる一体感の醸成。
地域で“ ○○をする“ 合意形成。

立ち上げ時と継続、時機に合ったキーパーソンの存在。
行政、NPO、企業、地縁団体などをつなぐコーディネーター。

最大の課題は子ども・子育てに関する地域の人々の理解

一連のヒアリングから見えてきたのは、やはり地域の方々に子ども・子育てのおかれた現実を知ってもらうことと、理解してもらうことの大切さ、そこに至るまでの難しさであった。

そこで、最大の課題をにっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起として、子ども・子育ての現実への理解を呼びかけるとともに、地域まるごとケアの実現への提案と具体的な対策を、ヒアリング結果を元にまとめることとした。

2015 年度の最終まとめとなる調査報告会では、さらに少子高齢人口減少が進む 2050 年のコミュニティ構想をまとめた樋口恵子団長の基調講演と、ヒアリングなどで出会った、子ども・子育ても地域課題として地域づくりに取り組む方々の実践を紹介した。地域課題に取り組むさまざまな立場の方々がご参加くださり、報告会の議事録をも収録した年度報告書を作成した。

2015 年度　にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

子ども・子育ても、地域の課題です
どうか、手を貸してください

地域での子ども・子育て支援が大切な理由
子ども・子育ての現実を知ってください

2015 年度　にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

赤ちゃんからばあば、じいじまで、
家族まるごと、地域で支え合おう

○その人の能力を発揮できる場の提供と工夫
○さまざまな人を巻き込み重層的なネットワークを推進
○その人の困りごとに寄り添うサポート・プログラムの構築
○人間サイズの規模でつくる協働のまちづくり

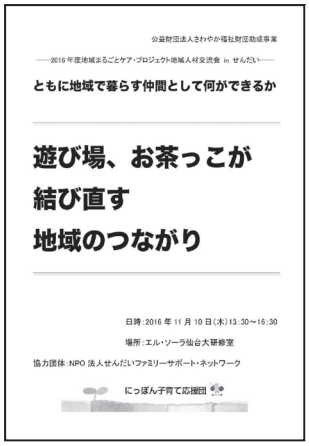
2016 年度のまとめ

2016 年度は、北海道河西郡芽室町、宮城県仙台市、神奈川県藤沢市、愛知県知多市、岡山県勝田郡奈義町、高知県、福岡県北九州市、大分県豊後高田市へのヒアリングと、「ともに地域で暮らす仲間として、何ができるか」を共通テーマに、分野を超えた課題の共有と地域人材の交流を目指し、北海道北見市、宮城県仙台市、愛知県名古屋市、福岡県福岡市で人材交流研修会を開催した。

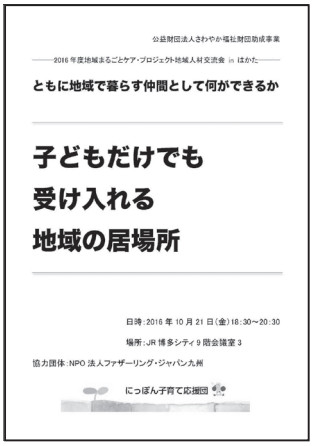
その背景はさまざまであるが、分野を越えた多職種連携による当事者ニーズに合わせた支援体制を進めるところが多く、インフォーマルなケア、相互支援体制による重層的なネットワークの重要性にも着目、地域住民主体の地域づくりが進む自治体・地域ほど、子ども・子育てへの理解も深いように見受けられた。

異なる職種・専門分野・立場の人々の交流をはかるべく企画した地域人材交流研修会は、「子ども食堂」「ダブルケア」「遊び場・たまり場」「多世代共生・交流」という子ども・子育て分野で最もホットな 4 大テーマを地域別に掲げて開催した。テーマに基づく話題提供とワークショップという構成で、テーマは地元協力団体の意向に添う形で決定した。人がそこで安心して暮らせるまちをつくるのは自分たちという意識を、普段は出会うことの少ない立場や職種の人々と共有できた。

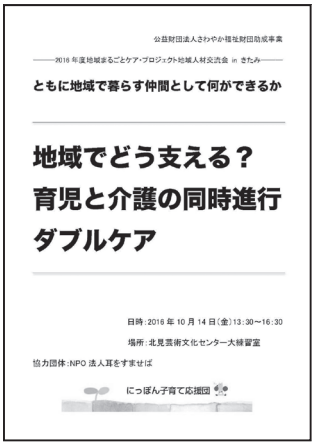
地域人材交流研修会当日配布資料



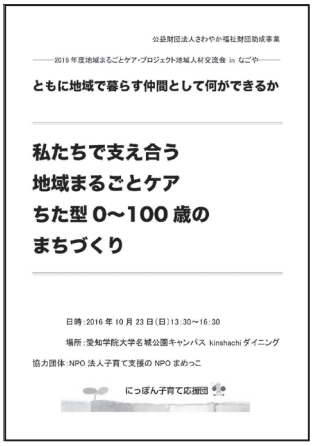
地域人材交流研修会　in　せんだい



地域人材交流研修会　in　はかた



地域人材交流研修会　in　きたみ



地域人材交流研修会　in　なごや

2016 年度のまとめとなる報告会では、地域まるごとケアという言葉の生みの親でもある東近江市永源寺診療所長の花戸貴司さんに、チーム永源寺の多職種連携による取り組みについての基調講演と、ヒアリングなどで出会った、子ども・子育ても地域課題として地域づくりに取り組む方々の実践を紹介した。地域課題に取り組むさまざまな立場の方々がご参加くださり、報告会の議事録をも収録した年度報告書を作成した。

2016 年度　にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

子ども・子育ても、地域の課題です
どうか、手を貸してください
地域の課題は分野を超えて起きている　地域でどう支える？
育児と介護の同時進行＝ダブルケア

地域での子ども・子育て支援が大切な理由
子ども・子育ての現実を知ってください

2016 年度　にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

支え合いのコミュニティがかたちづくる地域まるごとケア
地域まるごとケアの提案を一言で表現すれば
「地縁の再編」である

○さまざまな人を巻き込み重層的なネットワークを推進
その人らしい暮らしを支えるサービス体制の構築を通じた地縁の再編

○子どもを真ん中に据えた、地域コミュニティ
「なんとかしたい！」が形になった「子ども食堂」

○その人の困りごとに寄り添うサポート・プログラムの構築
すべての子どもの発達を支える記録帳の活用

○その人の能力を発揮できる場の提供と工夫　地域に資源は眠っている
発達から就労までをサポート

○人間サイズの規模でつくる協働のまちづくり
地域の課題は地域で解決――地域自主組織の取り組み

○東日本大震災から学ぶ　地縁の再編・再生・新生

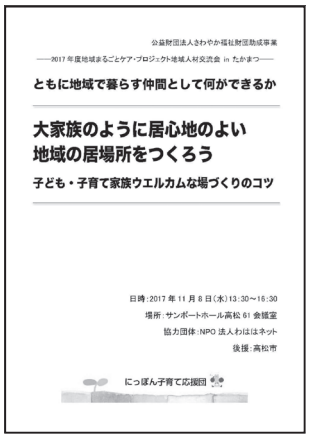
2017 年度のまとめ

2017 年度は北海道夕張市、福島県いわき市、東京都文京区、石川県金沢市、大阪府豊中市、兵庫県明石市、長崎県長崎市、沖縄県島尻郡南風原町でのヒアリングとともに、「ともに地域で暮らす仲間として何ができるか」を共通テーマに分野を超えた地域人材の交流を目指し、秋田県秋田市、東京都清瀬市、兵庫県尼崎市、香川県高松市で地域人材交流研修会を開催した。

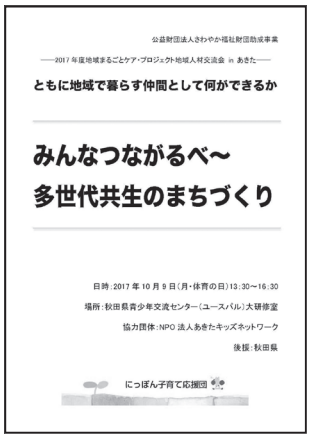
2017 年度のヒアリング調査では、いろいろな意味で我が国の最先端を行っている自治体がそろった。財政破綻から 10 年、財政再建が一大目標ではあるものの、ようやく未来に向けて考えられるようになった夕張市。阪神・淡路大震災被災により、お互いが顔の見える地域づくりが命を守ることに気づき、粛々と進めている豊中市。東日本大震災被災のみならず、原子力発電所の事故という未曾有の重複災害に見舞われ、強制避難区域から自治体ごと避難して来た、当該自治体の住民票を持たない 2 万 4000 名の避難者への支援も抱えるいわき市。貧困や虐待の連鎖を断ち切るべく、要保護児童の放課後や休日の居場所を立ち上げ、学習支援や生活支援を行いながら親への支援を行う南風原町。さらには、子どもを核としたまちづくりに精力的に取り組む明石市、子ども・子育て支援に特化した公益財団法人により、県をあげて子ども・子育て支援に取り組んで来た石川県。多職種連携で家庭の重複した困りごと支援に取り組みながら、小規模多機能自治をも進める長崎市。東京都 23 区の中心に位置し、一旦は人口減少を引き起こしたものの、子育て支援の充実などで人口を回復、区民やさまざまな団体と組んで、新しい福祉のあり方を提案し続ける文京区。

地域人材交流研修会では、多世代共生・地域まるごとを共通のキーワードに、さまざまな分野、立場の人が一堂に会してグループワークを行い、語り合い、知り合うことに意義を感じた参加者が多かった。地域まるごとケアや子ども・子育て支援への理解も深まったようである。

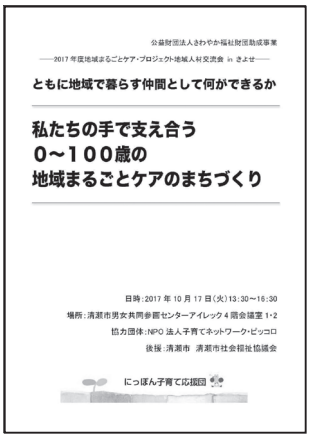
地域人材交流研修会



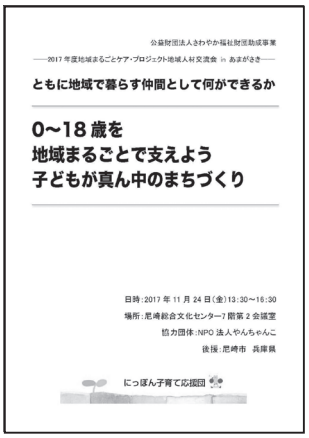
地域人材交流研修会　in　たかまつ



地域人材交流研修会　in　あきた



地域人材交流研修会　in　きよせ



地域人材交流研修会　in　あまがさき

まとめとなる報告会では、地域共生社会の実現に向けて改正された社会福祉法をはじめとする国の動きについて、厚生労働省社会・援護局長の定塚由美子さんにお話しいただくとともに、基調講演として、法改正や具体的な環境整備について協議がなされた「地域共生社会地域力強化検討委員会」で座長を務めた日本福祉大学副学長の原田正樹さんに、「共生社会」実現の前に横たわる課題と、地域住民による「共生文化の共創」の実現に向けて大切にしたいことなどをお話しいただいた。後半は、地域まるごとケアをかたちづくる三要素「行動する市民」「コーディネーター」「多分野多職種連携」を考える現場からの報告と提案とし、三要素をそれぞれ代表するにふさわしいヒアリングなどで出会った 3 地区、3 名の方々から、現状報告と提案をいただき、原田正樹さんからコメントをいただいた。このコーナーでは、それぞれヒアリングに赴いたプロジェクトメンバーがナビゲーターを務めた。

2017 年度　にっぽん子ども・子育て応援団からの問題提起

子ども・子育ても、地域の課題です
どうか、手を貸してください
地域の課題は分野を超えて起きている
地域保健福祉に子ども・子育ての視点を

地域での子ども・子育て支援が大切な理由

子ども・子育ての現実を知ってください

2017 年度　にっぽん子ども・子育て応援団からの提案

支え合いのコミュニティがかたちづくる地域まるごとケア
地域まるごとケアの提案を一言で表現すれば
「地縁の再編」である

○さまざまな人を巻き込み重層的なネットワークを推進
地域の課題は分野を超えて起きている
複合課題を地域まるごとで支える前世代型、多機能型の地域包括ケアシステム
災害時も命を助けることが出来る地域づくり
地域のつながりを丁寧に育てる
○ひとりの子どもも見捨てない、ひとりぼっちにしない、こどもを核としたまちづくり
広がるこども食堂
子どもの将来を生まれ育った環境に影響させないプログラム
ひとりぼっちの子どものいないまち
一人の子どもも見捨てない→まちのみんなですべての子どもを応援するまちづくり
○その人の能力を発揮できる場の提供と工夫　地域に資源は眠っている
地域の全世帯に向けた住民ニーズ調査
地縁団体を巻き込む
多世代共生型の居場所が地域の拠点に
いきいきシニアボランティアポイント事業
○その人の困りごとに寄り添うサポート・プログラムの構築
地域の中を回遊、課題を発見
必要に応じて人やもの、お金がつながるように働きかける CS W
その人や地域のニーズにとことん寄り添うことから生まれる事業
○人間サイズの規模でつくる協働のまちづくり
地域の課題は地域で解決――地域自主組織の取り組み

○地域まるごとケア・プロジェクト 3 年間の調査からのまとめ

まとめとして、初年度に一連の調査から引き出された、課題と提案につながるキーワードをここで振り返る。3 年間で状況に大きな変化はないが、課題解決に向けた動きが加速化している。

課　題

地域福祉、地域包括に子ども・子育て支援が入っていない

全世代型、多機関型の地域包括ケアシステム構築を進める自治体が増えており、地域福祉計画にも子ども・子育ての視点が必要とされる時代がやってきた。しかし、まだまだ現場では抜け落ちている。これからが正念場と言える。

子育て支援にはお金がつかない

子ども・子育て支援新制度の地域子育て支援事業により、自治体に認定してもらえれば、補助や委託という形で財源を確保する体制は出来ている。が、制度に収まり切らない事業にはやはりお金がつかず、財源確保に疲弊していく団体も少なくない。

旧住民、新住民、仮住民、転勤族

地域の活動団体や行政でも課題としているところは多い。地縁団体を巻き込んだ居場所づくりや、子ども食堂のような取り組みにより、住民同士の自然な交流が生まれることで、隔たりを解く可能性がある。時間はかかるが丁寧な声がけによる関係づくりも大切。

地縁づくり、組織化の難しさ

大災害に見舞われたときに地縁に助けられた人は多い。いざというときに地縁が身を助けることを粘り強く伝えていくことも必要。コミュニティ・ソーシャル・ワーカーのような地域を回遊するコーディネーターの存在が、未来を変えていけるかもしれない。

人口規模による難しさ（人口が多過ぎても少な過ぎても困難）

複数の自治体の連携による基盤整備や、多世代共生型拠点を置き込み分野横断的な取り組みを進めるなど、人口減少地域ほど、危機感が強く、創意工夫をこらしている。行政だけをあてにせず、住民主体の取り組みが必要。よい事例はたくさんあるが実情に即していないと実現は難しい。

企業の支援が見えない

企業のほうでも地域への入り方が分からなかったり、足元での課題が見えていなかったりする。行政の産業振興部局や中間支援団体など、仲を取り持つコーディネーターの存在が不可欠。運輸関係やコンビニに地域の見守りをお願いするなど、業種に見合った社会貢献方法を考えることも大切。

提案につながるキーワード

生涯現役＝全員参加（赤ちゃんから高齢者まで）の地域づくり

多世代共生型の居場所での自然な交流。シニアボランティアポイント制度の対象に子育て支援施設などでのボランティアも加える。学習支援の担い手も学生だけでなく、高齢者も多く参加している。役割が出来ると誰でも元気が出る。発達支援から就労支援までの取り組みも全員参加のポイント。

多世代が集う居場所を中心としたコミュニティ形成

多世代共生型の居場所が地域に置き込まれ、そこを拠点としてコミュニティが形成されている自治体が増えている。仙台市、藤沢市、名張市、豊中市、明石市、奈義町、雲南市、高松市、高知県、北九州市、長崎市。

地域に張り巡らされた重層的なネットワーク

ひとり一人がネットワークを持っている。人と人とがつながれば、ネットワークは重層的に広がっていく。利用者支援専門員や生活支援コーディネーターのように、地域課題を発掘、地域資源の掘り起こしで構築した、ケースごとのサポートネットワークは、次にも活かせる。

誰もが納得、参加していると感じられる一体感の醸成

祭りなどの地域イベントや拠点運営に誰もが参加できるようになるとよい。一緒に取り組むことで一体感が生まれる。誰もが参加できる地区ごとの協議体、円卓会議を定期的に開催するのもよい。雲南市や名張市、地域福祉サポートちたの円卓会議。

地域で“○○をする”合意形成

地縁団体の協力を得て住民調査を行い、分析、地域の課題を発見したのが明石市藤江小学校区の取り組み。回収率 100%だった。奈義町での合併の是非を問う住民投票を行ったときには、全戸を訪問、合併のメリットとデメリットを丁寧に説明した結果、圧倒的多数で合併しない選択がなされた。

立ち上げ時と継続、時機に合ったキーパーソンの存在
行政、NPO、企業、地縁団体などをつなぐコーディネーター

コミュニティ・ソーシャル・ワーカーは、必要に応じて、住民の組織化、居場所づくり、個別支援を通じた地域づくり、緩やかな見守りなど、いずれも人や機関などの地域資源をつなげて新たな資源を創り上げる。まさに地域を回遊するコーディネーターだ。困りごとを抱える人、ケースを発掘、本人の意思を尊重しつつ、必要なプログラムとつなげ、地域での自立生活が行えるよう社会関係づくりを行うとともに、本人のエンパワメントを行う。決してどこかに丸投げせず、伴走する。

すでに地区別に配置している自治体もある。今年度は豊中市の勝部麗子さん、文京区の浦田愛さんにお会いしお話をお聴きした。ソーシャル・ワークとしてコーディネートを行う人材にはスクール・ソーシャル・ワーカーや生活支援コーディネーター、利用者支援相談員などもある。

震災子ども支援ネットワークみやぎのように、有効な支援活動を提案し、それを担うにふさわしい団体も紹介するという、行政と団体とをつなぐ中間支援を行う団体も同じだ。北見市の北見 NPO サポートセンター、知多市の地域福祉サポートちたも中間支援を主たる活動としている NPO 法人である。

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト

地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催報告会

見えてきた!
地域ぐるみで、みんなまるごとケアのヒント
市民発　ごちゃまぜ　真剣　まるごとケア

日時：2020 年 2 月 8 日（土）13：30 ～ 16：30

場所：日比谷図書文化館コンベンションホール

2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト
地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催報告会

見えてきた！
地域ぐるみで、みんなまるごとケアのヒント
市民発　ごちゃまぜ　真剣　まるごとケア

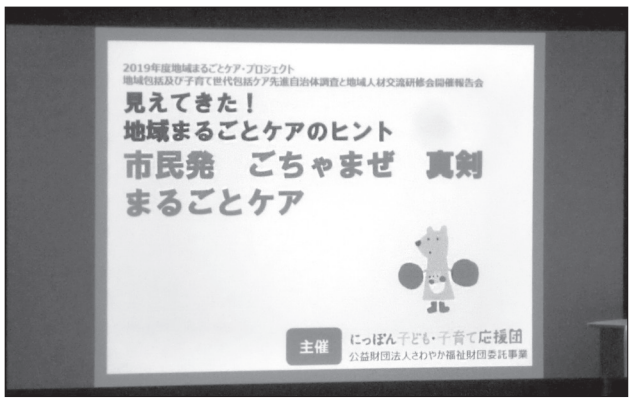
平成から令和へと元号が変わった 2019 年度の「地域まるごとケア・プロジェクト地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と地域人材交流会開催報告会」を、令和 2 年 2 月 8 日（土）、東京・日比谷公園にある日比谷図書文化館コンベンションセンターで開催した。

2015 年度からスタートした地域まるごとケア・プロジェクトの 5 年目。これまでにヒアリング、地域人材交流研修会で関わらせていただいた自治体は 52 自治体となった。5 年間の調査から見えてきた、「地域ぐるみで、みんなまるごとケア」のヒントを市民発・ごちゃまぜ・真剣・まるごとケアの 4 つのキーワードに込めてご報告しようと企画した。

基調講演では、地域子育て支援拠点を展開、関わるのがほぼ女性ということに気づき、団塊世代の男性に向けて「現役時代の名刺で勝負！」と、現役時代に培った知見を子育て支援やまちづくりに生かしてもらえないかと呼びかけ、子育て・まちづくり支援プロデューサー養成講座を経て、地域子育て支援拠点を中心に地域で活躍する男性を増やしている恵泉女学園大学学長の大日向雅美さんに、その経緯などをお話しいただいた。

後半は、2019 年度にヒアリングや地域人材交流研修会開催で出会った市民活動団体 3 者からの報告と提言。児童虐待に関する重篤な事件発生を踏まえて、札幌市内で子ども・子育て支援に関わる官民の 12 の事業担当者を集め、直接行政担当者と支援関係者を交流させる地域人材交流研修会を企画した NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事の山田智子さん。初めて「移動支援」をテーマに大垣市で開催した地域人材交流研修会に登壇、移動支援は「家族機能の社会化」という視点から考えてはどうかと提案した、特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長の杉浦陽之助さん。今回のキーワードのひとつにもなった「ごちゃまぜ」の居場所のよさや役割について、富山県下でのヒアリングに協力してくださった一般社団法人 Ponte とやま副理事長の加藤愛理子さん。それぞれに関わった地域まるごとケア・プロジェクトのメンバー、山田麗子、青木八重子、當間紀子がナビゲーターを務め、まとめのコメントを大日向雅美さんから頂戴した。

参加者アンケートからは、大日向さん、加藤さんの取り組みへの共感が多く寄せられたほか、「ここにくるたびにパワーをもらえる」、昨年度の報告会でのキーワード TTP（とことんパクる）を覚えていた方など、リピーターもいらっしゃることが確認された。



プログラム

開会挨拶　公益財団法人さわやか福祉財団理事長　清水肇子

基調講演　「シニア世代男性が子ども・子育て支援と出会うとき」
　　恵泉女学園大学学長　大日向雅美さん

休　憩

報告と提言　「市民発　ごちゃまぜ　真剣　まるごとケア」

報告者
○ともに地域で暮らす仲間として何ができるか
　　地域子育て支援拠点発“地域連携”で親子を支える“報告
　NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事　山田智子さん

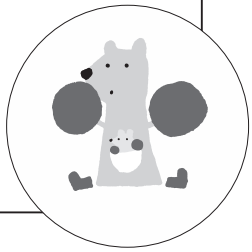
○「おとなも子どももＯＫ食堂」の現場から
　特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長　杉浦陽之助さん

○誰も排除しない　されない　止まり木のようなカフェ
　一般社団法人 Ponte とやま副理事長　加藤愛理子さん

コメンテーター
　恵泉女学園大学学長　大日向雅美さん

ナビゲーター
　にっぽん子ども・子育て応援団地域まるごとケア・プロジェクトメンバー
　青木八重子
　山田麗子
　當間紀子

閉会挨拶　にっぽん子ども・子育て応援団企画委員　前三鷹市長　清原慶子



2019 年度の子育て世代包括及び地域包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催のご報告を申し上げます。

2015 年に公益財団法人さわやか福祉財団から、地域包括ケアにおける地域連携の可能性を探り、既存の制度にとらわれない地域福祉・地域づくりに向けた提案・周知啓発を子ども・子育て分野から行う事業を委託され、2017 年度で第 1 期を終了いたしました。さらに 2020 年度までの 3 年間、事業継続を受託、地域まるごとケア・プロジェクトを推し進めていくことになりました。

「もっと子育てしやすい社会に！」と 2009 年に立ち上がったにっぽん子ども・子育て応援団が、なぜ高齢者支援・介護保険行政にもヒアリングを行うのか。初年度はそこから説明を行う必要がありました。しかし、5 年の月日の流れの中で、子ども・子育ても当たり前のように地域保健福祉計画の対象として考えられるようになりました。

その一方で重篤な児童虐待事件が相次ぎ、児童福祉法および児童虐待防止法の改正にもつながりました。痛ましい虐待をなくし親子を救うため、地域で孤立しがちな乳幼児親子を、それぞれのニーズに合わせて取りこぼしなく、親子の生活圏内で包括的に継続的支援を行い、虐待の発生を防ぐ「予防的支援」ができる体制づくりが喫緊の課題となっています。

2018 年に続いて 2019 年もこれまでにない天災続きでした。台風 15 号と 19 号、さらに続いた豪雨で亡くなられた方々、被災なさった方々に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

ヒアリングと地域人材交流研修会でお邪魔した自治体は、累積で 52 となりました。どの自治体にも「ともに同じ地域で暮らす仲間として何ができるか」と、アクションを起こし、地域の拠点や取り組みを展開、行政を巻き込んで、お互いの腕も腹も知り合いながら信頼を積み重ねて行く人々の姿がありました。一見垣根のない、ごちゃまぜの緩やかな居場所。緩やかだからこそ、困りごとが引き寄せられての真剣勝負が常に潜みます。見立てのプロフェッショナルが必要なところにつなぐ、実のあるネットワークが各地で展開されている様子には頼もしささえ感じられます。

地域ぐるみで支え合う子育て環境づくり、地域まるごとケアの実現を加速させる、市民発の地域の取り組みが各地で始まっています。このプロジェクトが、発展の一助になれれば幸甚です。

にっぽん子ども・子育て応援団では、2012 年度からひとつの目標を掲げて取り組んでいます。家族まるごと、地域全体で支え合うことを目指す今回の調査が、応援団の目標達成に向けた、重要なテーマと重なる理由として、ここに掲げておきます。

にっぽん子ども・子育て応援団の目標

すべての子どもたちが、家族の愛情に育まれ、
また、子ども同士の積極的な関わり合いの中で
そして、地域や社会の多くのおとなたちの慈しみの中で、
心豊かに成長できる環境を保障すること

※「子どもは家族が育てるのか、社会が育てるのか」というとらえ方ではなく、子どもを真ん中において、子どもの成長にとって不可欠な、家族、子ども同士の関わり、地域や社会の多くの人との関わり、それぞれが大切な役割を果たせるよう支えるという考え方に立つことが重要です。

今回、自治体の行政担当者や NPO 市民活動団体のみなさまが、その調査趣旨をご理解くださり、ヒアリング先の紹介からヒアリング日程の調整までを、地域人材交流研修会の会場やテーマ選定から当日の運営までを担ってくださったこと、地域人材交流会に多くの方が参加してくださり、闊達な意見交換をしてくださったことに、心から感謝申し上げます。

2020 年 2 月
にっぽん子ども・子育て応援団

（2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催報告書より）

調査概要

地域全体の福祉を考えたとき、同じ地域で暮らすもの同士の支え合いが自然に行われているのが望ましく、実際に人々の暮らしを支える資源はシームレスである。高齢者対策と子ども・子育て支援対策、障がい児・者対策、生活困窮者対策など、公的制度によってそれぞれの支援メニューは分断されているが、困りごとを抱える人や家庭に求められる支援もまた、シームレスである。地域での暮らしを考えたとき、制度によって分断されたこれらを、困りごとを抱える人や家庭の実情に合わせてフレキシブルに利用できることが求められているのではないだろうか。

介護保険制度から生まれた「地域包括ケア」という考え方は、介護の世界に留まらず、地域で暮らすすべての人々に広げられるべきではないか。制度によって分断された各種支援事業を、地域で暮らす人々をまるごと包み込むように利用していけるようになることこそ、地域での暮らしの実態にふさわしい仕組みになるのではないだろうか。

地域包括ケアを全世代に向けてとらえ、実施していくことを「地域まるごとケア」と名付け、これを実現させていくために、子ども•子育て支援における利用者支援事業などの実態を把握、目指す方向性を探りながら、生活支援コーディネーターや生活困窮支援コーディネーターなど、地域での暮らしを支える他の専門職との連携についても、提案していきたい。

第 2 期地域まるごとケア・プロジェクトの概要

第 1 期プロジェクトを経て、高齢および子育てをつなぐ形で地域づくりや地域福祉を進める自治体も見えてきたところから、自治体へのヒアリングと地域人材交流研修会の開催を行い、地域保健福祉およびまちづくりに子ども・子育ての視点を盛り込み子ども・子育てにも目配りをした実践を積み上げていくこと、その周知と啓発を進めていきたい。

当初予定では「子育て支援コーディネーターと生活支援コーディネーターなどの連携に着手し始めた自治体を、地域まるごとケア先進自治体として調査」の予定であったが、利用者支援事業・特定型を進める自治体が多く、地域連携を生活支援コーディネーターとともに行なえる環境にある自治体は数少ない。これまでと同様、地域包括および子育て世代包括ケアの先進自治体であるとともに、厚生労働省の「我が事・丸ごと」地域共生社会推進本部が進めようとしている地域福祉計画策定と推進の努力義務化に伴う形で、地域自治による地域福祉計画の推進を図ろうとしている自治体をピックアップ、多職種多分野の地域連携の実際を探っていく。

地域連携による地域まるごとケアの周知と啓発のため、地域福祉人材の交流をも兼ねた勉強会を複数回、場所を変えて開催。人が集まりやすくカウンターパートがいる自治体を選ぶ。

・第 2 期プロジェクトメンバー：にっぽん子ども・子育て応援団運営委員
高祖常子（認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）
鶴見梨絵子・千葉梢（日本労働組合総連合会生活福祉局）
山田麗子（遊育編集長）
にっぽん子ども・子育て応援団事務局
青木八重子、當間紀子
アドバイザー：牧野カツコ（にっぽん子ども・子育て応援団運営委員　NPO 法人高齢社会をよくする女性の会）
アシスタント：葦澤美也子、新真依子、小山麗子、堀田康子

＊ 地域まるごとケア：東近江市永源寺診療所所長の花戸貴司さんが、三方よし研究会が目指すものとして掲げているのが「地域まるごとケア」。「年老いても、認知症になっても、独り暮らしであっても安心して生活ができる地域」を作るには、「我々専門職が提供する「地域包括ケア」と、非専門職が支えあっている「互助」を地域の中でつなぎあわせること」、さらに「これらのスキマをうまく埋める「地域まるごとケア」ができれば安心して生活できる地域になると信じている」。にっぽん子ども・子育て応援団では、「地域包括ケア」を赤ちゃんから高齢者まで、地域で暮らすすべての人々に向けた取り組みとしようという目標を掲げていることから、花戸さんの許可を得て、今回の 3 年間の取り組みで目指したい姿として、「地域まるごとケア」を使うこととした。

開会挨拶

公益財団法人さわやか福祉財団理事長
清水肇子

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきましたさわやか福祉財団の清水肇子でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、子ども・子育て分野の取り組みにご活躍されているみなさん、地域づくりに本当に日ごろから力を尽くしてくださっているみなさんにお集まりいただいております。北海道から九州までご参加いただいているということで、週末の貴重なお時間本当にありがとうございます。冒頭、僭越ですけれどもちょっとお時間を頂戴しましてお話をさせていただきます。

さわやか福祉財団は、およそ 30 年になりますけれども、子どもから高齢者まで、もともと赤ちゃんも含めまして、誰もが、ふれあい助け合いながらあたたかい地域をつくろうよと、そんな地域の仕組みづくりをみなさんと一緒に進めて参っております。にっぽん子ども・子育て応援団さん、当時はにっぽん子育て応援団さんですけれども、一緒にこのプロジェクトをやらせていただいて 5 年が経ちました。あっという間の 5 年だなというのが実感です。

みなさん、いろいろなご活動を取り組みされてきて、5 年前をどんなふうに思いますか？つい、この前のような気もします。通ってきたところはあっという間に感じ、先に向かうのは課題が多いな、長いなと思うところもあろうかと思いますけれども、でも、一つ一つを思ってみますと、着実に時流というのは進んでいるのだろうと思います。

当時、5 年前、私どもがご一緒させていただいたときが 2015 年です。ご承知のとおり、一つは介護保険で、地域づくりに大きな動きがございました。要支援 1・2 に該当されるみなさんの基本的な生活支援、困りごとは、地域でいろいろな形で支える方向にいきましょうと。今それについて、さらにどのような仕組みにすべきかという議論が、いろいろなされているところです。無理な押しつけはもちろん論外ですが、やはり多様性・いきがい・お一人お一人の参加ということを考えますと、地域の受け皿をしっかりつくっていくということは、まさに時代の流れだと思います。そこのポイントが、本日のまさにタイトルになっている「ごちゃまぜ」そして「共生」です。そして、この「共生」という理念も少し前に比べますと、相当私たちの生活の中に根付いてきたように思います。

残念ながら、その間痛ましい事件ですとか、事故、虐待などもありました。そういったものも、私どもはしっかりと自分ごととしてとらえていきながら、地域として、一市民、住民として何ができるのかということに、向き合っていく必要があるのだと思います。

それを考えますと、もう一つ、2015 年は、ご承知の SDGs がニューヨークの国連でアジェンダが採択された年でもあります。まさしく、この 2015 年というところから 15 年先、2030 年に向けて、今それぞれに全国、国を含めまして、誰一人取り残さないという目標を持って取り組まれている。自分ごとで " 支え・支えられ " という、一方向ではない、そういう主体的な関わり方というのが、実はこの SDGs でも基本の考え方です。

ちょっと振り返ってみますと、2000 年、その 15 年前ですが、MDGs というのがあったご記憶があるでしょうか。M はミレニアム、2000 のミレニアムですね。これはご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、思い起こしますと、もちろん広く発展途上国へのいろいろなご支援もあったんですけれども、どうも実はあまり評判が良くなかったところがありました。何かというと、これは「先進国の先進国による途上国のみなさんへの支援」ということが一つ課題としてありました。進んだ部分、救われた部分、ご支援で可能になった部分もいろいろあるけれども、でも、自分たちだってこういう考えがある、こういうふうに進めたいんだ、そんないろいろな思いがありました。そして、MDGs で課題があまり解決できていないところを次の新しい前進として、この SDGs というものができてきたと思います。

なぜこの話をするかと言うと、日ごろ私が地域でいろいろ取り組んでいますときに、企業さんは事業や投資にも関わってきますから、非常に SDGs に関心をもってくださいますが、それと地域づくり、地域の支え合い・助け合いというものが、どうもなかなか一致しない方々もいらっしゃる。でも、申しましたように向かう方向はもちろん一緒で、それぞれの地域がどういう目標をもってそれに取り組むかということが本当に大事だと思います。

ただ、同じように地域づくりの観点から、もう一つ勝手ながら思いますと、SDGs は 2030 年がゴールとなっています。また再度、次の 10 年、15 年の計画が立っていくのでしょうが、住民の地域づくりというのは、5 年、10 年で完成するものではありません。

また、10 年、20 年後、地域がどうなっているのかというのを今緻密に考えて、その対策を立てても、10 年後に本当にそれが合っているのかは疑問です。10 年前、こんなにスマホやＡＩが進んでいるというのは、専門家ですら想像できていなかった。そう考えると、私どもの住民・市民の地域づくり、お互いさま・助け合いによる活動の一番のポイントは、やはり先ほど申しました、自分たちが主体的に参加していく、自分ごととして考えるという、ここの姿勢を一番の基本に、しっかりと地域の仕組みをつくっていく。住民・市民の活動ですから、押しつけも強制も無理ですし、10 年、20 年かかるんですけれども、だからこそ自由ですし、だからこそ工夫ができる。そういった、みんなで関わろうよ、みんなで叶えていこうよという思いを大切に、助け合いの仕組みを地域に広げていくこと、それは、私どもが今目指したいところですし、これからますます必要になってくるところだと思います。まさしく、共生・ごちゃまぜ・多様性というところが、これからも大きな柱になってまいります。

にっぽん子ども・子育て応援団さんの取り組みは、委託という形ではさせてもらっていますが、同じ思いを一つにする仲間同士です。みなさんもご一緒の連携する仲間のみなさんだというふうに、改めて思っております。

ちょうど昨年の 9 月に大阪で、同じような思いを持った人、みんなで参加しましょう、集まりましょう、情報を交換しましょうというサミットをやらせていただきました。無謀にも 54 分科会を設けたんですけれども、その中で子どもの分野、まさに子育て支援についての分科会を、にっぽん子ども・子育て応援団さんにお願いしました。一番に定員いっぱいになりました。部屋の限りがあり、150 名くらいまでなんですけど、それ以上受け付けていたらさらに増えていたことと思います。多くのみなさんが関心を持ち、どんどんお申し込みがありました。

子どもに関連するテーマは、何かできるのではないか、一緒にもっともっと子育て支援、環境を一緒に考えていけたらいいな、そんな高齢者のみなさんが本当に多くいらっしゃいます。もちろん子育て世代の方々もいらっしゃいます。いろいろな観点から幅広く取り組みを進めていけるように、そのためにはまさしく情報が大事ですし、その情報を糧にした、つながる力とつなげる力がまさにキーだと思っています。孤立というのが非常に問題になっておりますけれども、地域がみんなでもっともっとお互いさまであたたかくつながり合うことで、いろいろなセーフティネットになります。大変だよというＳＯＳも気軽に出せるような、そんな地域の暮らし、生活を支えるところをつくっていきたいなと心から願っております。

このあとの基調講演とパネルディスカッション、素晴らしいお話が続きます。それぞれのみなさんのお取り組み、お考えを踏まえまして、ぜひ一緒にみんなであたたかい地域をつくっていきましょう。どうもご清聴ありがとうございました。

基調講演

シニア世代が子育て支援と出会うとき
～新たな社会価値の創造に向けて～

恵泉女学園大学学長
NPO 法人あい・ぽーとステーション代表
大日向雅美さん

プロフィール
恵泉女学園大学学長
専門は発達心理学。お茶の水女子大学大学院修士課程修了・東京都立大学大学院博士課程満期退学。学術博士。
1970 年代初めのコインロッカー・ベビー事件を契機に、以来、40 年余母親の育児ストレスや育児不安を研究し、地域のＮＰＯ活動にも取り組んでいる。
恵泉女学園大学には 1989 年から勤務、2016 年 4 月から現職。

主な社会的活動
NPO 法人あい・ぽーとステーション代表理事
子育てひろば「あい・ぽーと」施設長

内閣府：社会保障制度改革推進会議委員 / 子ども・子育て会議委員
厚生労働省：（元）社会保障審議会委員・同児童部会会長
ＮＨＫ（元）中央放送番組審議会委員長、住友生命保険相互会社社外取締役を歴任
読売新聞：人生案内回答者

主な著書
単著：『子育てと出会うとき』（ＮＨＫ出版）/『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』（岩波書店）/『子育てがつらくなったとき読む本』（PHP 研究所）/『人生案内　孫は来てよし　帰ってよし』（東京堂）/『増補　母性愛神話の罠』（日本評論社）/『おひさまのようなママでいて』（幻冬社）/『「人生案内」にみる女性の生き方　～母娘関係』ほか /『新装　母性の研究』（日本評論社）
監修：（講談社）『悩めるママに贈る心のヒント』（ＮＨＫ出版）（監修）ほか。
主な受賞歴
エイボン教育賞　（2003 年）
男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰（2016 年）
第 70 回日本放送協会　放送文化賞　（2018 年）

シニア世代が子ども・子育て支援と出会うとき～新たな社会的価値の創造に向けて～

大日向　雅美
恵泉女学園大学学長
NPO 法人あい・ぽーとステーション代表

1　はじめに

1990 年の 1.57 ショックから四半世紀をかけて成立した子ども・子育て支援新制度も第 I 期の折り返し地点に。すべての子どもに良質な発達を社会全体で保障するという理念が果たしてどこまで実現されているのか？　限られた財源の中で優先すべき課題は？財源を国や自治体に頼るのではない主体的な取り組みを地域でどのように進めていくべきか？　子どもと子育て支援をめぐって、なお解決すべき課題が山積しています。

本日は私が 2003 年から実施している子育て・家族支援の NPO 活動の中から、シニア世代、特に団塊世代男性たちの活動の一端をご紹介し、老若男女共同参画で地域の育児力向上とシニア世代の社会参画支援の取組みから芽生えてくる新たな価値の可能性についてお話しさせていただきます。

キーワード

- **老若男女共同参画で新たな地域子育て文化創りと生きがい創り**
- **団塊・シニア世代男性が“現役時代の名刺で勝負”**
  （子育てまちづくり支援プロデューサー）
- **子育て支援とシニア世代支援から新たな社会モード転換の可能性**

2　今、改めて子ども・子育て支援新制度（2015 年スタート）の理念を

近年の子ども・子育てをめぐる大きな変化と子育て支援の必要性を背景として

子どもの育ちと子育て支援をめぐる理念の画期的な展開

3　子育て支援の一方で、子育てに戸惑う親たち

親の子育てを見つめる周囲の眼差しもまた親を追い詰める

愚直なまでに、親と子の生活を見つめ、声を聴くこと

傾聴から見えてくる昨今の子育ての難しさ

4　子育て支援に確かな哲学と新たな地域の絆を（VTR 参照）

NPO 法人あい・ぽーとステーションの実践

行政＆市民＆企業との協働で新たな地域創りに向けた社会実験

⇒オムソーリー（支え・支えられてお互いさま）の醸成

子育て・家族支援者養成　⇒老若男女共同参画で地域の育児力向上

とりわけシニア男性の地域貢献⇒“現役時代の名刺で勝負”

（子育て・まちづくり支援プロデューサー：愛称まちプロ）

5　子育て支援に潜む新たな地域創造の可能性

シニア世代の参画で新たな価値の萌芽を実感

⇒競争原理から分かち合いへ

ニーズは“掴む”ものから“創る”ものへ

☆トピックス：NPO 法人あい・ぽーとステーションの実践

～子ども・子育て支援新制度の理念の先がけとしての地域・子育て支援の実践～

（概要）

・地域に根ざした子育て・家族支援の拠点となることを目指して 2003 年９月・港区に「子育てひろばあい・ぽーと青山」を、2016 年 10 月・千代田区に「子育てひろばあい・ぽーと麹町」を開設

・元区立幼稚園＆元区立保育園の跡地・施設を活用し、ＮＰＯと行政（港区・千代田区）との協働による運営

・老若男女共同参画で地域の育児力の回復向上と女性の社会参画支援に挑戦

（活動内容）

・ひろば　：親子・祖父母・地域の人等が楽しく集い、子育ての苦楽を分かち合う

・一時保育：預かる理由を問わない。母親の再就職活動やリフレッシュを積極的に支援

“親のゆとりが子どもの幸せにつながる”という考えを基本理念に、
親の多様なライフスタイルや就労形態に対応する支援を目的としつつ、
子どもの幸せを第一にした丁寧な保育をめざす。

・大学（恵泉女学園大学）との協働で、親子が楽しむ有機園芸（キッズ交流ガーデン）を。
企業（住友生命保険相互会社）との協働で、団塊世代男性の地域参画支援を実践

・子育て中も豊かな学びの機会を：

各種講座･図書室の整備
女性の生涯を支援する「生涯就業力講座」を恵泉女学園大学と協働で実践

・地域の子育て・家族支援に従事する人材の養成：「子育て・家族支援者養成講座」

NPO 法人と基礎自治体・企業の協働で、地域の子育て支援に活躍する人材の養成に
2004 年度から実践。国の子育て支援員研修の先がけとなる。
港区・千代田区・浦安市・高浜市・戸田市で実践

〈目的〉子育て支援者の支援力の向上
親と子を支援できる人と場所を地域にたくさん確保
女性の社会参加支援の一つのステップに
老若男女共同参画社会づくり
講師陣は乳幼児教育保育に携わる一線の専門家が担当
行政との密接な連携のもとに運営
認定者へのバックアップ体制（有償活動の保障と認定後の知識技術の維持向上を目指したバックアップ講座の実施）の整備

参考：http://www.ai-port.jp

☆社会保障と子ども・子育て支援のポイント

・「社会保障の充実は、社会の活力の基盤。
社会保障はいずれの世代にとっても負担ではなく、今の困難を分かち合い、未来の社会に協力し合うためにあるという哲学を広く共有することが大切。

・社会保障を世代間対立にしてはならない

・子育てのつらさ・不安等に悩み苦しむ親と子を支援していくことが、社会保障の役割であり、「社会の成熟度」をはかる指標

報告と提言

市民発　ごちゃまぜ 真剣　まるごとケア

地域まるごとケア・プロジェクトは 2015 年度にスタート、これまでに 33 自治体にヒアリング、19 自治体で地域人材交流研修会を開催してまいりました。どの自治体でも、発言し活動する市民と、市民の声に耳を傾け、市民に寄り添う施策を展開しようと努める行政マン、さまざまな分野を繋げるコーディネーターや市民活動団体の姿がありました。

2019 年度に地域人材交流研修会やヒアリングでお会いした 3 人の方に、これからご登壇いただきます。

共通するキーワードは、市民発、ごちゃまぜ、真剣、まるごとケアです。

報告者

NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事　山田智子さん
特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長　杉浦陽之助さん
一般社団法人 Ponte とやま副理事長　加藤愛理子さん

コメンテーター

恵泉女学園大学学長　大日向雅美さん

ナビゲーター

にっぽん子ども・子育て応援団 地域まるごとケア・プロジェクトメンバー
山田麗子
青木八重子
當間紀子

プロフィール

山田智子（やまだ ともこ）
NPO法人子育て応援かざぐるま代表理事
NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事

幼稚園教諭 6 年目に長男を出産して産休 6 週間後に復職し、年度末に園児と一緒に卒園。退職後に感じた社会から隔絶されたような一抹の寂しさが原点となり、1993 年、長女の幼稚園入園を機にかざぐるまに入会。1995 年より代表を務め、2005 年 NPO 法人化に伴い代表理事となる。かざぐるまの訪問保育、産前産後サポートを通して、地域に点在し孤独に子育てする親子が繋がる場が必要と実感して 2002 年からひろばを実施。2005 年より、母校である札幌大谷大学短期大学部子育て支援センター「んぐまーま」の立ち上げに協力し、つどいの広場受託。2009 年に中央区円山に自前で「子育て拠点てんてん」を開設し、2011 年 10 月より札幌市地域子育て支援拠点事業ひろば型の指定を受ける。「てんてん」では、ひろばの他、利用者のニーズから自主事業預かり保育や 2 才児の森のようちえん「トコトコくらぶ」を行う。全道の支援者向けのスキルアップ連続講座等も手掛ける。かざぐるまは任意団体より 33 周年となり、いつの間にか孫 4 人（4 月に 5 人目誕生）。
北海道子どもの未来づくり審議会委員、子ども・子育て支援部会委員。

杉浦陽之助（すぎうら ようのすけ）
特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長

2011 年 3 月岐阜市で法人設立。
生きづらさを抱えた若者を中心とした市民の孤立を解消することを目的とした活動を様々に展開。
その一環「おとなも子どもも OK 食堂」は、地域まるごと支援の可能性を感じさせ、高評価を得ている。
2016 年から民家を活用した学習支援、子ども食堂と共に駄菓子屋を運営。
（岐阜市地域福祉推進委員、岐阜市市民活動アドバイザー）

加藤愛理子（かとう えりこ）
一般社団法人 Ponte とやま副理事長

1955 年生まれ。大学卒業後盲学校教員を経て、1994 年から 20 年間富山ＹＭＣＡフリースクール講師。2014 年富山県砺波市に移住し、小さな家とカフェ（みやの森カフェ）を建てる。当初ケアラーズカフェとしてスタートしたが、年齢も状況もさまざまな人が集まってきたので、ごちゃまぜカフェに方向転換をした。昨年「庭に小さなカフェを作ったら､みんなの居場所になった（南雲明彦･みやの森カフェ共著）」を出版。引っ越し歴 19 回。

大日向雅美（おおひなた まさみ）
恵泉女学園大学学長

104 ページ参照

青木八重子（あおき やえこ）
にっぽん子ども・子育て応援団事務局

山田麗子（やまだ れいこ）
にっぽん子ども・子育て応援団運営委員

當間紀子（とうま のりこ）
にっぽん子ども・子育て応援団事務局

○ともに地域で暮らす仲間として何ができるか
地域子育て支援拠点発“地域連携”で親子を支える　報告

NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事
山田智子さん

山田（麗）　札幌では地域人材交流研修会を昨年の 12 月 22 日に開催しました。札幌で痛ましい虐待事件があり、阻止できなかったことに無力感を感じ、地域で何ができるかと問題意識を持たれた地域子育て支援関係者が集まって企画しました。当日、雪交じりの中、地域の子育て団体の連携を深めるということで、地域子育て支援拠点や利用者支援など、12 事業のブースを設け、各ブースで専門機関と地域や子育て支援関係者が屋台方式で交流を深めました。また事業の運営に地域の子育て支援団体が携わりネットワークが広がるなど、二重三重に新しい事業となりました。詳しい内容については山田智子さんからどうぞ。

山田（智）　札幌から来ました、「子育て応援かざぐるま」の山田智子です。「子育てひろば全国連絡協議会」の理事もしています。札幌は雪が少ないとニュースで報道されていましたが、雪まつりが始まる今週からドカ雪となりました。昨日から膝が隠れるくらいの積雪で、2 時間ほど雪かきをしないと外に出られない状況でした。今朝は 5 時半に家を出て、11 時半に会場に着きました。

北海道の地図をご覧ください。日本の国土の 22%を、ひとつの都道府県である北海道が占めています。それほど広いので、札幌で研修会を開催しても前泊しないと参加できない地域が多々あり、隣町との距離が遠いため道内のネットワークを作る難しさを感じます。

道庁所在地である札幌市には、北海道の人口の 3 分の 1 以上、37%がひとつのまちに一極集中しています。この元旦に市の人口は 197 万人を超えましたが、200 万人に届かないうちに減少し始めると新聞で報道されていました。

私が所属する「子育て応援かざぐるま」は 1986 年に設立され、33 周年になりました。全国でも 5 本の指に入る老舗の団体と言われています。当初は母親の社会活動の際の集団託児からスタートし、1990 年代後半に各家庭に出向く訪問保育を行なううちに、子育て環境の変化や子育てをしている人の閉塞感や負担感、孤立感を実感して学び直しを行ない、必要と思われる事業を行なって今に至ります。現在は、札幌市中央区の円山で「子育て拠点てんてん」を開設し、週 3 回の地域子育て支援拠点事業、自主事業での預かり保育と 2 歳児の森のようちえんを行なっています。また、2005 年から札幌大谷大学短期大学部保育科と連携して子育て支援センターを運営し、訪問保育や産前産後のサポートも行なっています。その他、北海道の人は学びたくても東京や大阪の研修に出かけるのは難しいので、道内にいても皆が参加できる研修会をしてしまおうと、我が団体が主催して支援者対象の養成＆スキルアップ連続講座なども開催しています。これまでの活動を通して子育てを取り巻く社会の急激な変化を実感しています。ひろば全協で「アウェイ育児」が 72.1%というデータを掲げていますが、札幌市は政令指定都市であるため転勤族が多く、「てんてん」に集う親子は 8 割 5 分が全国各地から集まった方々です。最近のひろばでも、「○○に転勤が決まった」「転勤は決まったが行き先がまだ決まらない」などの声が出ていますが、転居前に転居先の最寄りのひろば情報をお伝えしています。

「てんてん」には、実家が遠く、マンション暮らしで地域と繋がりにくい親子がたくさん来ています。北海道は半年もの間、雪に閉ざされるので、本州出身で雪の上を歩いたことがないと、自分一人でも歩くのが大変なのに、子連れで出歩くのが不安で引きこもりがちになるという話をよく聞きます。現代の子育ての大変さを実感する中で、孤立した状態では児童虐待はいつでも誰にでも起こり得る可能性がある最重要課題と感じています。

ひろばのこころとして、「みんなで大きくなろう」というメッセージを掲げています。「子どもの育ちを中心にすえて、親も支援者も地域もみんなで一緒に育ち合おう」という意味です。

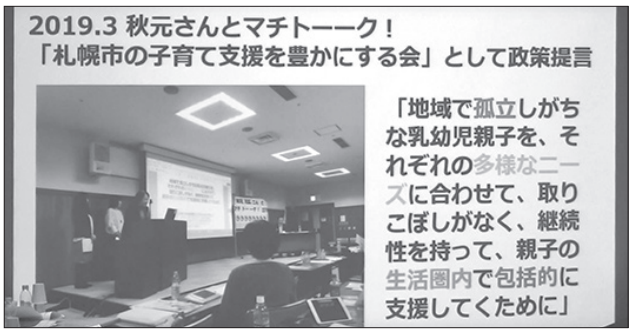
大日向雅美先生の講演で「子育て・家族支援者養成講座」の話が出ましたが、2006 年に札幌でも開催され私も受講しました。札幌は協働が進みにくいまちで苦労していましたが、講座認定の際の大日向先生からの講評に、「壁の高さを前に諦めることも、撤退することもしたくはないですね。道は険しく遠いと思いますが、戸は叩き続けたい。明けない夜はないと」というメッセージをいただき、それを心の拠り所にその後の活動を続けてきました。

2010 年に「子育てひろば全国実践交流セミナー in ほっかいどう」を札幌で開催した際に、私たちのひろばはまだ自主事業でしたが、全国では子育てひろばが中学校区に 1 つの目標で広がっており、先進的な事例を持ち寄った会となりました。その当時の市長に、他の子育て支援団体とともにセミナーの報告とそこから生まれた政策提言を行なうなどして、少しずつ協働の道が開けました。拠点事業になった後も補助金額は低いままで 100 万円を持ち出しで運営してきましたが、昨年の市長選目前に政策提言の機会があり、全国で相次ぐ虐待事件を受けて予防の視点が大事だと訴えました。提言には、現場で感じることの他にひろば全協での学びも盛り込んでいます。

提言の中に、札幌市の地域子育て支援拠点事業の開催を週 3 日から 5 回に増やし、本当の意味での常設のひろばにしたい、安定して継続的に運営できるように国の基準通りに補助してほしいということも盛り込みました。市の行政も大変さを理解してくれ、2020 年度から補助金が国の基準並みに上がり、可能な拠点から週 5 回開催も行なえることになりました。こうしたタイミングもあり、地域の拠点が本当の意味での親子の居場所となれるようにネットワークを作ったり、お互いの質を向上させ、地域の資源とも連携したいとの思いがあって 12 月 22 日の研修交流会に繋がりました。

拠点は支援の入口と出口の両方の役割を担っていますが、札

幌市の利用者支援事業は、市の職員が窓口で行なっていて拠点にはつながりにくいので、「てんてん」では月1回、利用者支援専門員の座談会の場を設けて情報提供をしてもらい、その後、身近な相談に繋がりやすい仕掛けをしています。



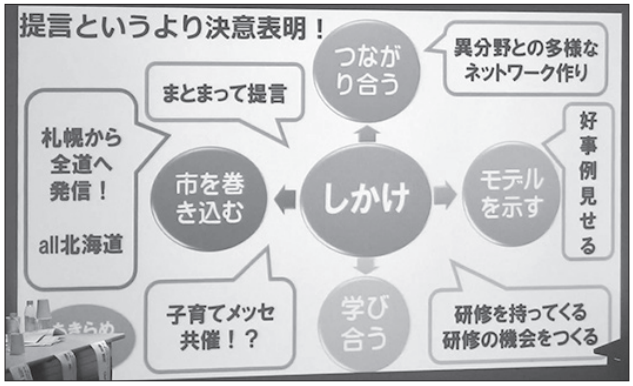
研修交流会の企画は、2019年6月に札幌で2歳のことりちゃんが虐待死した事件が発端でした。接点はありませんでしたが、子育て支援に長く携わってきた者として、もっとできることがあったのではなかったか、どうすればよかったのかと無力感に襲われました。また、2020年度から拠点事業が充実するということで、私たち自身のネットワーク、質の向上を目指しつつ、地域の資源と具体的に繋がりを持つ機会にしたいと考え、私と、拠点を運営する「ねっこぼっこのいえ」の小林真弓さん、研修と交流の活動を行なう「さっぽろ子育てネットワーク」の河野和枝さん、かざぐるまの理事も担う、「北海道大学教育学研究院子ども発達臨床研究センター」准教授の川田学さんが企画委員としてプログラムを考えました。

プログラムは2部構成で、第1部では「予防的支援」ということで、札幌市子ども未来局子育て支援課の田村博美課長と企画委員4名で、パネルディスカッションを行ないました。

田村さんからは、地域子育て支援拠点への期待として、地域全体での支援に向けて家庭と地域のハブの役割をしてもらいたいという話がありました。川田先生からは、札幌市と北海道大学共同の子ども生活実態調査の中で、2歳児の保護者の16%が立ち話する相手すらいないという結果が出ていたことが紹介され、ひろばが生活の場で機能すると、困りごとをみなで解決するコミュニティになり得るとの話がありました。

第2部は、拠点が連携すべき地域資源12事業の分散交流会を行ない、①子育て支援地域包括支援センター、②利用者支援事業、③児童相談所・家庭相談室、④さっぽ・こども広場、⑤地域教育相談、⑥小児科医師、⑦産後ケア事業および拠点での赤ちゃんふれあい講座、 ⑧こどものくらしコーディネーター事業、⑨こども緊急サポートネットワーク事業、⑩子育てサポートセンター（ファミサポ）・ほっとプラザ（家事支援）、⑪ＤＶ被害者支援、⑫ひとり親支援の方々に来ていただきましたが、市の担当では課長クラスの方に出席いただきました。最初に5分ずつ各事業の概要を説明してもらい、その後、室内の12ブースで担当者が待ち受け、参加者が内容を聞きたいブースを回るという方法で15分ずつ3回繰り返しました。川田先生が「屋台方式」と表現しましたが、自分が聞きたいテーマのブースに行って名刺交換を行ない、直接質疑応答を行なったり、その場でミニ実技講習なども行なわれたりしました。研修会後、実際にＤＶ被害者の支援団体の方が拠点に来てスタッフの勉強会を開催するなど、事業の繋がりも生まれました。

うまくいったこととしては、官民が入り混じって一緒に研修交流会を運営することができたこと。参加者や登壇者からも多数の感想をいただきましたが、反省としては、やりっぱなしで終わってしまった感があること。今後はこれを膨らませて、行政と協力して1日型の子育てメッセのような形で開催できればよいと妄想しています。



最後に決意表明。私たちの役割は、いろいろなところに仕掛けていくことだと実感しました。その仕掛けとは、繋がり合う仕掛け、ネットワークを作る仕掛け、好事例を見せてモデルを示す仕掛け、研修の機会を持ちづらい北海道に研修を持ってくる＆研修の機会をつくる仕掛け、何か行なう際には私たちだけではなく市や道を巻き込むような仕掛けです。

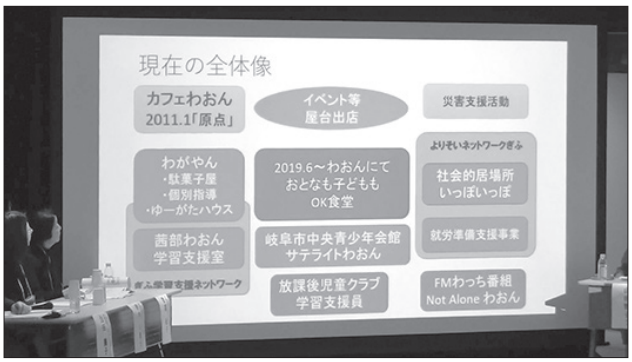
川田先生からおまけとして、「実践者も哲学を求めているのではないか」ということでした。研修会に出ると、今でも親批判がときどき聞かれますが、そこからは何も生まれないでしょう。基本的哲学をしっかり共有しつつ、次の段階に進めたらよいと考えています。

○「おとなも子どもも OK 食堂」の現場から

特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長
杉浦陽之助さん

青木　にっぽん子ども・子育て応援団事務局の青木と申します。本日は岐阜県岐阜市からお越しいただきました杉浦陽之助さんをご紹介させていただきます。杉浦さんは特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアの理事長をしていらっしゃいます。特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアでは、「おとなも子どもも OK 食堂」、食事付き学習支援をはじめ、社会とのつながりを持てない若者の相談や支援などに取り組んでいらっしゃいます。昨年大垣市で行ないました地域人材交流研修会で杉浦さんは、支援の場に来られない子ども、距離や関係性の問題で場に来ることができない子どもがいるということから、家族機能の社会化という視点から移動支援の重要性について訴えていらっしゃいました。それでは杉浦さん、よろしくお願いします。

杉浦　ご紹介に預かりました特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエアの杉浦と申します。今日はよろしくお願い申し上げます。岐阜市から東京に来ますと、もうそれだけで、ビビってしまうんです。それだけ田舎で何かをやっているということになるんだなということになるんですけれども。田舎なりのいろんな課題がありますので、そこをも含めてお話をさせていただきます。



うちの法人の現在の全体像ということで、（スライドの）左上に「カフェわおん」と書いてあります。法人が出来上がったのが 2011 年。2011 年 1 月 17 日に設立する直前、喫茶店を一つ手に入れて、活動を始めました。1 番の目的としては、子育てというよりは若者を中心とした市民の孤立を考えていく NPO として活動を始めたんですね。というのも、私が自分で法人を立ち上げる前に勤めていた NPO が、ずっと若者支援を行なっていたからです。そこでいわゆるニート状態の若者を 100 人程度、合宿型の自立訓練みたいなことを行なっていく中で、いろいろと感じるところがありまして、自分なりのことが出来ればいいなと思い、カフェを手に入れ、これを拠点にしてやっていこうと活動を始めました。

その年の 3 月に法人になりました。自分の思いだけで法人を作ったので、周りに課題を抱えている人がたくさんいて、それに対して「なんとかしなきゃ」という動きとはちょっと違うんですね。そういうことがあるだろうという前提で動き出した。という中で、2011 年といえば東日本大震災が発生しました。自分もいろいろと、これはもう震災後のいわゆる孤立状態、震災から少し時間がたってくると精神的な部分も含めて、孤立を感じる人がいるんじゃないかなと思い、現地に行くことも考えなきゃなということで、動き出したりしています。途中で石巻焼きそばを焼いている人に出会いまして、その方の支援をする。自分自身もカフェをやっているところから、出張してイベントを開催して、私たちも石巻焼きそばを作って応援するようなご縁があって、現在はそこを皮切りに、災害被災地へ炊き出しに行くようになりました。今も、長野市に 10 回ほど炊き出しに出向いています。そのときに若者も一緒に行かせるということで、支援の一環にしていこうと取り組んでいます。

子どもに関することを中心にお話をしますと、（スライドの）左側の方に「わがやん」と書いてあります。正式名は長くて「わがやん　わおん」と言います。これは民家を 2016 年の夏前くらいに、「空いているんで貸したいんだけれど、誰かいないか？」ということで借りました。小学校の目の前にあったので、まずは子どもたちとの接点をどう作るかなということを考えて、駄菓子屋さんをやって、その奥の部屋を使って、「個別指導」や食事を提供する形の学習支援「ゆーがたハウス」を始めました。週に月・水・金の 3 日間、今は子どもが毎回 8 名ほど、夕方食事をとりながらやっています。これらは独自にやっているのではなく、下に小さく「ぎふ学習支援ネットワーク」とありますが、全部で 8 会場、岐阜市にありまして、そのうちの 2 会場をうちが担当させてもらっています。下の茜部わおん学習支援室は週 1 回で、食事を出さない学習支援を公民館を借りてやっています。

その他、右手には「社会的居場所いっぽいっぽ」、就労支援事業とありますが、これらは生活困窮している成人の方々への支援として岐阜市から受けています。これも「よりそいネットワークぎふ」といって、一般社団法人を立てて、その一員としてやっています。

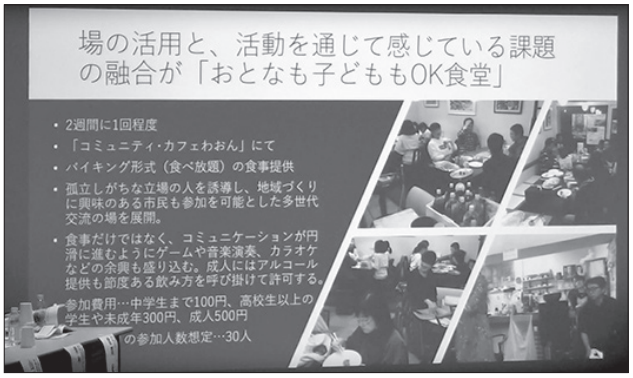
（真ん中の岐阜市中央青少年会館で行なっている）サテライトわおんは若者と一緒に音楽を楽しむ活動で、言葉による支援ばかりでは良くないかなと、一緒に活動することで立場を超えて楽しめることを提供しようという格好でやっています。あとは岐阜市で委託を受けてやっている放課後児童クラブの学習支援の仕事と、週 1 回コミュニティ FM で番組を持たせてもらって、自分の活動の発信をしています。

前置きはこんな感じなんですが、その中で今取り組んでおります「おとなも子どもも OK 食堂」について。

レジュメの中の「過去の取り組み…高齢者」のページをご覧ください。法人を立てた翌年に岐阜県地域づくり支援事業を委託で受けまして、いわゆる貧困層の支援住宅団地で、かれこれ 50 年近く前に建てられた市営住宅団地。ほぼ高齢者だけが残っ

ている団地で、高齢化や福祉の問題があり、そこで見守りの活動などをやっていく必要があるだろうと、私のほうからも提案をした。その取り組みを進めるうえで若者の手を入れていくことで、若者たちにも役割意識を持って、自立に繋げる活動ができるんじゃないかと、この地域に入っていったんですね。それが 2013 年に「山手サロン」の立ち上げに繋がって、成果報告会のチラシには、若者たちがお弁当を作ってサロンで一緒に食べている写真も掲載しています。そのときのリーダーだった 70 代の女性が、7 年近く経った今では 80 代となり、なかなか自分たちでは動くのがしんどくなってきている現状があります。

そのサロンをやっていて思ったことは、高齢独居男性はコミュニケーションを取らない傾向にあるのかな。実際高齢の方々を対象にした統計を調べてみると、一人暮らしの高齢男性がコミュニケーションをとる頻度、会話が少ないということが見受けられて、高齢の孤独死の 7 割は男性というデータが内閣府から 2009 年に発表されていました。



団地での繋がりということで、高齢の方々に対する視界と、現在活動している子どもへの取り組み。貧困ということが強く意識にあるかといえば、どちらかといえば孤独、孤立に注目して行きたいなと思っています。というのは、若者たちを見ていると、子ども時代の何かの影響が自立への繋がらなさに、もしかしたらあるのかもしれない。（自立への繋がらなさは）貧困だけ（が原因）ではないだろうと感じておりまして、今、子どもたちのことにも関わっています。孤立の影響というのは、説明するまでもなく、みなさまよくご存知だと思います。いろんな精神的な部分で影響を受けたりすることがあると言われています。2019 年の 5 月に無差別殺傷事件（50 代の犯人は自殺。世間と断絶した生活をしていたとみられている）が起き、一方で、（80 歳の親と引きこもりの 50 代の子どもが地域で孤立した状態で同居するなどの）いわゆる 8050 問題が増えてきている現状もあります。

これらの流れの中で、現在取り組んでいる子どもたちの件も含めて、もうちょっと自分たちでできることはないのかと、模索していきました。

学習支援の中で、（スライドに）食事をしている場面があります。これは別に子どもに限定していたわけではないんですけれども、学習支援をやっているところで食事をしていたので、ご近所の高齢女性が月 2 回来てくれていたんですが、途切れてしまいました。くつろぎや癒しを求める場合に、（幅広い年齢層対象では）対応が難しいのかなと感じました。

一方で、喫茶店があまり活用されていないんじゃないか。でも認知は結構されているんですね。年末、大晦日に知り合いの製麺屋さんから、「800 食の年越しそばがあぶれちゃった。なんとかしてくれ」ということで、喫茶店で 200 食ぐらいを無料で振る舞ったりとか。そんなことをやりながら地域の中での認知度を上げていくということをしながら、考えていきました。

場の活用と活動を通じて、繋がりはできていても、単なる居場所みたいにして和気藹々と過ごす時間も設けられたらいいなとか、そうしたことから利用者からポロリと出てくる課題を拾い上げられたらいいなと思い、「おとなも子どもも OK 食堂」という名前の取り組みを始めることになりました。

名前が先行して浮かんできたというのが正直なところです。以前から地域食堂という表現でいえば全国的にも似たような取り組みがあるとは思うんですけれども、それをもっと入りやすい雰囲気にするには、名前を聞いた瞬間に行きやすそうだと受け止められるといいなと思って、ずっと考えていたんですね。「みんなの食堂」とかあるけどなあと思っていたんですけれども、おとなも来れるし、子どもも来れるし、おとなの「O」と子どもの「K」で「OK」かなと思って、ガッツ石松さんの顔が浮かんできて、これでいいかな、みんなに伝わりやすいかなと、やり始めました。

小さな喫茶店なので、座れる席は 20 席程度。夕方 5 時から 10 時までの 5 時間だけ開けますという風にして、早く帰られる方や、遅く来られる方がいて、うまく循環出来ています。バイキング形式で、いつもだいたい 8 品目くらいそろえて、食べたいだけ食べられる。屋台を出すときにも、中に鉄板を持ち込んで焼きそばを 32 人前、ガンガン作ったりして、楽しくやっています。最近は YouTube でカラオケの音なんかありますので、そういうのを引っ張ってきて、歌を歌ったりしております。一応有料でやっているんですが、毎回の利用人数の想定も、30 人ぐらいがご飯を作れる限界かなと思っています。

開始前の意識は、孤立しがちな立場の人たちの定期的かつ継続性のある見守り活動のひとつの方法になり得ないかなと。人と人とが顔を合わせて会話をしたり遊んだり、食事したりするような、時間と経験の共有の場を設けていけたらな。そういうつもりで始めたんですね。やはり孤立しがちなところというと、このスライドの下にもあるように、「社会関係資本」という言葉、人との繋がりであったり、繋がりを結ぶコミュニケーションの取り方とかいう部分で、なかなか場がなかったりしている。そういうことで繋がりが広がっていかないということがある。繋がりが広がっていく場になるといいなということと、さっきの孤食の子どもたちに安心して食事を提供できるようなこと、これが、大きく言えば「家族機能の社会化」ということに繋がっていくのかなと。

先ほど北海道の方がおっしゃっていた子育ての現状のスライドにも書いてありましたけれど、ワンオペの子育てというのも昨今多い。実は僕はまだ 52 歳なんですけれど、孫が生まれまして。4 カ月くらいで、非常に可愛いんですけれども、自分の娘が育てている姿を見ると、大変だなということは感じます。でも、僕らぐらいの世代が（乳児を）「よしよし」ってやってる、楽しく、可愛いだけで済んでいくようなところから、母親には休憩してもらうというのもいいかな。基調講演で大日向先生のお話にもあった（シニア世代の子育て・支援の）取り組みも、僕の中でも重要かなと思います。

現状では 2 週間に 1 回のペースでやってきて、現在 17 回。この資料を作った時でいうと 15 回。ほとんど毎回 30 名以上の参加を得ております。子どものみの参加が毎回 4 ～ 6 名。これは「ゆーがたハウス」にきている子どもたちで、「この日は勉強の話は一切しないからね」ということで、おとなと一緒に歌ったりして、楽しく過ごしてくれています。親子での参加は、だ

いたい母子の参加が多いんですけれども、常連1組は毎回参加してくれます。60歳以上の参加は、先ほど高齢男性の話をしましたけれども、なかなか動きづらいようで、ここは課題として残っております。無業者、生活保護、障害者雇用というところも動いていまして、スタッフも含め毎回約10名。僕の手伝いをしてもらっている2人のように、生活保護を受けていて、障害者手帳も持っているというようなメンバーがやっています。いつも楽しそうにやってくれています。彼らは滞在時間が長い傾向にあり、5時間ずっといるという人もいます。

子どもに対することもお話ししておきます。子どもたちは、おとなたちに見守られつつ安心して過ごしていることは、今見ていても感じます。20時回っても、なかなか帰りたがらないところからも、そうかなと。保護者から見たときにも、みんなで楽しく過ごして、楽しそうに帰ってくるということで、有り難がられている。そして、この二つだけでも保護者の懸念が少し軽減されているような気がします。さらに広げていくためには、子どもたちはかなり常連化していまして、現状孤食の子どもたちがもっともっといるはずなんですが、繋がりにくいという要素があります。来る時間はいいんですが、帰る時間になるとどうしても暗くて、子どもたちだけで帰るのはなかなか大変な状況があるので、今参加してくれているメンバーが送っていく、ボランティア化といったことも、移動支援。こんなことも、手助けとしてちゃんと機能していくんじゃないかとも思っています。あとは来る段階のところで、放課後児童クラブもありますので、学校との連携も考えて、やっていけるといいかなという風に思っております。

いろんな取り組みの中での子どもに対することなんですけれども、象徴的なことで1件お話しします。OK食堂ではないんですが、高校3年生の母子世帯のお子さんがずっと「ゆーがたハウス」に来ていまして、勉強は僕、教えられないんですけれども、毎回来ています。夜9時40分くらいに一緒にご飯を食べています。彼は父親の存在は知らないんです。彼といつもご飯を食べながら、会話をするということは、僕にとっては、その先の家族機能、僕自身は父親になろうとは思いませんが、相手はどういう風に感じているのかなと思いながら、一緒に食べています。会話を楽しみながら受験を迎えることを応援することができている。こういうことも地域には必要かなと感じながらやらせていただいております。

以上です。（拍手）

青木　杉浦さん、ありがとうございました。続きまして、當間さんお願いします。

○市民発　ごちゃまぜ 真剣　まるごとケア

みやの森カフェ　一般社団法人Ponteとやま副理事長
加藤愛理子さん

當間　事務局の當間と申します。富山県といえば、地域福祉に関わる方にはおなじみの「富山型デイサービス」というのがあります。今回、2 年前に金沢でおじゃました日常生活支援サポートハウスの山本実千代さんに「富山に行きたいのだけれど」と言ったら「砺波にすごくいい場所があるから紹介します」と言われて Ponte とやまの加藤さんを紹介していただいたのですが、残念ながら富山型デイサービスのネットワークにはまだ入っていらっしゃらない。ちょうど設立して 5 年が経って、5 周年フォーラムがあるからということで、いきなりヒアリングに行くことになりました。とっても素敵な場所を運営なさっているのですけれども、そういった詳しいことは加藤さんから直接伺っていただいたほうがいいと思います。ごちゃまぜっていうのを非常に真剣に取り組んでいるのが加藤さんたちかなというのがあります。ごちゃまぜって、すごく緩やかで何となくやっていると思われたりするのかもしれませんけれど、ごちゃまぜにはごちゃまぜをやるなりの覚悟と真剣さと、実は高い専門性を求められているのだ、と言ってしまったら、ごちゃまぜをやりたくなくなるのかもしれません。さて実際どうやっていらっしゃるのか、加藤さん、よろしくお願いします。

加藤　こんにちは。富山県の砺波市からやってきました。今まだ入ってないと言われたのですけれども、富山型のデイには入りません。私たちは狭間の組織……、組織ではないので、これから入ることはないと思いますが、その話も含めてさせていただこうと思います。

私たちは Ponte とやまという社団法人を作って「みやの森カフェ」を運営しています。（写真を示し）これがカフェです。私の自宅の庭で、砺波市この辺地価が安くて、坪 1 万円みたいなところ。土地だけは 200 坪あるので、その中で小さな終の棲家と、小さなカフェを作りました。これが砺波市の地図なのですが、真ん中に庄川というのがあって、西側にイオンや住宅地があったりして、混んでいるのですけれども、東側は閑散としています。風光明媚でもなく、非常に中途半端な区域なのですけれど、私は東側に住処とコミュニティカフェを建てたのです。一つの理由は、私の友人がここで富山型デイサービスをやっていた。そしてそこに、ものがたり診療所という在宅医療の診療所がある。それを住民の方が招致したという話を聞いて、福祉と医療と、住民の人の危機感があるとしたら、ここにコミュニティカフェを作ったらどうなるかなぁという興味で人生を賭けました。

二人で社団法人を作りました。NPO はとても大変なので。肩書は副理事長と書いてありましたけれど、二人でやっています。相棒は水野カオルという人で、私より 9 歳年下。21 年間教員をやってきましたが、どうも学校の中だけでは課題が解決されないのではないかということから教員を辞めたのですね。私の方は実は転勤族で 17 回目の引っ越しで富山にたどり着きました。それが 26 年前。富山にきて次の年、私は富山YMCAというフリースクールの国語を教える講師になりました。ここで、不登校とか高校を中退した若者たちと一緒にいろいろ学ぶことになりました。

そして、私たちの共通点、水野さんと私の共通点は実は「きょうだい児」というものなのです。お聞きになったことはあるでしょうかね？障がいのある兄弟がいる人のことをきょうだい児というのですが、水野さんのお姉さん、私は、妹に障がいがあります。きょうだい児の特徴が実はありまして、へそ曲がりなのですよ。なんでかなと思うのですけれど、まず、みんなきょうだい児でまとめられるのは嫌なのです。でも「へそ曲がりだよね」というと、嬉しそうにニヤッと笑う。私たちの活動には、結構きょうだい児がおりまして、今日も赤いストールを巻いてきているのですが、これもきょうだい児であるなっちゃんが作ってくれたのです。

おそらく、小さいときからの経験が積み重なってへそ曲がりになっていると思うのです。兄弟にもときどき支援が降りかかるのですね。「あなた大変よねぇ」とか同情も寄せられるし、褒められるし、何にもしていなくても「お姉ちゃんなの。偉いわね」とか。

それを子どもながらに斜めに見ているという状況で、へそ曲がりが作られていくのではないかと思います。結果、私と水野さんの中には、困っている人を助けてあげるという感覚は全くないですね。まぁ助けてはあげられないけど、何もできないとは思うけれど、何とか一緒に生きられればいいなぁくらいのスタンスなので。そんな中でも、何か面白いことやっていこうかなという感じなので、とても気は楽に、二人でスタートしました。

（写真を見ながら）これが彼女と私の写真です。私は、ご飯食べていない人にご飯食べさせるのが、かなり趣味のような。野菜は食べてほしいですね。実はフリースクールで国語を教えていた時も、国語だけではなく、弁当持ってきて子どもたちと一緒に食べていたのですね。それがフリースクールでもカフェを始めるきっかけになったのですが、（写真を見ながら）今、頑張って、こんなランチを出しています。つい最近 100 円値上げして 800 円になりました。お金のない人も来るので、「しんどいなあランチください」という合言葉で、懐と胃袋がしんど

い人は「しんどいなあランチ」が 500 円で食べられる。更に皿洗いすると 100 円引く。午前午後手伝ったら無料で食べられるという変なシステムを作っています。

私たちのところは結構子どもたちが来るのですね。（写真を見ながら）左側に居るのが発達に凸凹のある子どもたちで、月に 1 回くらい凸凹キッズカフェというのをやって、子どもたちがチラシを作って、お客さんも山ほど来てくれました。最初、子どもたちにはお金の金額を書いた券を渡したのですが、子どもたちが「券じゃ嫌だ。現金をくれ」というので、そのときは子どもたちに 300 円戻して、さらにお客さんが沢山来たときには、「今日はお客さんが沢山来たからね」と割増料金を上げると、本当にね子どもたち、良く働くようになります。

右側の方は、週 1 で学校に行っていない小中学生たちがスタッフとして来ています。非常に優秀です。カフェラテのアートとかをやってくれます。

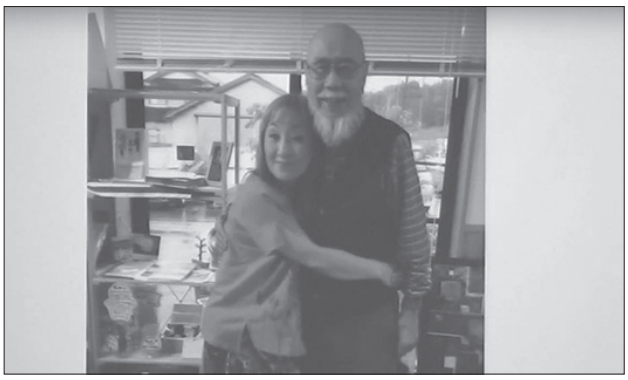
私なんか完全によそ者ですからね。近所の方たちも、よそ者の人間がカフェを始めたって言って、「わけのわからんものができたな」と思ったと思うのですが、みなさん優しくて、お野菜をくれたり、竹を山から切ってきてくれたりして、流しそうめんをやりました。

（スライドの写真を説明）右側は園芸療法の人たちに関わってもらっていて、子どもたちと畑をしたり、それを収穫したり、ご飯を食べたりしています。

他にも介護しゃべり会をやったり、それから唯一、市からもらっている助成金が認知症カフェだけなのですが、認知症カフェをやっているのですが、認知症の人が来ているのかは実はよく分からなくて、ごちゃまぜになっています。市はそれでいいと言ってくれているので、非常にありがたいです。

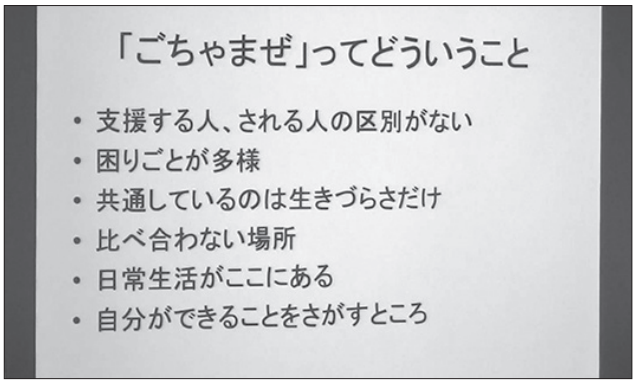
（写真を見ながら）これは夕飯会をやろうと言ったら集まってきた人たちで、ダンサーはいる、絵描きはいる、NPO の理事長もいる、高校休学中の苦しい若者はいる、ママもいる。わけのわからない、ごちゃまぜな感じで、みんなでご飯を食べました。

この髭の男の人は私の父 93 歳です。女性は富山型デイサービスの、富山の 3 大魔女といわれている宮袋季美さんですが、父は私の終の棲家の半分の出資者なのですね。「お父さん、老人ホームに入らなくていいよ。ここに居ればみんな助けてくれるから」と言って出資を半分してもらって。ま、いい思いしています。こうやってハグしてもらったりして。



ここから、カフェに寄せられる相談なのですが、最初は実はケアラーズ・カフェということで、介護している人に使ってもらったらいいなという想いでやったのですが、私たちの前職が教育関係だったので、子どもと若者の相談が 90%以上です。その中で発達障害の若者たちの相談がとても多い。よく話を聞いていくと、そこに DV があったりすることもよくあります。

最初から、ごちゃまぜを目指していたわけではないのですが、自然にごちゃまぜになってきました。赤ちゃんから高齢者までいろんな人たちがご飯を食べたり、おしゃべりをしたりしています。「ごちゃまぜ」ってどういうことかっていうと、支援する人とされる人の区別が無くなっていく。私のところは、相談に来ると相談室がないので、オープンなカフェの中で相談が始まって、「実はうちの息子が……」という話が始まると、相席した人が「ああ、私もなのよ」ということがよく起きる。私のほうも、あの人と一緒だ！と思ったら「ちょっと、ちょっと」って呼んで「ちょっと一緒に話を聞いてくれる？」という感じになっていって、相談というよりも相談がスタートで仲間ができていく、というほうが合っているのかな、という気がします。



ある人は、子どもの相談に来た二人がとても似ているので、一緒に話したらいいよと話をしたら、意気投合して、話しているうちに「これは子どものことじゃなくって、私たちの生き方の問題なのだ」っていうことが分かって、「そうだ、私たちは自分らしく生きよう。もう旦那とは同じ墓に入りたくない」と二人で納骨堂を探して歩いているそうです。

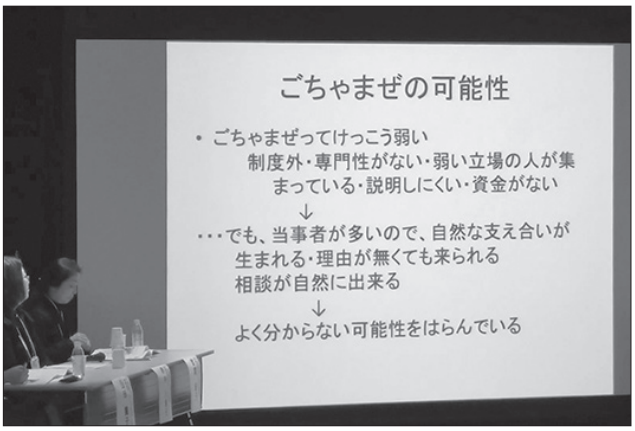
というようなことも、ときどき起きますが、困りごとが多様だと、うちの方がましだわとか、あっちの方がましだわとかいう比べ合いが起きずに、お互いに支え合うことができているような気がします。困りごとが違うだけに、自分の力が発揮できる場面というのが結構あります。

こんなことを 5 年半くらい続けているのですが、私のカフェは悩み相談と謳っているんですけれども、独りぼっちではない、ということ。それから悩んでいるのは自分一人ではないというところからスタートして、それから自分に役割があるということが分かって、自分がやりたいと思ったらやってみようよ、という応援はしています。特に若い子たちはいろいろな生き方があるのが分かって、そこから自分らしい生き方を探していくということができるような気がしています。

私は活動を始めて 3 年目くらいに、だんだんうちのカフェがごちゃまぜになってきて、混沌になってきて、このままでいいのだろうかという悩みを持ったときに、「ごちゃまぜ　カフェ」で検索したら、長野県にある「ごちゃまぜカフェ」というのがヒットしたのですね。そこにも本当にいろんな人が来ているということが分かりました。そうなると、うちと同じようなことが全国であるのではないかと、富山県内にもあるのではないかと元々感じていたのですが、ごちゃまぜの可能性をちょっと考えてみました。

でも最初あまりよいことが思いつかなくて。「ごちゃまぜ」ってあまり通じない。弱い。なぜかというと制度にどうしてもはまらないのですね。子ども食堂って言ったらすぐお金が入る。

高齢者支援って言ったらお金が出てくる。子どもと高齢者とそれ以外の人もいるとなると、どこからもお金が出てこない。（分野をまたがった取り組みになると）既存の制度外。専門性があるようには見えない。じゃあ、ここから「ここから前向きに生きましょう」なんていうこともちょっと言えない。



今日は頑張って説明していますけれど、本当に説明しにくいです。一番大きいのは資金がない。ただ、当事者の人、自分が当事者であるという意識の人が集まってくると、本当に自然な支え合い、支援者ではなくて当事者の人たちが、病気になったりとか、必ずみんな何かの当事者になっているんだけれど、自分が当事者であるという意識を持つ人が集まると、とてもいい支え合いができてきます。私も当事者です、きょうだい児でもあるし、肺がんをやったこともある。

そうするとなんかよく分からないけれども、ごちゃまぜには可能性があるんじゃないかなぁということを感じるようになっています。ここ（長野県千曲市）の「ごちゃまぜカフェ」何回かおじゃまをしました。

資金のない私たちですが、人を巻き込むのは非常に得意です。（写真　みやの森通信）これも今日来ています家森さん、フリーペーパーの編集長なのですけど、家森さんは私たちに「Ponteとやまは若者の支援はしてくれるのですけれども、僕たち 40 代の支援はしてくれないのですね」って言われたので、「いえいえ、私たちは支援をするのではなくて、支援をしてもらう立場なのですよ。家森さん私たちを支援してください。今、一番できていないのは発信なのです。あなたはきっとフリーペーパーの才能があるからやってください」と言ったら、こんなに立派なフリーペーパーを。本人もあまり自信が無いので、まずは 3 カ月やってみようというところから始まって、今、2 号出たところです。

今日は、創刊準備号（をお配りしています）。家森さんが欲しいのはみなさんの感想なのですよ。感想を書いて送ってくれたらみやの森カフェのスイーツプレゼントというのもやっているのですが、まだあまり……これから頑張ろうという。

今年の抱負です。実は富山県は非常に面白い場所がいろいろあります。特に若者たちが頑張ってくれています。皆さんもお聞きになったかもしれませんが、高岡市の「ひとのま」という。30 代の若者がやっている居場所があるのですけれど。家を 1 軒用意して「誰が来てもいいですよ」としたら、市からホームレスの人とか、刑務所から出た人とかも紹介されるらしくて。元々、子どもたちも集まっているので、子どもたちと一緒にホームレスの人とか、刑務所から出た人がご飯食べている。特に冬はホームレスの人がそこに泊まって、去年はとうとう暖房費がなくなって、とても大変だったと聞いて、私のほうで賛助会員制度を作って「はい、みなさん。寄付してください」と言ったらお金が沢山集まった。

それから、もう一つは「ガチョック」という障害者就労支援 B 型の作業所と居場所を提供している団体。これも若者 3 人でやっているのですが、なんでも B 型作業所で軽作業ではなく、YouTuber を育てている。結構そっちは儲かっているのですが、それは利用者にお金が行くので、スタッフの方にはお金が行かない。不思議な居場所をやっておりまして。あと、古本屋さんで辛いことを言ったら 100 円引くという。共通するのはお金がない。

私たちはランチも出しているし、学習サポートという事業もしているので、どちらかというと私たちが一番優雅かなぁという。そろそろこの混沌と弱い力を結集して、もうちょっと形のあるものにして、発信していきたいと思っています。まずは、富山県内からやっていこうかなと思っていますが、それは数を把握しろとか、一番苦手なことを言われていますが、それをやってみようかな。それからまだまだ必要なことは見えてきて、やれていないことはいっぱいあるのですけれども、人を巻き込んでやっていこうと。

最後に、昨年 4 月に本を出しました。共著で南雲明彦さんと一緒に書いたのですが、彼は今、講演者として全国を回っています。いろいろな居場所を見て、うちのカフェのごちゃまぜさを見て、ごちゃまぜの可能性に賭けてくれて、本を出そうと言ってくれたので、4 月にこの本が出ました。読んで分かるかと言ったら、余計分からなくなったという感想も寄せられていますが、Amazon で買えますので是非読んでいただけたらなと思います。

私たちは、どちらかというと大きなことをしていくよりも、誰もができることをしていきたいなと思っていて、私はたまたま土地が安かったのでカフェを開きましたが、家をちょっと開けるとか、自分の住まいをちょっと外に開くとか、地域で空いている家を使うとか、誰でもできる地域活動ってあると思うのですね。それは大きくなくて構わないと思うので、そんなことが増えていったらいいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

コメントと質疑応答

當間　ここで、大日向先生から、お三方のお話に対してのコメントをまとめてお願いします。

大日向　どうもありがとうございました。とても貴重なお話を楽しくお聞きしました。

今、日本全体で NPO は雨後の筍みたいにいっぱい生まれていて、その何割かは残念なことに消えていっています。その中で、この三つの団体はキラキラ光るものとして、応援団のみなさまはヒアリングしながらピックアップなさったんだろうと思います。確かにその通りだなと思いながらお話を聞いておりました。

お話を聞きながら、三つの活動に共通していることとして、ノーベル医学賞受賞者の山中伸弥さんの言葉を思いました。山中さんはお若いときは研究成果が上がらなくて、受け入れてくれる研究場所もなく、大変苦労なさった。その中で彼を唯一受け入れてくれたアメリカの研究所の所長さんが当時の山中さんに贈ってくれた言葉を、彼はずっと金字塔のように大事にしてきた。「人生間違えないために、そして研究を成功に導くための秘訣は VW だ」と。「V」は「Vision」、「W」は「Work hard」です。お三方はとてもユーモラスに語っていらっしゃったけれど、やはり活動は「Work hard」だと思います。一見緩そうに、楽しそうにしなければ、みんな寄って来てくれません。だから楽しそうに、水の上を泳いでいるようにするけど、水面下は足であがくようなことがいっぱいある。行政と協働できたかなと思うと、行政が悪代官みたいに変身してしまったりね。（会場笑い）補助金をいただくということは、こんなにも大変なことなんだろうかとやっている所が大半です。「Work hard」です。今、ワーク・ライフ・バランスとか、人間らしい働き方が推奨されています。もちろん、それは大事です。でも、一つのものを作っていく、そのプロセスには、必死に頑張らなくてはならないものがある。お三方は、それをきちんとなさった団体。しかし、山中さんはこうも言っています。「がむしゃらに Work hard ではダメだ。しっかりと Vision を持つことだ」。お三方、それぞれ掲げた Vision が、しっかりと地域の方々に共感を持っていただけて、今なお続いている。「VW」を見事に体現されたと思います。同時に、仲間を勝ち取られました。ともに戦う仲間。どんな試練があっても信じ合ってくれる人がいてこその、NPO。

そして最後に申し上げることは、ニーズは掴むだけではダメ。最初は親子、住民の声に愚直なまでに耳を傾け、そこから何を求めているかを掴もうとする。でも、いつかそれは新しいものを創っていく。新たなものを創るビジョンも打ち出されている。お三方はただ、住民のみなさんの声に応えただけではないと思います。みなさんの豊かな人生経験、喜びも苦しみもあって、そこから半歩先のものをクリエイトされている。そこのところに、中身は違っても、共感すること、学ばされることがたくさんありました。ありがとうございました。（拍手）

當間　大日向先生、どうもありがとうございました。

ここからは質疑応答ということで、フロアのみなさまからご質問をお受けしたいと思います。基調講演から報告と提言まで、これまでの内容すべてに対するご質問をお受けします。どなたか。

もう少し（お三方のお話を）聞いてみたい？では、（報告と提言の）お三方にさらにお尋ねしてみましょうか。昨年の報告会では、あらかじめお題をお伝えして発表をお願いしていたのですが、質疑応答だけで時間がなくなってしまいました。

児童虐待を防ぐとか、早めに見つけて対応するために、自分たち、地域で出来ることってなんでしょうか。

山田（智）　いつも心がけていることになりますが、地域の親子にとって敷居の低い、第二の実家のような身近な居場所を作ること。そのためには親子と水平対等な関係を築き、本当の意味での心の拠り所となること。それを、お互いの学び合いを通して市内や道内の他団体の支援者とも共有していくこと。もちろん私たちだけでは足りないことは重々わかっているので、地域の様々な専門機関や団体の方たちとも繋がり、顔の見える関係をしっかり作っていくこと。言葉の上だけでの連携でなく、血の通った、必要な時にちゃんと繋がるための具体的な連携を一つひとつ丁寧に作っていくことと思います。今日、報告した研修交流会の内容を日々実践することで、親子の孤立を少しでも防いでいきたいです。

當間　ありがとうございます。

先ほどの報告にもあった、札幌市での屋台型・分散型交流会では、担当の人と直に話をして、例えば DV のところでは、自分が悩んでいるという方がいらしていたり、ひとり親のところにも当事者がいらしていたり、保育を利用して参加した人が子育て支援の専門家だったり。こういう場を続けていくことがいいんじゃないかなと思いました。

次は杉浦さん、お願いします。

杉浦　僕はあまり直球で母親というか親世代の支援ということはしていないですが、子どもたちが話していたりとかで、ときどき見え隠れすることがあります。なかなか入り込めないなと思う要素もあり、こちらから入り込んでいくことがなかなか難しい中で、早い段階で相談しやすい世の中というか、孤立しないでほしいというメッセージを出し続ける活動を、直球ではないけれども、していきたいという意識は持ってはいます。全て防げるとは思っていないですが、関わりを持てるチャンネルを少しでも増やしていくことかなとは思っています。

當間　場所を持っていらっしゃるということは、なかなか有利だと思うんですね。「あそこに行けば、なんとかなる」というか。ただ、そこまで行き着くまでに電車賃がないとか、暗くて嫌とか、あるかもしれないけれど、「あそこに行けば、なんとかなる」とひらめいてもらえれば。

杉浦　そうですね。子ども自身が行動できるなら、うちに飛び込んで来てくれるとかね。そういうことができそうな場所であるということは、意識していきたいですね。だから駄菓子屋は、そういう意識でやっていることです。

當間　ありがとうございました。
　加藤さんはいかがでしょう。子育ての相談がとても多いとお聞きしています。

加藤　そうですね。複合的なんです。虐待が起きているときというのは、例えば、お母さんが DV を受けているというときには、子どもだけに注目するんじゃなくて、お母さんは今どういう状態でここへ来ているかということも大事だなと思っていて。まず子どもさんが一人でうちへ相談に来るということは考えられないので、お母さんからそういう相談を受けたときに、子どもはどういう状態なのかということを見極めることが大事なこと。私たちは独自でやっているわけではなくて、本当に弱小ですから、いろいろなところと繋がっていて、私たちのネットワークづくりは団体と団体ではなくて、ある意味一本釣りしていくんですよ。行政でも、子どものことをなんとか救おうとして繋がれば、以降そこと繋がっていく。福祉課と繋がっていますといっても、なかなかそこと繋がり切れないんですね。福祉課のなんとかさんだったら、即（動ける）。砺波市とはだいぶんそれが出来るようになってきた。何かあって連絡すれば、すぐに動いて地域包括支援センターなどがなんとかしてくれるというのをありがたく思っています。
　それから、先週、種部恭子さんという富山県議会議員であり産婦人科医の勉強会をみやの森カフェで行ないました。そのときに、自分が DV をされている自覚がないという女の人が多いと聞きました。（暴力を振るわれたりするのは）自分が悪いと思ってしまう。その辺の啓発活動もやっていきたいなと思っています。それから富山で SNS での相談窓口ができたんです。種部先生の話の中で、「家出したい」と発信すると、泊め男というのが発生して「うちに来るといいよ」と呼びかける。これが一番危険。泊め男が発信する前に、こちらでストップをかけることが重要。「（家出したいと発信する）子どもを泊めるところを作るのよ」と、種部先生に発破をかけられました。また何かが始まりそうで、本当に大日向先生がおっしゃる通りで、忙しいです。そろそろ老後をと思っているのに、いろいろ次から次へとあって。（会場笑い）

當間　ありがとうございます。案外、知らないうちにいろいろなものを呼び寄せているとか。

加藤　そうです。

當間　一応一通りお聞きしました。
　あ、質問がおありですか？　どうぞ。

大日向　加藤さんにお伺いしたいんですけれど、一本釣りするって、本当にそうだなあと思って。行政の縦割りを崩せっていっても、無理なんですよね。縦割りに横串を刺していくのが、NPO だということはよく言われていて、なるほどと思ったけれど、どういうふうに刺していいかわからない。一本釣りするんですね？

加藤　そうです。（会場笑い）

大日向　一本釣りした人が、かえって組織の中で動きにくくなってということはなくて、ちゃんと動いてくれるんでしょうか？

加藤　その点は、動きやすいように心がけるというか、おだてていく。今年から民生委員児童委員もやらされることになって、始めてまだ 1 カ月なんですが、今まであんまり繋がりのなかった社会福祉協議会（社協）とすごく繋がるようになって、なんでもやるもんだなと思っています。もちろんこちらも、あちらの働きを認めると、向こうが動きやすくなってくれることがわかったので、おだててやっていきたい。

大日向　もう一つ、先ほど時間がなくて言わなかったけれど、「市民発　ごちゃまぜ　真剣　まるごと」、これは本当に地域のキーワード全部なんで、すごいキーワード、素晴らしいことだと思いました。多様化ってよく言いますけれど、多様化というのは逆に傷つきますよね。そこのところをどういうふうに乗り越えていくのかというのも課題ですよねと申し上げたいと思っていたら、先ほど加藤さんがおっしゃってくださって、「ごちゃまぜは大変だ」って。

加藤　大変ですけど、面白いです。

大日向　そうですか。ありがとうございました。

奥山　あ、質問が上がってきました。

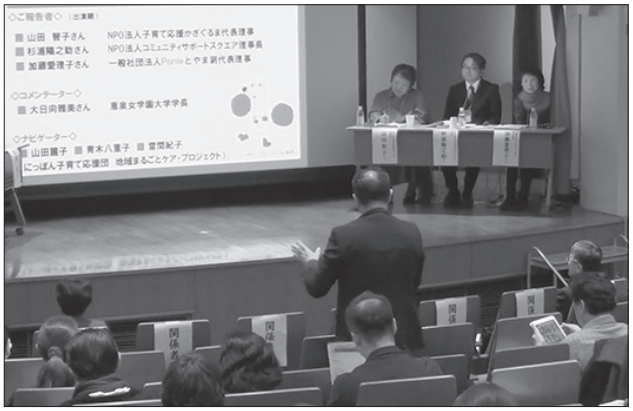
家森　一般社団法人 Ponteとやまの「みやの森通信」を作っている家森と申します。今日は貴重なお話をありがとうございます。大日向先生に質問をします。Ponteとやまの今年の抱負の中に「居場所の数を把握したい」という項目がありましたが、アウトプットに向けたインプットのやり方、データの集め方に

相当な工夫が必要だと思っています。大日向先生のお話に出てきたバックオフィスのなかで、役に立ちそうな事例があれば教えてください。よろしくお願いします。

大日向　難しい質問ですね。答えにくいんですが、私のやっている活動はデータ分析ではなかなか出ないものから始まっているんです。バックオフィスでも（担当する事柄やそれに対するスキルなどは）一人一人全部違います。例えば、講演会での企画進行を担当してくれる人に「誰か出来る人」と呼びかけてやってもらっているわけではないんです。一緒にいろいろな活動をしているうちに、何か“きらっ”と光るものを感じることがあるんですね。そこでその方にお願いしてみようと思ってやっていただくと、本当にすばらしい力を発揮してくださったりして…。私たちの年代はそういうアナログチックなところで動くんです。おっしゃるようなデータ分析というのは、若いときにはやったけれど、今はやってないの。ごめんなさい。（会場笑い）地域ってそういうところの集団。そこへあなたのような若い人が入ってきてくださって、アナログチックな個人技じゃダメだよって言ってくれるのを待っているの。（会場笑い）だから、ご一緒に勉強しましょう。（拍手）

家森　ありがとうございました。

奥山　どうでしょうか？　会場の方からも是非。



参加者　ありがとうございます。地方議員でございます。先ほどもおっしゃっていましたが、組織にどうやって横串を刺していこうかと思っています。お聞きしたいのは、うちでも居場所や学習支援もやっていますが、作れば人が来るというわけではなくて、本当に来て欲しい人にどうやって来てもらうかということが大事だと思います。どうやって来てもらうか。居場所を作っていろいろな人がきてくれれば、そこからさまざまなことができると思うんです。あたたかくて美味しい食事とか、何らかの来てもらえる要素があると思うんですが、来てもらうための背景というか、どのように感じておられるか、教えてもらいたいと思います。

杉浦　今、自分のところでは 2 カ所で学習支援をやっています。食事を出しているところと出していないところがあります。出していないところも週 1 回で 7 名、来ています。きっかけは、学習支援については市の生活福祉課という生活困窮の窓口の方からの紹介で、「こういうところがありますよ」「（お子さんの学力が）心配だったら、どうですか？」ということで、来ていただいているのが一つ。行政としては、サポートを必要としている人を把握していて、それ（サポート）をうちができるのは大事なことかなと思っています。あと、対象は別に生活保護ではなくて就学援助ということになっているので、じわっと口コミで広がっています。もう一つの古民家を使ってやっている方には校長先生が何度か遊びに来てくださって、「援助が必要な子がいるんだけれど、中学校に上がっていくと僕らは見られないので、ここに繋ぎたい」と繋いでくださった。何とそこは 7 人兄弟で、その子は 7 人兄弟の 4 番目。7 番目の子が小学校に上がったということで、全員来るようになりました。どこか繋がりから繋がって来るというのが、現実的で、ふらっと来るのはどこかで聞いて来た方。

山田　親子の来場のきっかけで、一番多いのは口コミです。公園などで、名前も知らない親子から紹介されたという方が一番多いです。次に保健センターの紹介。札幌市のこんにちは赤ちゃん事業（乳児家庭訪問事業）は助産師さんが各家庭に出向いているのですが、その際に「そろそろ親子で地域に出かけていくなら、こういうところがあるよ」と、区内の子育てサロンの情報が掲載されているチラシを置いてきているので、それを握りしめて出掛けてくる親子も多々います。

　また、今回の研修交流会の 12 ブースの屋台方式を考えるきっかけになった方で、当日もブースを担当していただいたのですが、市立幼稚園で区内の乳幼児親子の教育相談を受けている先生が、「様々な相談を受ける中で親子が安心して過ごせる地域の居場所を紹介したいが、実際に見たことがないので自分の目で確かめたい」とてんてんに来られて 1 時間半くらい情報交換した後、「これからは安心して紹介できます」と言って帰られました。その方とのやり取りを通して、連携先と顔の見える関係を築くことの大切さを実感したとともに、相手も連携先を探していて相手のことをちゃんと知りたいと考えていると実感しました。

加藤　17 回引っ越しています。17 回も引っ越していると、（どこにいても）自分は完全によそ者で、こういうところに誰か来

てくれるなんて奇跡だと思っています。来てくれるほうが奇跡だと思っていて、来ていない人にはあまり思いは馳せてなくて、来てくれた人がどれだけここで楽しい思いをしてくれるかという発想をしていると、その人がまた口コミで広げてくれて。5年半経ったら、知らない人の紹介で来た人も結構いて。それがお医者さんだったりするんですよ。こっちも、どうして知らない病院が紹介してくれたんだろうと、そういう不思議なことも起きています。そういう偶然と、相棒の水野さんが高校の巡回相談員をしていて。

参加者　スクール・ソーシャル・ワーカー？

加藤　いえ、発達で気がかりのある高校生の相談を教育センター所属でやっていて、そこからもカフェに来てくれます。そんないろんな繋がりの中で、「あそこに行ってみたら」ということで来てくれることが、とても多いです。

参加者　ありがとうございました。

當間　どうもありがとうございました。ちょうどお時間ということで、次に繋げていきたいと思います。どうもありがとうございました。（会場拍手）

閉会挨拶

にっぽん子ども・子育て応援団企画委員
前三鷹市長　清原慶子

みなさま、こんにちは。にっぽん子ども・子育て応援団の企画委員を務めております、前三鷹市長の清原慶子です。

まずは本日、長時間にわたりまして、熱心にご参加いただきましたみなさまに、心から感謝を申し上げます。どうもありがとうございます。

そして今日は、貴重な基調講演をしていただきました、我らが大日向雅美先生には、何よりも、先駆的な実践に基づいたお話をしていただいたことにお礼申し上げます。

そして、「ドカ雪」の札幌市から来ていただいた山田智子さん、岐阜市からきていただいた杉浦陽之助さん、砺波市から来ていただきました加藤愛理子さんには、前向きに、子ども・子育て支援に留まらない、さまざまな取り組みを開拓してこられた、生の実践をお聞かせいただきましたことに御礼申し上げます。

そして、この事業でございますが、清水肇子理事長をはじめ公益財団法人さわやか福祉財団の委託を受けて、『2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト委託調査の報告会』、みなさまとの交流会として、弊団が企画をさせていただきました。

「地域まるごとケア」とは、大変に難しい課題です。何よりも、「地域ぐるみ」で進めようと、キーワードとさせていただいたのは、「市民発」「真剣に」、「ごちゃまぜ」で「まるごとケア」であり、これらのヒントをみなさまに差し上げるということです。みなさま、受け止めていただけたでしょうか？
（拍手。次第に大きくなる）

無理やり拍手をお願いしたみたいですが。（ますます大きくなる拍手）

ヒントというのは、登壇者のみなさまが、まさにそれぞれの地域で、地域ぐるみで、まるごとケアの取り組みを目指して努力されているだからこそ提示できたのです。

「まるごとケア」の事例として、例えば、今日、大日向先生には、「シニア世代が子ども・子育て支援と出会うとき」と題した基調講演をしていただきましたけれど、私は「シニア世代を子ども・子育て支援と出会わせちゃった大日向先生」のお話を聴かせていただいたと受け止めました。

すなわち、シニア世代が子ども・子育て支援活動を開始するきっかけをもたらすには「仕掛け」が必要であり、シニア世代が信頼を得て真剣に取り組むには、一定の研修という「仕掛け」が必要です。しかも、参加者には「仕掛け」とは感じ取らせないような、そうした自己実現の取り組み事例を話していただきました。

私は、今日の報告会で出て来たいくつかのキーワードを、「自」という漢字で始まる言葉で受け止めることができました。

それは、「自分ごと」で、まるごとケアに参加する。でも、「自由」で、「自立」していなければならない。それを「市民発」で、（登壇した）みなさまは進めて来られました。そして、支援される人も、支援する人も参加者は「自己実現」の喜びを感じてくださっています。同時に支援する人は「自己啓発」の機会を大切にしていらっしゃいます。

そして、私は、この 3 名の登壇者のみなさま、そして大日向先生は、人を惹きつける磁石のような方々であると思いました。人々を吸い寄せるマグネット、磁石のようだと。

そのお人柄、何よりも自分の時間を削って、子どもたちのために、障がい者のために、シニア世代のために、子ども・子育て世帯のためにご努力をしてくださっていることを、会場のひとりとして受け止めることが、私にはできました。

もう一つの「自」の付くキーワードは、私もつい最近までは市長をしておりましたので、「自治体」の「自」がなくてはいけないな、こういうふうに思いました。（拍手）市民と自治体との協働がなければいけないなと思いました。

私は、市長時代に児童館を「多世代交流のセンター」へと名前を変えましたが、「ごちゃまぜセンター」にすべきだったと、今は後悔をしております。（会場　笑い）

やっぱり子どもは、シニア世代と出会い、そしてシニア世代は子どもと出会うことによって生きる勇気、生かされる感謝を得られるんだと思います。

どうぞ、みなさま、今日の報告会を通じて得られたものを、それぞれの地域で、「市民発」、そして「真剣」に、「ごちゃまぜ」の「まるごとケア」として、魂を入れていただければ幸いです。

結びに当たりまして、ご参加いただきましたすべてのみなさまに感謝いたしますとともに、「にっぽん子ども・子育て応援団、これからも応援してください！」とお願いをして、閉会の言葉といたします。今日はどうもありがとうございました。

2020 年 2 月 8 日
2019 年度地域まるごとケア・プロジェクト
調査＆交流会開催報告会
参加者アンケート

参加者数 78 名　回答数　29 名　回答率　37%

1．このフォーラムをどこでお知りになりましたか？

・応援団メールマガジン（10）・友人・知人からの紹介（５）
・応援団からのメール　（４）　　・他団体からの紹介（４）
・チラシ（２）

2．報告会の感想をお聞かせください。

・大日向先生のお話がとても勉強になった。地域での男性の参加､巻き込みの方法を活用したい。潜在的な力を感じた。(5)
・中高年の男性を巻き込んでいくことの大切さと重要さを感じた。かかわりのきっかけ作りの大変さを想った。関わり人はたくさんいるので、第一歩がでれば、何とかなると思った。
・男性の子ども・子育て・家族支援養成講座にチャレンジしたい。「ごちゃまぜ」わが団体もまさに同じで 20 年以上やってきた。どこにもわかってもらえず、お金もまわってこないまま楽しんでいる。
・男性の巻き込み方に悩んでいたので、「あい・ぽーと」の活動を楽しく聞かせてもらった。
・広場としての価値観をそろえることが第一歩だと思っているので、「まちプロ養成講座」の内容に興味がある。
・大日向先生の声のトーンが心地よく、いつまでも話を聞いていたい感じだった。
・いろいろなスタイルの実践報告は大変参考になった。ヒントをたくさんいただきました。
・実践報告がとても参考になった。自己実現、自己啓発に自治体も関わるべきことが納得できた。
・目の前にいる人に何かできることはないか、という思いで突き動かされているパネラーの皆さんの活動が本当に地域に必要とされていると感じた。
・加藤さんの考え方に納得できた。「ないもの」ではなく、「あるもの」に目を向けていくことで、出会いが生まれる。加藤さんの「一緒に生きていけたらいいなぐらいで」が印象的だった。
・加藤氏の話を聞き、「田舎にある大きな家をなんとか使えないか」と心が動いた。
・参加して心がほっこりとなった。「みやの森カフェ」の話はとても興味深かった。
・自分の住む地域も札幌と似ている部分があり、共感を持って「かざぐるま」の話をきいた。
・どの団体の方もとてもしっかりした考えの元に行動、実現されていることがすごい。
・現在、考慮中の子育て支援策についてかなり関連性があったので、参考になった。考えの整理ができた。
・登壇者の方々のような活動が自分の地域にももっと広がっていけばよいと思った。
・皆さま、いろいろと考えて楽しく活動していると思った。
・すばらしかった。「まるごと」の 4 文字にすべてが凝縮されている。励みになった。
・ごちゃまぜの可能性について考えさせられた。
・いろいろな支援の方法があることが興味深かった。
・私が目指しているものにつながった。
・やってみたい、おもしろそう、の気持ちが大切。
・「きょうだい児」の言葉の意味を始めて知った。
・今日、知ったことを多くの人に話していきたい。
・21 世紀の少子高齢化社会をつまびらかにし、一人一人が地域の中で活躍できるようなメニューを提案してくださった。
・「ともにたたかう仲間」「ビジョンを持つ」が心に残った。
・昨年のキーワード、ＴＴＰ（とことんパクる）を実践していきたい。

3．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

・これから新しくつくる居場所づくりも、市民発・ごちゃまぜ・真剣・まるごとケアをめざします！（2）
・子育て支援拠点のスタッフとして働いているが、色々なつながりを求めていこうと思った。(2)
・子どもは社会の宝物。子育てを楽しいと思える親が増えていくような地域にしたい。(2)
・あまり身構えないでしかけないで、そのまま向き合うことを大切にしたい。
・「じゃあ、あなたはどうするの」が引き続き問われていると感じた。
・虐待予防のために、地域のネットワークづくりをしていくことが必要だと感じた。
・まるごとケアを考えると、個々ではなく、さまざまなところの問題がつながっていると感じた。少しずつ考えていきたい。
・地域の声に耳を傾け､ビジョンを持ちながら頑張る､そういった支援者になって優しい地域にしたい。
・誰でもできる、どこでもできる地域まるごとケアのうねりは昔から続いている。消さないことが大切。
・私たちのＮＰＯも「ごちゃまぜ」いろいろな形で独立させて活動している。また、やりたいことを見つけた。
・行政をどう取り込むか、特にタワマンのような住居空間にいる市民をどう巻き込むかが悩ましい。
・ごちゃまぜを地域に広げていくために頑張らなければ！
・生きがいを実現できる地域づくりを目指している。誰もが支え手になれる、たとえ認知症になっても活躍できる地域が理想。
・仕事で子育て支援をしているが、自分が地域で何かできるのでは、と思った。
・それぞれに役割がある。それぞれが「当事者」である。
・今後はごちゃまぜの形が増えるのでは、と思った。
・微力でも無力ではないことを信じて、少しずつやっていきたい。
・「あそこに行けばなんとかなる」広場づくりをしていきたい。

4．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご提案などがあればお聞かせください

・もっと自治体に声をあげてください！
・ユニークな中高年参加の子育て支援の事例をたくさん紹介してほしい。
・一年に一回、ここへ来るとパワーをいただいて帰れます。
・力強くがんばってください。
・九州でもこういった交流会を開いてほしい。
・もっと広報してもらうと良かった。難しい会と思っていたが、来て良かった。
・他団体とリンクした活動を。

2019年度地域まるごとケア・プロジェクト　報告書

2020年 3月 31日発行
発行所：にっぽん子ども・子育て応援団
郵便番号 162-0853
東京都新宿区北山伏町 2-17ゆったりーの共同事務所内
電話＆ FAX　03-3269-3314
Mail:info@nippon-kosodate.jp
URL:http://nippon-kosodate.jp/
デザイン：認定 NPO 法人びーのびーの　地域 remix

この報告書は、公益財団法人さわやか福祉財団からの委託事業により作成いたしました。
(c) Nippon Kosodate Ouendan 2020,Printed Japan
この報告書の無断転載・複製は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

この報告書は公益財団法人 さわやか福祉財団の委託により制作しました。